
伊吹さんの真相

倉田（改修1A型）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伊吹さんの真相

【Zコード】

Z4525P

【作者名】

倉田（改修1A型）

【あらすじ】

日本で退魔師として生活していた田口伊吹は、敵の魔術師の攻撃を受けて異世界へと転生してしまいました。

このお話は、転生した田口伊吹が世界を裏側から操りつつと画策する魔族のボスを倒した後の平和な日々を描いています。

プロローグ

杉の木が数メートル間隔に生える針葉樹の森。第一次世界大戦時に大量伐採され、はげ山になつた山々を再生させるべくして大量植樹された針葉樹は、植生域や森の保水効果などあらゆる問題を無視し強行した結果、花粉症や水不足、漁獲高の減少といった新たな問題を発生させている。

自分は真夜中の二時というのにも関わらずその針葉樹の森の中にいて、黒い大きな犬と十メートル程の距離を挟んで向き合つていた。犬は体長二メートル、体高一メートルはある巨犬な犬で、鋭い牙を上顎から剥き出しにしている所から狼といった風貌だが、分類した何処かの誰かさんには犬に見えたらしい。一方自分はとすると、詰め襟の黒い学生服にオリーブ色のメッセンジャーバッグを襷掛けし、拳銃を犬に向けている。どちらも日本の夜の森林にいてはならない存在だろう。

だが月明かりはそんな事にはお構いなしに木々の隙間から自分と黒い大きな犬一匹をぼんやりと照らしてくる。

その微かな光源の下、黒い犬は口から長い牙を覗かせグルルルと時折唸りながら首をこちらに向けて自分を睨んできており、今にも飛び掛かられそうな具合だ。

ただ、この黒い犬は自分にとつて見慣れた敵で、今まで何十匹も倒して来ている。恐れる事などない、油断さえしなければ容易に仕留められる存在だ。

自分は両手で保持した黒いセミオートマチック拳銃を冷静に犬に向ける。犬はその大きな体躯を無防備にもさらけ出しあり、非常に狙い易い。銃の照準を腹部に定め、引き金を引いた。

乾いた銃声が静寂だつた森に二度響くと、黒い犬は形状を維持出

来ずに霞の如く消滅していった。

今日は、森で野宿だな。犬を倒した場所からすぐ傍にある、真つ直ぐに伸びた大きな杉の木を背もたれに、自分はしばしの休息を取る。

「やはり、背中が痛いな……」

数日前、日本政府が運営する警戒監視網によつてあの黒い犬、正確に述べればその魔力が探知された。探知された魔力は魔力量に基づく等級が付与され、民間人に被害が出る前に討伐すべく宮内庁に所属する自分が派遣されることとなつた。

自分は田口家固有の能力、【物質創造】を使用しSIG S A U R社のP 2 2 8という拳銃を創造及び利用して討伐を成功、今に至る。何だかこの言い草だと自分はあたかも何でも創造出来るようにも聞こえるが、世の中そこまで都合がいいものではないのでここに断つておく。

田口家の固有能力【物質創造】は条件を満たさないと使えない。また、家族でも一人たりとも同じ条件の人間はいない。例えば曾祖父は見た事がある物ならば同時に四つまで【物質創造】出来るという反則的な能力だが、祖父は触れた物に限定され、父は金属のみ、自分に至ると拳銃一丁しか創造出来ないのだ。こう述べていると世代を経る毎に弱体化しているように思えるかもしけないが、我が兄は地球上のあらゆる物質と接触すると対消滅という現象を起こして物質をエネルギーに変換、つまり消してしまえる反物質という危険物を創造出来るし、我が姉は武器と彼女自身が見做した物ならあらゆる物を創造可能。我が妹ともなると小型擬似天体が【物質創造】出来るというものはや創造ではなく想像の部類に入るような能力を保有している。

つまり自分が家庭内部で圧倒的弱者の立場にある訳で、昔は戦術次第でどうにかなつた妹との模擬戦も今では小型天体小さなブラックホールや太陽が飛んで来るのでによる弾幕を回避するので精一杯だ。

「はあ」

才能の分配率が家族間で余りにも不公平な現実に、また自らの弱さに落胆しながら目を瞑つていると、不意に睡魔が訪れ、次第に意識が薄れていった。

太陽が地平線下にある、紺青色の空。携帯電話のアラームで五時ジャストに目を覚ました自分は、立ち上がって伸びをする。杉の木に寄り掛かつての寝心地は大変悪く、背中からゴキバキと嫌な音が聞こえた。やはり寝袋程度は持つて来るべきだったかと後悔する。討伐依頼が届いたのが昨日の午後六時。それから学生服を着替えもせずに慌ててオリーブ色のメッセンジャーバッグを引っ提げこつちに来てしまったからな。寝たばずなんだが、寧ろ疲労した気がする。まあ、今日は幸い祝日だ。帰つたらゆっくり寝よう。

自分はバッグから五百ミリリットルペットボトルに入ったミネラルウォーターを飲んで寝起きの不快感を振り払い、電車で朝帰りをすべく帰路に着いた。

電車を何度も何度も乗り換えをし、我が家のある国ヶ原市に到着したのは日も高く昇つていてるであろう午前十時だ。あいにく梅雨シーズンが到来したせいか曇り空だが、自分は晴れより曇り空の方が個人的に好きなので問題はない。ただし、湿度が高くなつてジメジメ

メしてくると晴れた方がいいと思う程度の好みだが。

新幹線が通過する程度の規模はある国ヶ原駅を抜けると、典型的だが商店街が広がっている。郊外に出来たショッピングモールに客足を奪われ、若干寂れている商店街。これも今の日本では典型的なのだろう。聞く事のないシャツタード群を通過し半時間程歩くと、我が家である五階建ての小さなみすぼらしいマンションが隣の最近建築されたファミリー向け高層マンションに圧倒されている姿が見て取れた。

エレベータすらない我がマンションに不満を抱きながら少し鍔が見え隠れする階段を五階まで登り、部屋のドアの鍵を開けて中に入る。中の構成は洋室二つにリビング、キッチン、トイレ、お風呂付き。まあ、悪くない広さだ。

玄関から大して長くもない廊下を通つてキッチンと一体化しているリビングへ足を運び、黄色い四人掛けソファにダイブする。ああ、疲れた。このまま寝てしまおうか……ん？ そういえば同居人はもう起きたのだろうか？ 重い体を起こして廊下へ逆戻り。右手にある木製のドアから聞こえる健やかな寝息を聞くに、まだ同居人は寝ているらしい。

同居人の名前は速水光。^{ハヤミ ゴウ} 同じ退魔師である。しかし自分とは違い、光は退魔師でも名前が知られる程有名な存在だ。

特別なゆかりのある（らしい）日本刀を使い熟し、その圧倒的な剣技、力、速度で敵を易々と倒していく姿は畏怖すら覚える。それは自分以外も感じているようで、他国の退魔師に“サムライ”と聞けばこいつの名前が返つてくる程。無論、日本でも（表では）一、二を争う力を持つ。

しかもイケメンで優しいと来たもんだ。危ない目に会った女の子を退魔師の圧倒的な力（いいのか？）で何度も助けフラグを立てまくっている。ただ、光自身は自分が危ない仕事に就いてるからと彼女を作ることを拒んでいるのだが、その曖昧な態度が、ハーレム拡大の原因になつてているのだ。光に惚れた女の子が可哀相でならない、

いつそ光をイスラム教徒にしてしまおうかね。

しかしそんな彼も朝は苦手なのだ。いつも自分が起こし、朝食まで作る。まあ、嫌ではないのだが何故あれだけ完璧なこいつが朝だけは苦手なのだろうな。フラグ作りに役立つのか？

あれ、何故光の部屋の前にわざわざ立つているのだろう？　ああ、そうか。光は今日学校に用事があるんだつたな。

「はあ」

思わず天井を見上げ溜め息をつく。何というか、無意識に光を起こしに体が動いてしまう事に軽く絶望したのだ。

「光、朝だ。起きてくれ」

絶望感をひた隠し、ドアを叩いて起床を促す。

「ん…あと少し」

「もう十時過ぎてるぞ。確かに今日は生徒会の集まりがあるとか言ってなかつたか？」

「ええ！？　集まりは九時からなのに…　何で起こしてくれなかつたの！？」

「え……だつて、昨日は依頼だつたんだ。仕方ないじゃないか」

遅刻だ！　と喚きながら光は自室から飛び出し学校へ向かう準備を始める。そななにだよな、光は生徒会の役員で、まだ一年生というのに会長になるという噂まである。つまり、勉強も抜群に出来る文武両道な奴なのだ。

自分達が通う国ヶ原第一高校は、自分みたいに少し力のある人ばかりが通っている。よって、世界トップクラスの実力がある光が会長に選ばれようとしているのはまあ順当ではあるんだがな。

「ほら、朝食は抜かすな」

朝は食べないと駄目だ。髪を所々はねさせたまま玄関へ駆けていく光へ、準備でどたばたしていった間に焼いておいたトーストを投げ渡す。

「サンキュー、行つてきます！」

「ああ。気をつけてな」

バタンと乱暴に扉を閉じて光は行ってしまった。慌ただしい奴。ふう、光の帰りは遅いし暑いし、お昼は適当に素麺でもするかね。ピピピピピ。襷掛けにしたメッシュバッグに突っ込んだ携帯電話が鳴り出す。この単調な電子音は仕事の依頼だ。バッグから携帯電話を取り出し、応答する。

「近くに黒魔法の使い手が出た。身柄を捕らえろ。場所は双子山、報酬は五百、生死は問わず」

「了解」

電話の相手は政府の役人。退魔師関連の仕事をする公務員は出世出来ない代わりに、高い給料を貰っている。対して退魔師の仕事は強制、固定給。ボーナス有り。公務員が羨ましいよ。また、退魔師は異能者が犯罪を犯した時裁く役目もある。あまり気は進まないが仕方がない。嫌な話ではあるが、こういうノルマ外の仕事は別途に給料が支払われる。自分で稼がなくてはならない以上、あまり仕事にあれこれと文句を付ける訳にもいかないのだ。

学校では光の活躍で目立たないが、実戦で使える退魔師は学校には少ない。実は自分は学校ではまあまあ強い方だつたりする。だからこそ、生死は問わず（テッド・オア・アライブ）の案件が回つて来るのだが。

戦いの準備を始めようと装備を整えるベリービングから横開きの戸を開けて、自室に入る。邪悪な力を纏めて黒魔法と日本の省庁は呼ぶので何がいるかはわからないのだ。相手がわからないのは、大変困るね。創造で使う銃と同じ規格の銀の弾丸が入ったマガジンや色々な効果がある札を追加で持つて行く事にしよう。

また、遅くまでかかりそうな仕事だ。光には外食や出前でも食べて貰うか。

準備を完了した自分は休む暇なく自宅を後にした。

双子山は国ヶ原市郊外にあり、標高五十メートル前後の山が二つ並んでいる事からその名前が付いたらしい。

木々は以前は林業が行われていたお陰で手入れされていたそうだが、今は外国からの輸入品に負け荒れ放題だ。

もうじき日が暮れる。お昼から索敵し続いている自分は創造した銃を構えた左腕を学生服の内に隠し、疲労した体に鞭打ち歩みを進める。

おつと……見つけた。双子山の山頂附近、木に寄生する何とかと、いう虫が繁殖した際に纏めて木々が伐採され、今では雑草の生い茂る地点。そこに黒いローブを着て、雑草を刈り払い何やら魔法陣を書いているあからさまに怪しい御仁がいる。ただ、自分と魔力の格が違う。勝てる訳がない。違うというか、もはやあの黒ローブと自分の魔力を比べたら自分の魔力は小数点以下だ。

まずいな、自分では殺される。

バッグから携帯電話を取り出し光に電話する。

「伊吹、どうしたんだ？ 今日の夕食なら素麺がいいな」

「馬鹿、違う。双子山にやばい魔法使いがいて敵いそうにない。来てくれないか」

「わかった、十分で着く」

光は一流だ。仕事だと理解した途端、声が鋭くなつた。こういう面もあるので、ハーレムなんてふざけた物を構築していくも男子からの評判は……まあ、呪詛を送られたりとかは時々しかない。

自分が思索から抜け出し、再び黒ローブへ目を向けると奴はこつちを見詰めていた。おつと、まずい。

「……モウジユンビ、デキタカ？」

ちつ、気付かれたか。

勝ち目はない。銃を乱射し山を一気に駆け降りていく。

「ハハハ、ニガサナイヨ！」

スピードまで相手が上か、最悪だな……。みるみると距離が縮まつしていく。このままじゃ殺される。何とか時間を稼がなくては。会

話を試みる。

「おとなしく捕まれ！ そうすれば死なないですむぞ！」

「キミガワタシヲコロス？ ハハハハハ！ オモシロイジヨウダ
ンダ！」

返事は火球か！ 無礼な奴め！

三十ばかり放たれた、橙色の炎の塊。サッカーボール程の火球の内、自分に当たる危険のあるものだけを七つばかり銃で撃ち落とす。

「アマイネ！ ウチオトスピツヨウナイト！」

何い！？ いつの間に移動したんだ！？ 後ろから、黒魔法使いが火球を放つてきやがる。素早い奴め……。

火球が自分に直撃しているのを、木の上から眺める。

「甘いのはお前だよ」

倒されたのは、自分の身代わりを作り出す幻想の札で出来た偽物。銃を発砲した際に閃光の札を使って銃のマズルフラッシュと誤認させながら黒ロープの視界を奪い、その隙に幻想の札で身代わりを作成し木の上へ退避したのだ。そして身代わりを攻撃し仕留めたと勘違いさせて警戒心が薄れた所を上から銃で蜂の巣にする予定である。ん？ 何かおかしい……。

「ワタシガミヤブレナイトオモイマシタカ？」

「がつ……！」

奴は……あえてこつちに乗つて来たのか……。一瞬の内に移動し真後ろから放たれた火球が体を焼く。一発だけではない、高さ十メートルの高さから落ちていく自分に複数発は当たつただろう。意識が途切れなかつたのは幸いだ。

地面に落下と同時に痛みを堪え四肢を踏ん張つて横に飛び、木を火球の射線上に挟む。

「オソイヨ！」

「くそつ！」

何で速さだ。もう目の前にいるなんて。だが近付き過ぎだ！ 拳

銃を五メートル以内の至近距離から乱射する。これだけ近ければ狙

いを付ける必要もない。

「ハハハハハ！ ソンナナマリダマ、アタリツコナイヨ！」

「こいつ人間か！？ 弹丸十三発を全て左右にステップを踏むだけで回避しやがった。」

「フフ、モウ、オワリダヨ。オロカナオロカナ、タイマシサン」

黒ローブは右手を真上に掲げ、火球を二十発以上を空に浮かせて愉快な声をあげる。すっかり日の暮れた双子山を、大量の火球が明るく照らす。

「凄いなあんた。あらゆる面で実力が突出している。自分はとても敵わない」

「ハハハ。ホメテモムダダヨ。キミハココテシヌンダ」

「いや、ほめてる訳じゃない。ただ少しあんたの注意をこちらに引き付けておきたくてね」

「！？」

瞬間、黒魔法使いの左腕が切り落とされ、空に舞つた。

「アアアア！！ オノレエエエ！」

黒魔法使いの悲鳴が辺りに響き渡る。

「助かつたよ、光」

自分の前には血が一滴たりとも付いていない日本刀を右手に持つて立つ、速水光の姿があつた。

黒ローブが滞空させていた火球が制御を失つて地に墜ち速水光の真後ろで爆発したのは、自分が正に死んでしまうピンチに瀕した時に都合よく現れた事といい狙つてやつているのかと勘織りたくなるがまあ助かつたからいいや。

「友達なら当然だろ伊吹。援護は任せた！」

そして光は援護しろと意味不明な台詞を残して視界から消え、次には黒魔法使いの間合いに入る。一撃。黒ローブはどさりと倒れる。お前に援護などいらないじゃないか。

「あ、もう終わつたんだ？」

「会長、もう終わりです。光の独壇場ですよ」

田の前には茶髪をストレートに背中の半ばまで伸ばした男が現れた。彼は桐生優^{キリュウユウ}。現在の生徒会長であり、退魔師界では“パーエクト”と呼ばれる。日本で光と一番を競う実力だ。

“パーエクト”の名前はあらゆる魔法を使い熟すことから呼ばれている。つまり、遠距離最強。近距離型の光と組むと恐ろしいまでに強い。ただ強さには羨望を覚えるが、“サムライ”だの“パーエクト”だの恥ずかしい名前は勘弁したい。ついでに彼はとびきり美しい女顔な事でも有名で、背中の半ばまで伸ばしている艶やかな茶髪と相俟つて誰も彼もが初見では美少女と勘違いしてしまう。そこのせ女と間違われると怒り出すのだから理不尽だ。髪を切ればいいだろうに。

まあ、それはそれとして。あの“パーエクト”がいれば自分の援護は要らないな。思えば、これが油断だつたのだろう。

「ク、オ……オマエタチモミチヅレダ！」

黒魔法使いの魔力が十数メートル離れた場所にあるさつきの魔法陣へ流れ、発動。黒い光を放ち出した。

「会長！ この魔法陣の効果は何ですか！？」

「わからない！ だけど空間に作用するみたいだ！」

身の危険を感じ咄嗟に防御の札を使う。魔法陣と自分の間を阻むように、うつすらと青い半透明な壁が生まれた。これで自分は何とかなるが、あの二人は大丈夫だろうか？

二人に目を向けるが、杞憂だったようだ。光は会長の展開した防御の札よりも遙かに強固な【魔法障壁】で守られている。

「しまつ……」

二人に目を向けていたその時、何かに急激に引き寄せられる感覚に襲われる。魔法陣に吸い込まれ……！

「……夢、か」

自分に何かを向かつて叫ぶ一人の姿を最後に、私は目を覚ました。

一、郷愁の朝

「……夢、か」

私は目をパチリと開き、赤茶と焦げ茶、二色で構成された煉瓦の天井を視界に納めた。

何故だろう、天井に親しみを感じる。この天井を見るのは久しぶりなような気がしてならない。

「田を覚ましたつ！」

突然耳元で大声が上がる。迷惑だな、起きたばかりにうるさいじゃないか。一体誰？ 首をクルリと曲げると、明るい緑色のセンターの上によれよれの白衣を羽織つた格好の若い実直そうな男が、私へ目にクマをこしらえた疲れた顔で微笑みかけている。彼は確か、医師をしているフィアウルさん。その彼がどうして私の寝ているベッドの枕元でしゃがんでいるのだろうか？

「アレシア……アレシアあつー！」

私の下半身辺りから聞こえた女の声。今度は誰だ？ 何だか声が掠れているようだが……いや、ちょっと待てよ、この声は……？ まさか、信じられない。

私は上半身をベッドから跳ね起こして彼女の姿を確認する。

彼女を田にした瞬間、私の頭は真っ白になつていた。

「お母さん……？」

ポツリと、頭に浮かんだ単語が口から抜け出す。

「そうよー、あなたのお母さんよー！」

お母さんは椅子から勢いよく立ち上がり、飛び掛かるようにして私の頭をその胸に抱く。お母さんの胸に顔を埋められた私は心が懐かしさでいっぱいになつて、気付いたらむせび泣いていた。

一年と数ヶ月程前の事だ。私は六歳としては異例ながらも転生した人間としての知識と経験を生かし、ロミリア共和国の最高学府である学園へと飛び入学した。そこで生活はとても楽しく、有意義な物だった。特に、親しくさせて貰つていたサハリアおね、こほん、サハリアさんとファルサリアさんとの学生生活は転生前の退魔師人生では味わえなかつた親しい人間関係を構築出来てたんじやないかとすら思えた。

しかしそれをぶち壊しにしたのが、魔族の存在だ。彼らは自民族の繁栄の道を、自ら以外を排除する事によつて成し遂げようとしたのだ。

彼らは狡猾かつ陰湿だつた。各國政府に内通者を仕込み、それぞれの国の国民感情を煽つた。

人々は残念ながら魔族に扇動されてしまい、二大強国ロミリア共和国とペロポネア帝国を筆頭とする各國が戦争を開始してしまつた。

そんな中私は偶然にも魔族の存在に気付いてしまい、また魔族も私が気付いた事を察知した。これが全ての始まりと言えるだろう。

私の情報が魔族の本拠地に通達される前に情報保持者を殺害し、

身動きを取りやすくなる為に私は死んだ事にした。

そして私は一年数ヶ月を世界各地の搜索に費やして魔王とも呼べる存在の息の根を止めたのだが……。

魔王を倒した所までは覚えている。だがどうして私は自宅にいるんだ？あの島からここまでは、短めに見積もつても三千キロはあるぞ。

でも、今は考える事は後回しにしたい。魔王は死んだんだ。もういいじやないか。

お母さんのそれほど豊かとは言えない胸だが、一通り泣いて落ち着いた今では恥ずかしい。私の涙でぐしょぐしょになつた毛糸で編まれた淡いベージュのワンピースから、というよりその内部の膨らみから離れようとするが、お母さんにがつちりと頭をホールドされてしまつていて。となると今度は逆に、こんな事を気にしているとは思われたくない若干の意地と、もう少し位甘えても罰は当たるまいという本心が私の胸中を支配し始めた。

お母さんの胸の中にいると、何故だかとても安心するんだ。心が安らぐ。体勢からすれば、ベッドから上半身を起こした少女の顔を成人女性が胸に押し抱いているという、死角まみれで即応性にも欠ける簡単に殺害出来る体勢なのだけ。理性とは違う、何か本能的なものの働きなのかな？ま、考えるのはいいや。あと少しだけ、こうしていよつ……。

「良かつたわ……アレシアが生きてて」

上擦つたお母さんの声が私の耳に届く。

「本当にう。儂にはまだ実感が湧かないわい」

「のしわがれた声は、お祖父さんだ。その声も心なしか感情が高ぶっているように思える。お祖父さん、元気にやっていたかな。ちやんと果物食べてビタミン摂取してたかな。

「僕も驚きましたよ。アレシアちゃんにまた会えるなんてねえ。これも、ディーウアさんのお陰ですね」

「ん？ ディーウア？」

「そうだったわ。あなたがアレシアを連れて来て下さったのですものね。ありがとうね、ディーウアちゃん」

「良いので御座こますよ。アレシアちゃんも望んでいたでしょう」

会話の流れとしては最後に発言した彼女がディーウアなんだろうが……私の知ってるディーウアと違うんですけど。感傷に浸つてた気分がすっかりディーウアらしき人物のおかげで吹っ飛んでしまった。

「そんな事言わんでくれよ、ディーウアさん。儂らは君に非常に感謝しているんだ。何度も感謝してもたりない程ね、何か望みがあるなら出来る範囲で恩を返させて貰いたい」

「では……と、少し考え込んでからディーウア（仮）は躊躇いがちに口を開いた。

「もしよろしければ、この家に数ヶ月の間住まわせて頂けないで御座いましょうか？」

まあディーウア お金持つてないし、そつせざるを得ないよね。それはいいとして、こんな丁重な言葉を使うなんてディーウアらしくない。でも、声は間違いなくディーウアだよ。どうこう事なの？

「それだけでいいのかい？」

お前は一体何者だい？ 私は強く押し付けられたお母さんの胸部から無理矢理頭を回転させて片方の耳をディーウア（仮）の声がする方へ向ける。

「はい。駄目……ですか？」

狭い部屋の中、ファイアーウルとお祖父さんの間に立っていたのは茶髪を肩にかかりそうな位まで伸ばした十五歳前後の可愛らしき少女だった。つて、ちょっと待て！ お前は誰だ！？

「そんな事ないわ。大歓迎よ、ねえお義父さん

「勿論だよ」

咄嗟に叫んでしまつたが、幸いお母さんに強く押し付けられてたのでムゴムゴと僅かに口から意味不明な音が漏れただけで済んだ。

「ありがとうございます！」

頭を下げるディーウア（仮）。その頭を上げる時に耳が合つ。二口りと微笑み掛けられた。

「さて……そろそろ僕は帰りますね。診療所に行かないといけません

頃合いだつたらしく、フイアウルさんが立ち上がりおことまの意を告げる。すっかり存在を忘れてたが、彼はどうじつにいるんだろう。

「フイアウル先生」めんないな。アレシアの為に徹夜をせりやつて

フイアウルさんにお礼を言つお母さん。発言からすると、私は何処か病氣だつたり負傷したりしてゐるのかな。

「何言つてゐるですか、患者を助けるのが僕の誇りなんですからむしろ呼んでくれて嬉しいんです。それにアレシアちゃんにも会えたしね」

やつ言い終えたフイアウルさんは、ではお大事にと言つて残して部屋を出て行つた。

「ああ、マリーさんはアレシアと一緒にいてやりなさい。儂が見送るから」

「やうはいかないわ。先生には無理させつけたんだもの。ディーウィアちゃんアレシアをお願い」

「任せとこませ」

お母さんは名残惜しげにゆーつくつと私を離し、ベッドに横にせりシーツを丁寧に掛けてくれた。うーん、ベッドよつお母さんの方が色んな意味であつたかかったな。

「大丈夫よ。すぐ戻つてくるわ」

私はそんなそぶりをしたつもりはなかつたのだが、不安げにでも見えたのだろうか。私の肩に手を添え、安心させるようにお母さんが声を掛けてくる。

私はそれいうなづく事で返答すると、お母さんとお祖父さんはファウルさんの見送りに部屋を出て行つたのだった。

一、「ディーウア（仮）

お母さんとお祖父さんはフィアウルさんの見送りに部屋を出て行った。

室内には窓際のベッドで上半身だけ起こした私と、部屋の左右の壁に沿つように配置された木製の戸棚と本棚の間に立つディーウア（仮）だけ。

私はディーウア（仮）と二人きりだ。

一人きりで話せる機会はこの先当分ないと考えた私は早速質問する。

「あなた、本当にディーウアなんですか？」

ディーウアは元々最新鋭スティルス戦闘攻撃機として【物質創造】した純然たる兵器であり、人型にモードチェンジ出来るようにはしたとはいえ、それは魔力消費を抑える目的だった為なので身長十七センチ位のちびっ子だったはず。それがどうして年齢十五歳前後の美少女となっているんだ。

「御主人様は私をお忘れになられたので御座いますか？」

いや、忘れた訳じゃないよ。確かに顔や体格からしてちびっ子の時のディーウアを今位大きくすればちょうどあなたになるんだろう。

「いやでも、何でおつきくなってるんだ？」

転生前の口調に戻つて質問する。特別どちらの口調が良い悪いという気持ちはないが、ディーウア相手にはこっちのがしつくつくるのだ。

「何をおつしやつているので御座いますか？　御主人様が私に魔力を流し込み過ぎた故の結果で御座いますよ？」

あたかも私のせいと言いたげな物言いだね。

「どういう事?」

ディーウアに事情をただした所、こういう事らしい。

魔族の王と戦闘後、私はいきなり倒れてしまつたらしいのだが、意識を失う直前にディーウアを【物質創造】したそうだ。しかし私が加減を間違えたらしくディーウアに流入した魔力が余りに膨大な為、制御が付かなくなりそうになつたとの事。よつて身体を敢えて成長させ魔力を消費する事にし、ついでに知識も手に入れたらしい。ディーウアに当時の説明を受けて、ぼんやりと記憶が戻つてくる。そうだ、確かに私はぶつ倒れてしまつたんだ。だからフィアウルさんがいた訳か。

「よく分からないな。何故大きくなると魔力制御が可能になるんだ?」

「私の操作可能な魔力量には限界が御座います。また、私の体内に蓄積可能な魔力も限られております。故にこの姿になつたので御座います。しかし、ならなければおそらく……」

ディーウアは真面目くさつた顔で、両手を胸の前に持つて行く。

「恐らく?」

そして両腕を大きく開いた後、一気に閉じた。手を打ち合わせた音が室内に響く。

「バーン、と破裂したかと」

ディーウアが炸裂する光景が頭に浮かぶ。流石に内臓があるとは思えないが、凄惨な光景になるのは間違いないだろうな……うえ、想像するんじやなかつた。

「その為、身体を成長させる事に致しました。身体が大きくなつたからで御座いましょうか。蓄積可能な魔力量が大幅に増加したのも良い方向に働きました。以上が理由となります。納得頂けましたで御座いましょうか御主人様」

「……納得した。それは仕方ない」

想像したらディーウアの置かれた状況を克明に理解したよ。体が

炸裂しかけてたんじゃ大抵の事は許すしかないだろ？

「御理解頂け何よりで御座います」

となると、ディーウアが私をここまで運んで来た訳か。なら、礼を言わないと。

「あー、ディーウア」

ち、中々言いにくい。面と向かって言おうと思つたのに、ついそつぽを向いてしまう。

「何で御座いましょう」

「えーと、だな」

「ええ、こんなの簡単じゃないか。

「はい？」

「その、何だ。助かったよ。あ……ありがとう」

く……頭に血が上つて来ている。何でだか知らんが、敬語でなら臆面もなく言える感謝の言葉がひどく気恥ずかしい。

「こちらこそ、そのような可愛らしい御姿を拝見させて頂き有り難う御座います」

ななな何を言つてるんだこいつは！？

「ゴホン！ その、やけに丁寧な口調は何なんだ？」

ディーウアめ、悪い方向に成長したな……私はほてつた頭を何とかしようつと話題を変える。

「仕様で御座います」

「嘘つくな。以前は語尾にわざとらしく“～です”を必ずつけていたじゃないか」

とにかく頭を冷やす為、口を動かし続ける。

「それは、その。あの頃はそれが丁寧だと思い込んでいたので御座います」

「そうだったんだ……」

顔を赤らめ恥ずかしがるディーウアを前に、私は人工知能の性能に魔力量が左右する事を一つ発見。まだまだ、【物質創造】を使いこなせていない事に気付かされた。

「それじゃ、今から魔力を削つたら元に戻るんだろうか？」

本当はそんな事する気はないが、さつきの意趣返しにボソッと呟いてやる。

「勘弁して下さい御主人様。恥をかきたくはないです、心底困つたような顔を見せるティーウェーにやり過ぎたかと思い何か言おうと口を開いた時、階段をドタバタと駆け上がる音が聞こえた。

ティーウェーと一人して何だらうとドアを見つめると、ドアをバタンと乱暴に開いて部屋へお母さんが入つて来る。そして私を見て安堵したような笑顔を浮かべて一言、「アレシア」と私の名前を呟いた。

「どうしたんですか、お母さん」

何かあつたのだろうか。私はベッドから滑り降りティーウェーの横を通つてお母さんに駆け寄る。

「な……何でもないわ」

そう言つてお母さんは近寄る私と田線を合わせるようにしてしゃがみ、そのままの体勢で抱きしめてきた。額と額が触れ合つ。お母さんの荒い呼吸が私の顔の表面を撫でる。じつやら相当急いで來たようだ。

「私はいなくなりませんよ、お母さん」

多分、まだ私の帰還に実感が伴つていないのだろう。だから不安になつたんじやないかな。本当に私は実在するのか、と。ならどうしたら不安を払拭出来るかなんだが……まあ、何とかやってみよう。

「そう、そうよね。分かつてるわ」

肯定の意を早口でまくし立てているが、それが逆にまだ安心出来ていらないという事を推察させる。しかし、体を密着させてこれ以上近付きようがない位私は傍にいるのにまだ安心出来ないならどうしたらいい?

「はい、これからはずっと一緒にいましょ」

取り敢えず、安心させるような言葉を送つてみる。

「 セツ……ね、一緒にいましょうね」

お母さんの声がまた上擦り始め、その瞳は潤んできている。これは効果有りと見ていいのだろうか。

「 はい、一緒にいましょう」

一応もつ一度、同じ台詞を繰り返す。私自身の希望も込めて口から出したこの台詞は、ついにお母さんの涙腺を崩壊させてしまった。うーん、やり過ぎてしまったみたいだ。反省。

「 何で、泣いちゃうんです？」

俗に言つて、感動の再会は既に済ませたじゃないか。なのにどうして？

「 え？」

「 涙、出でますよ？」

お母さんは言われて始めて気付いたらしく、私を抱きしめていた右手を自身の頬へ持つて行き、涙に触れた。

「 あ、あれ、私、どうして泣いて……」

「 泣かないで、下せこよ」

仕方ないなあと、せせやかな微笑が私の口に浮かぶ。

「 な……何言つてゐる。アレシアも涙、出でるわよ？」

「 え？」

言われてみると確かに、頬を一粒の涙が流れているのを感じた。お母さんも、柔らかい笑みを浮かべ出した。

「 ふふふ……」

「 えへへ……」

二人して、微笑みながら、涙を流す。

何だか、くすぐつたいような、温かいような、不思議な気持ちになつた。

「 うん！ じゃ、朝ご飯にしましょう！」

十分程経つただろうか。急に元気一杯になつたお母さんは私を抱えて立ち上がつた。

「お母さん？ 私、自分で歩けますよ」

私のいなかつた間にもの凄い心労をかけてしまつたんだ。もう迷惑はかけたくない。

「駄目。私がこうしたいのよ」

弾んだ口調で私に答えるお母さん。そう楽しそうに言わわれると、反論出来ない。

「ほら、ディーウアちゃんもいらっしゃい」

「はい、お母様」

ディーウアの事、すっかり忘れてた。といふが、全部見られてたのか……。お母さんの肩から顔を出していると、後ろから着いて来るディーウアと田が合ひつ。もらい泣きでもしたのか瞳を潤ませているディーウアと顔を合わせると、急に恥ずかしくなつてきた。肩から顔を引っ込める。

「ふふっ、甘えん坊さんね」

すかさずお母さんの胸に押し付けられた。ぐ、ビックリしそう羞恥を味わう訳か。

ええい！ 母親なんだから恥ずかしくない！ うん、これでよし！

内心を押し殺しながらお母さんに抱き抱えられ部屋から廊下へと出る。

変わつてない……懐かしいなあ。

気持ちちは完全に切り替わり、感傷の思いで心が満たされていく。私の部屋を出て廊下の右側を見ると彩色ガラス扉があり、その扉はベランダに繋がつてゐる。一方左側を見ると部屋の扉が四つ並んでゐる。四つの扉の見える左側へ扉を横田に足を進めると、やがて右側に階下へ続く階段が見つかる。階級には途中に窓があつて、そこからお隣りさんの自慢の中庭が覗ける。今年も様々な花が咲き乱

れでいる様子が見て取れた。彼らは元気に過ごしているだろうか。階段は一階廊下に繋がっていて、この廊下の左側には五つの形の異なる扉が並んでいる。一番左端の立派な木製両開きの扉が居間兼応接間に続く扉だ。真鍮製（だと思つ）のドアバーをお母さんが直角に回転させ居間に入る。

「変わつてないですねえ……」

落ち着いた焦げ茶色を下地に黒の網目模様が入つた壁紙。薪を燃料にパチパチと炎が音を立てていて、煉瓦の暖炉。部屋の中央には斑紋の美しい白い大理石のテーブル。長方形のテーブルの長辺に沿うように設置された二対の四人掛けソファ。窓際では格子窓から差し込む朝日を明かりにお祖父さんがロッキングチェアに座つて新聞を広げている。

「マリーさん、アレシアは大丈夫なのかい？」

私達に気付いたお祖父さんが新聞から顔を上げる。

「大丈夫よ、先生の腕は確かだもの。ね、アレシア？」

「はい」

「そりや良かつた」

再び新聞に顔を戻すお祖父さんにディーウアが一礼した後、開きっぱなしのドアを通り食事室の中へ。

食事室には十人は座れる大きな木製のテーブルと椅子があるだけだが、壁紙は白を基調とした明るいものとなつていて。

「少し待つてね、すぐ用意するから」

お母さんから椅子に降ろされた私。うーん、床に足がつかない。成長したはずなんだけどな。

「あ、私にも手伝わせて預けませんか？」

台所へ向かつたお母さんをディーウアが追い掛けていった。

台所から聞こえてくるお湯の煮え立つ音や包丁が規則的に何かを刻んでいる音をバックに私は一人椅子に腰掛け、久しぶりに無為に時間を過ごしたのだった。

II、ある朝の食事室

台所から聞こえる賑やかな物音に耳を寄せながら、席に着いてしばらく足をぶらぶらさせるとお母さんが木のトレーにスープを皿載せて運んで来た。スープから立ち上る湯気が私の傍に漂つて来て鼻孔をくすぐる。

「美味しそうな匂いですね」

「ふふっ、お代わりはいっぱいあるわよ」

お母さんは次々とスープをテーブルに配置していくた。

その配置は私のいた頃と変わっていない。長方形のテーブルの短辺にお父さん、お父さんの右手の長辺はお父さんに近い順にお母さん、そして私。左手には一つ空席を空けてお祖父さんが座る。空席は私の生まれる前に亡くなつたお祖母さんの席。四つのスープはお母さんとお祖父さんと私の席、それと私の右側にむつ一皿と置かれる。最後のはディーウアの分だろうか。

「少し待つてね、お義父さんを呼んでくるから」

「はい」

お母さんが居間に消えると、入れ代わりに台所からディーウアが植物で編まれた籠を抱えてやって来た。平たい籠には丸いパンこちらではパンヌと言つ。まあ、たいした違いじゃない がいくつも入つてゐる。

「パンヌ屋さんに行つてたのか?」

「その通りで御座います」

「ご主人のモファラスさん、元気にしてた?」

「私がパンヌを受け取つた中年男性がモファラスさんでしたのなら、健康に差し障りはなさうで御座いましたよ

「そつか、良かつた」

あの人にも随分お世話になつた。我が家の中では、家の食卓で出て来るパンは全てモファラスさんのところで焼いて貰つて、昔は毎日私がパンを受け取りに走つていたな。時々くれたクッキーはさくさくほくほくしてて、格別の味だった。

後は何故だかいじめられた私をかばつてくれたりもしたつ。スカートめくろうとしてきたり背中を叩いてきたり、所詮ガキのいたずらだつたから寧ろほほえましかつたけどね。

「私は何處に座ればよろしいので御座いましょう?」

物思いに耽つていた私を、所在なきげなディーウアの声が現実に引き戻す。

「……だと思つけど、ディーウアも食べるつもり?」

「いけませんか?」

俯くなよ。ショックを受けたらしいディーウアへ、慌てて訂正の言葉を放つ。

「そういう意味じゃなくて、食べる事が出来るのか? といつ疑問なんだが」

「はい、可能で御座いますよ」

「食べた後は?」

「……無粋な事を聞かないで下さい。私は魔力で構成されているので御座います」

「あ……すまない」

ディーウアと会話を交わしていると、お母さんがお祖父さんを連れて戻つて来た。二人は各自の席に座る。お母さんは私の隣に、お祖父さんは私の向かい側だ。

「待たせて済まなかつたね。さあ、食べようか」

お祖父さんの言葉を合図にして、全員がスプーン片手に食べ始める。

スープは肉と野菜を具材に、塩で味付けされただけの簡単な代物。

それでも少し薄味な塩加減は間違いなく、お母さんの料理だ。

「どうしたの、アレシア？ もしかして、おいしくなかつた？」

私のスプーンを持つ手が止まっているのに気付く、お母さんが声を掛けてくる。

「いえ、とても美味しいですよ。ただ、お母さんの料理……懐かしいなつて思つて」

嫌だな。涙が出て来た。いい加減にしてくれと思つね。もう散々泣いたじゃないか。

「おかしいですね、何だか勝手に……悲しい訳じゃないのに……」
「いくら指で拭つても溢れる涙は止まらない。おかしいなあ、私はここまで涙脆弱くはなかつたはずなのに。」

「アレシア……」

お母さんが身を乗り出し、私に覆いかぶさるよつてして抱きしめてくる。

「お母さん……」

やめてよ。余計涙が溢れ出て来るじゃないか。

朝ご飯の席はすっかり湿っぽい雰囲気になつてしまつた。全員が黙々と食事を口に運ぶ。雰囲気悪い。

「私がいない間、どうしてましたか？ 何か変わつた事はありますか？」

何とか場の雰囲気を転換しようと適当に話題を振つてみる。

「変わつた事、ねえ……何かしら」

悩むお母さんに対し、お祖父さんが誇らしげに口を開いた。

「ジエイソンが参謀次長になつたじゃないか」

「参謀次長？」

参謀次長といつと……トップである大統領から数えて六番目か。

以前が近衛軍団軍団長だったから大出世だね。

「わああ、アレシアちゃんのお父様は凄い方ですね」「ディーウアは早くも感嘆の声を上げる。

「そうね。おかげで戦場に行かなくてすむようになったのはいいけど、中々帰つて来ないのよね」

「ただお母さんはあんまり嬉しくなさそう。

「しかし儂の息子も偉くなつたもんじやないか！　あの歳で参謀次長には普通なれるもんじやない」

対象的にお祖父さんは自慢げだ。

「確かに偉くなつたわ。なりすぎなくらいね」

お母さんの刺々しい口調の台詞に、お祖父さんも苦笑するしかなり。

「マリーさんは社交会が苦手かい？」

「貴族が多くて堅苦しいのよね、司令本部主催の社交会つて。あーあ、中隊長同士の社交会までは気楽だつたのに」

愚痴をこぼすお母さん。口の中にスプーンを入れたまま話す。スプーンがお母さんの口に入つたまま上へこみあがみあが。つい、田で追つてしまつ。

「軍団長辺りまでは下からの叩き上げもいるが、四軍司令部より上になると余程の才かコネクションがないと第三階級出身にはつらいからな……その点、ジョイソンは実力であそこまで行つたんだ。素晴らしいよ」

「まあ、あの人があるのは確かだけど。でももう少し家庭に貢献したつていいと思いませんかお義父さん！」

あ、スプーンがテーブルに落ちた。

「あ、ああ、そうだな。仕事に夢中になつすぐてこりきりにはあるな」

「でしよう！？　あの人仕事優先で最近一回も帰つて来てないし！

少しばかり顔を見せなさいよつ！」

やばい、お祖父さんがお母さんの導火線を着火してしまつたみたいだ。話題を変えよう。

「あー、こじれでお父さんは私が帰つて来た事知つてるんですかね？」

今だ、お祖父さん。逃げるんだ。そんな意思を込めて田配せする
と、お祖父さんはうなづく。

「え？ あら、すっかり忘れてたわ。でもそれより……」

「そりや大変だ！ 儂が報せに行こいづー！」

「いや、でも……」

「なあに、朝食後の散歩も兼ねるから心配はいらんよ！」

お祖父さんは食事室を出ていく前にちらりと私に振り向き、ウイ
ンク。私は微笑みを返事にして、計略成功を喜んだ。て、あれ。何
で扉の前で立ち止まっちゃうんだ。

「お義父さん、大丈夫ですか？」

その急な動作停止に、お母さんが心配になつたらしい。椅子から
立ち上がって、お祖父さんの元へ歩み寄る。私も心配だ。ついて行
こつ。

「あ、ああ。大丈夫じゃ。問題ない」

確かに見た目は健康そうではあるけど、さつきのは流石に不自然
だ。

「ですけどお義父さん。少し休んでからいかれたらどうですか？」

お母さんも同意見らしい。お祖父さんを引き止めにかかる。

「いや、何。アレシアの笑顔に見とれてただけじゃよ」

いや、その言い訳は無理があるだろ。

「あら、そうなんですか？」

お母さんは私の方を見る。いやいやいや、こんな低級な嘘に騙さ
れちゃ駄目だよ。

「本当だとも。それよりジョイソンに早くアレシアの帰還を伝えて
やらねばな」

そう言つてお祖父さんは食事室の扉を閉めていった。お母さんこ
それを引き止めるそぶりはない。

「お母さん、お祖父さんは大丈夫でしょうか？」

せつかく再会したばかりとこいつの、ぽつくり逝かれてはたまらないんだが。

「お義父さんもせつかちね……まあ、大丈夫じゃないかしら」

「そうかなあ。大丈夫かなあ。もういっそ私がお祖父さんと一緒に直接会いに行こつかなあ。」

「では、私が同行致します」

私の心情を察してくれたティーウアが申し出てくれた。ティーウアがついてくのなら、安心だ。

「そうしてくれますか？」

「任せて下さいます」

「じめんなさいねティーウアちゃん」

申し訳なさそうにお母さんがティーウアへ声を掛ける。

「ちょうどロミコアの町並みを見てみたいと思つておりましたから、気にしないで下さい。では、行つて参ります」

「お祖父さんの事、お願ひしますね」

「行つてらっしゃいティーウアちゃん」

お母さんと私に見送られて、ティーウアは玄関の扉の取っ手に手をかけているお祖父さんの後を駆け足で追いかけたのだった。

四、近所からの来襲

お祖父さんとトマーウィアの外出後、朝ご飯を平らげた私達は食後のお茶を嗜みながら食事室でくつろごっていた。

私はお母さんの膝上に乗せられ、再会するまで何をしていたかを曖昧に話す。

「海岸に打ち上げられたって……だ、大丈夫だつたの！？」

曖昧にぼやかしても私の話は刺激的なようで、始終お母さんは顔色を変えている。というか刺激が強すぎたらしく、私を不安解消に抱きしめる用途で使用する為に膝上へと強制移動させられてしまつた。

「はい。運よく釣りに来ていたカルロスさんとヒューリイ君に助けられたんです」

胸を撫で下ろすお母さん。よかつたと小さく呟いてから先を促してくる。

「それで、どんな人達？」

「カルロスさんは優しいお爺さんでヒューリイ君は元気な十歳位の男の子でした。二人は家族で、私を一人の家に案内してくれました。そこで一週間位でしたかね、色々と面倒見もらつたんです……いつか、また訪ねたいです」

「その時は私も行きたいわ」

「きっとみんな喜ぶと思いますよ、ん？」

家の扉をしきりに叩く音が聞こえてくる。お祖父さん……じゃないはず。お祖父さんなら家の鍵を持つてない。

「あら、誰かしら。見てくるわ」

「はい」

私を椅子に移し立ち上がり、廊下に繋がる扉へ向かって歩き出したお母さんへ私は簡素に返答する。その後、扉を閉めて廊下を駆け足で進むお母さんの足音が私の耳まで届く。

足音が止み、入り口の扉の施錠を外した金属音と共に、訪問者の声が聞こえ始める。どうやら訪問者は複数人いるようだ。何者だろうか。少し様子を見てみよう。

お母さんの出て行つた扉をちょっとだけ外側に開き、入り口を片目で覗く。

「あ！ 本当にいたぞ！」

「え？ どこ那儿、どこよ？」

「おっ！ あそこじゃ！ ワシは見たつ！」

テッドさんに、デウラテさんに、アティースアさんに、ズムウオルトさんに……ああ、懐かしいなあ。もしかして、私に会いに来てくれたのだろうか。玄関には、私が近所で仲の良かつた人々が押しかけていた。

まだ私に会いに来たとは決まってないのに、つい私は嬉しくなつて扉を開き彼らの目の前に姿を現す。朝から次々と旧知の人物との再会が実現し、思わず私の頬も緩む。

「皆さん久し振りです……ね？」

んーと、どうしたのだろう。皆さん固まつていらつしゃる。私、死んだと思われてたから、いきなり姿を見せたのは少し衝撃的だったのかもしれない。とりあえず声を掛けてみる。

「あーと、この通り私は無事ですけど……」

無反応かい。

あ、そういうえば、昔も時たまこんな事あつたつけ。この世界の人達のボディーランゲージの一つのようだし、少し待とう。

十五人の固まつた人間を搔き分けて、お母さんがこっちに歩いて来た。彼らを見て「威力は数段上がつたみたいね……」と呟くお母さん。威力つて、何の事だろう。ああ、十五人もの人間が呆然と突つ立つてたら確かに威圧感はあるよね。

「皆さん、どうしちゃったんでしょうね」

前々からこのボディーランゲージの示す意味が分からんんだよなあ。何を示しているんだか。

「……さあね」

お母さんは難しい顔で私を見つめてくる。あれ、何で私を見るのだろう。

「何か？」

「いいえ、何でもないわ」

「？」

あー、まあいいか。ボディーランゲージに深い意味があるとも思えない。

今回は死んだ人間が生きてた事に対しての驚きに違いない。びっくりして固まつた、という事だ。気持ちは分かる。分かるけど、固まる事はないんじゃないかな。

ボディーランゲージの示す意味について考えて数十秒程経過しただろうか。他のみんなよりいち早く正気を取り戻し、辺りの固まつたままの人々を拳動不振に見回しているテッドさんに気付き声を掛ける。

「お久しぶりですね」

「あ……夢、じゃないのか？」

私を凝視し、口を半開きにしたままテッドさんが尋ねてくる。

「違いますよ、私は帰つてきました」

「ほ、本当に帰つて来たのか？」

テッドさんの声が震えている。

「はい、そうですよ」

口を大きく開き、ガタガタと震え出すテッドさん。これは……丈夫だらうか。

テッドさんの様子に一抹の不安を覚え始めた時、突然テッドさんが大声が上がる。

「な、何てこつた！ マリーさん、よかつたじゃないか！」

テッドさんは歓喜の勢に余つて隣にいたお母さんの肩をつかみ激しく揺さぶる。

「え、ええ。ありがと！」

苦笑いで応じるお母さん。

テッドさんの大声に反応して、みんなも活動を再開を始めた。

「あらあらまあまあ！ アレシアちゃん綺麗になつたねえ！」

「よく無事で戻つて来たなあ！」

「愛でたい！ ジヤなかつた、田舎度に！」

「ああ……生存してくれたのね」

「くわつ！ マリーさん、ウチの馬鹿息子と交換してくれないか！」

「ははははは！ 今年は良い年になりそうだぜ！」

「はつ、だから政府の血の事は信用出来ないんだよ。ほれみい、アレシアちゃんは生きとるじやないか

「おばあちゃん、そんな事よりもヒアレシアちゃんの近くに行きましょ！」

「ママ……おのお姉ちゃん、女神様？」

「何言ってんかいもう忘れたのかい！？ バルカ家のアレシアちゃん

んだよ！ ああもう見てご覧よあの姿つたらもつ！」

みんなで一斉に話し始めるものだから何を言つてゐのかが分から

ない。

「ちょ、ちょつと！ 一人ずつ話してくれませんかー？」

制止に入るが、しかし。

「あらあら！」めんなさいね

「確かにそうだよなあ

「かあいーなあ

「なあマリーさん、テッドなんかに構つてないで話を聞いてくれよ

！」

「ははははは！ じりやすまねえなあ！」

「あたしゃ前々から言つてたの？ 魔族はいるんだよ」

「おばあちゃん、静かに！」

「ああ何て綺麗なんだろうねえ！」

「ママっ！ しーっ、だよ！」

薄々感じてはいたが、無駄なようだ。

「ハハハ……」

駄目だこりや。もう、苦笑いするしかない。

「あら、まあ」

「ぐぼあつ！」

「ザグア……」

「ほえ……」

ああもう本当に訳が分からぬ！

顔を赤くしたり、いきなり再度固まつたり、奇声を上げ出したり、赤い液体を吐き出したり、何なんだ一体。以前はこんな事はなかつたのに。どうなつてるんだ。これが時の流れなのか？

「マコー！ 一体何の騒ぎだ！」

その時、入り口の扉が乱暴に開け放たれ男の声が響き渡った。

「アレシアが生きているといつのは事実なのか！？」

入り口に立つ男の声は喧騒の中でも響き渡り、全員が押し黙つて目線を彼へと向ける。

その中の一人である私の目にも、彼の姿が映つた。

そこには黒一色の服装に身を包み、肩を上下させている父の姿があつた。

「お父さん……お父さん！」

「アレシア……」

逸る気持ちに足が動き出す。「トウラテさんとハフムさんを搔き分け、お父さんに駆け寄る。お父さんも私に向かつて走り出す。十メートルもない一人の距離はあつという間に縮まり、私はお父さんの腕の中に抱き寄せられた。数センチの空間を境に、目と目が合つ。

「大丈夫か？ 体は何ともないのか？」

不安げに語りかけてくるお父さん。大丈夫だよ。

「私はいたつて健康ですよ」

「そうか、良かつた」

お父さんの顔に、穏やかな笑顔が浮かんだ。つられて私も笑顔になる。

ギャラリーと化した近所の皆さんからは祝福の拍手が上がり始めた。

五、理性は何処へ

お父さんと抱き合いで、お互の存在を確認しあつていた時の事、あの時お父さんが近所のみなさんに「皆さん、申し訳ないが家族だけにしてくれないか」と言つたのが始まりだつた。それに対してもウラテさんやアティースアさんみたいな良識的な一部の人を除き、一斉に抗議しだしたのだ。

「あら、私もアレシアちゃんを抱っこしたいわ」「

「おいおい、オレ達にも少し位触れ合わせてくれよ

「その肢体にすりすりさせれ！」

「いいなあ、ジョンソンさん」「

「マリーさん聞いてるのか！ いくらでも出すから！」「

「おやまあ政府の奴隸になつたジョンソンさんのお出ましがい？」

「ちよ、おばあちゃん黙つて！」「

「えーつー！ ワタシもあの女神様といぢやつきたーい！」「

「気持ちは分かるけど……あたしゃあんたの将来が心配だよ」

お父さんはみなさんの剣幕に一瞬たじろいだが流石は軍人、直後に言い返す。

「本当にすまないとと思う。だがしかし」

「何よ！ アレシアちゃんは私の物よ！」「

何という事でしよう。逆接詞を口にすると畳座に反撃されてしましました。

ずんずんとファーティマさんがお父さんに近寄り、私はあつとう間にファーティマさんの胸の中に強制移送されてしまった。

「あー、もう！ くうー！」「

そしてファーティマさんは私の頬に顔を擦り付けて来る。おーい、あなたは何がしたいんだ。

「あら、私にも抱かせてちょうだいな

「オレにも少しだけいいだろ?」

「ファー・ティマさんずるいぞ!」

「アレシアちゃん……欲しいなあ

「大体政府は情報を民衆にもっと流すべきなんだよ。そうすりや平和になるんだ」

「あーはいはい。そうですネー」

「ママ! ワタシ行つてくるつー!」

「え? どこにだい?」

「どうか……ファー・ティマさんに顔を擦り寄せられる私は恥ずかしさで一杯だ。

大体私はこの体に転生してから言葉遣いと排泄方法以外何一つ変えてないんだ、その言葉遣いだつてＴＰＯを弁えてた私は昔から使い慣れてた丁寧語に変えただけなんだ。髪は確かに長いが、これは両親の強硬な反対にあって仕方なしにしているだけだし、私の傍には長髪の美少女顔の男子がいたからそこまで変だと思えないんだ。排泄方法はもう諦めたよつ!

とにかく! まだ精神は肉体が第一次成長を迎えていない以上、転生以前の男性のソレを維持し続けているんだ。だからつまり何が言いたいかと言うと妙齢の女性に抱き着かれて頭が沸騰しそうなんだよつ!

お父さん、何とかして。すがるような思いでお父さんに目を向けるも、生暖かい目線で見つめ返された。ひどい! 貴様それでも父親か!

「おばさんワタシにもつ! ワタシにも触らせてつ!」

軽い振動と共に私の足が何者かに掴まれる。下見ると六、七歳の女の子が私の両足を抱きしめている。何をしてるのこの子!?

「お、おばさん! ? 失礼ね! 私まだ二十歳よ!」

残念ながら地球と違つて結婚適齢期が十五歳前後なので立派に行き遅れだよ。というか放して! つて、今まで脳内でしか喋つてな

いじやないか私の馬鹿！ よし、声に出すぞ！

「あ、あの。恥ずかしいんで、取り敢えず下ろしてくれませんか」
私の足に縋り付く女の子と睨み合つフアーティマさんにはつきり
と自らの意思を伝える。

「え？ あっ！ うわ！ そ、その表情は……辛抱たまらん」
辛抱してるのはこっちだよ。て、うおいっ！ 何で服の中に手を入れようとしてるんだ！

白い就寝用ワンピースのスカート部分に手を差し込もうとしてくるファー・ティマさん。その手を拒絶したいのは山々なのだが女の子が両足を抱きしめ、ファー・ティマさんのもう一方の手により両腕が使えない状態では身じろぐ事でしか抵抗出来ない。

ただね、衆人監視の中制止する者がいないとしても思つていいのか見てみろ、皆あなたの暴挙を止めようとじり寄つて来ているぞ！

「……何、ちよつと躊躇ひただけだ。ちよつと躊躇ひただけだ。ちよつと躊躇ひただけだ。」

「ワシもまだ現役じゃ！」

「頑張つましょ! おばあちゃん! 」

「あの黒鹿あたしより卑くあのふとももに顔を……」

「わーわーわー！」マヤちゃんに向つてんだ――一体何

「…されはつ？」

ハサウエイ・ハーバード

一斉に喋り出すから何言つてゐるか分からぬがにじり寄る者全員が危険だとは分かつた。だが、だがね！　お父さんは頭を抱えて天を仰いでいるけど、まだにじり寄る者達にはない正常さが感じられるんだ！　そう、今の私にはお父さんだけが頼りだ！

「助けてお父さん!」

「アレシア? つ!」

私の必死の叫びに瞬時に反応し飛び出したお父さんは、一瞬の内に私をお父さんの手の内に確保する。お父さんは知恵も回れば戦闘能力もある有能な人物、頼りがいがあるね。

「た、助かりました」

ともかく感謝する。あれ、何で丁寧語だとすらすら言葉が紡げるんだろう。

「それはどうかな、アレシア」

「え?」

お父さんの懐疑的な返答に辺りを見回すと完全に包囲されていた。やばいです。

「ジエイソン、お帰りなさい。アレシアちゃんを渡してくれるかしら」

呼吸の荒いお母さん。私と同じ白銀色の長髪を振り乱し翠色の目を爛々と輝かせながら口元に垂れたよだれを拭いつともせず、にじり寄つて来る。綺麗な顔が台なしだ。

「マリー、今の君は正気じやない。少し頭を冷やしてくるんだ」

ちゅうとおかしい事になつているお母さんで、お父さんが強烈な口撃を与える。

「な、何ですつて!?」

うわあ、オブラーートに包んで言おつよお父さん。お母さん激昂しちゃつたじゃないか。

「何よつ! 私が帰つて来てつて言つても帰らないくせに向で今日は帰つて来るのよ! アレシアちゃんは確かに可愛いし綺麗だし食べちゃいたいなーとは時々思う事もあるけどそれでも私はあなたの妻なのよ! 妻より娘が大事なの!?」

お父さん、これは本格的にやばいじゃないか。頭に離婚の二字がちらつぐ。私はいいから妻と答えとくんだ。

「マリー、アレシアは今まで死んだと思っていたんだぞ?」

「だから何よっ！ そんなにアレシアが大事ならアレシアと結婚させないわ！ 絶対させるもんですか！ アレシアは私が引き取ります！」

「もう何言つてるんだ。田茶苦茶にも程がある。

「マコーー。」

「あ……」

お父さんは私を床に抱き下ろし、お母さんを抱きしめた。
「マリー、君の事が好きだ。君を大事に思つてこる。そぐでなければ結婚なんてしないわ」

ひゅーひゅー、よく真顔でそんな事言えるねー。ん、誰だよ腕の袖を引っ張るのは。今大事な所なんだ。

「アレシアちゃんはこっちでいい事しましちうね」

はは、ファーティマさんまだやる気満々みたいですね。

「え、いや、ちょっと、お父さん？」

悲痛な思いでお父さんを見つめるが、今お取り込み中のように真剣な眼差しでお母さんと見つめ合つてこる。

「中々帰つて来られないのは本当にすまないと思つてこる。でも君だつて今帰つて来たのがいつもと違う意味なのは分かるだろ？？亡くなつたはずの娘が突然帰つて来たと知らされたんだ。マリー、君ならこの知らせを聞いたオレの気持ちを理解してくれるんじゃないか？ どうだい？」

「うん……」めんなさい怒鳴つたりして。でも、寂しかつたの

ファーティマさんに引きずられ、近所の皆さんの中心に連れ込まれる。どうしよう、このまま私は一体ナニをされてしまうのだろう。

「あんた達邪魔よ！ 男は消えなさい！」

「何！？ そりや差別じゃないのか！？」

「何でだよ！ 愛でるだけじゃないか！」

そこに一つの光明が差し込んで来た。男性陣を女性陣が排除にかかつたのだ。この抗争、上手くすれば隙をついて逃げられるぞ。

「つるさいねえ！ わたたとびつかいつちまいな！」

「うわあー、狭いんだから杖を振り回すなつー」

「痛い！ 当たってる！ 当たってるー！」

な、情けない。あんたら男だろ。男性陣はホーエル家のお婆さんによつてあつさりと廊下の隅に追いやられてしまつた。

「仕事にのめり込み過ぎていたかも知れないな。これからは出来るだけ帰つて来るよ」

「本当ー！？」

「本当だとも」

「ジョイソンー！」

「ぐ……無念、だ」

「いてて……杖は反則だろ」

「まさか本当に当てに来るなんてなあ」

「あそこからには女だけよ」

ファー・ティマさんが胸を張つて宣言すると同時に、体の至る所をべたべたと触られていく。

「あらあらまあまあ！ 触り心地の良い肌ねえー！」

「はあー、じうやつたらこいつなれるのかしら。この白銀の髪、腰まで延びてるのに梳いても全然手に引っ掛けられないんだけど」

「ワシもこんな孫が欲しいねえ。見てみいこの目ー！ 紅いんだよ。幸運の印だよ」

「本当、宝石みたいだね」

「えへへー、女神様のお肌すべすべー」

「あたしは複雑な気分だよ。でも、ま、アレシアちゃんなら仕方ないかねえ」

あー、何だかむかむかして來た。何だひつ、俗に言ひ勘定袋とやらが切れてしまつたみたいだ。

「もう服が邪魔くさいわね。脱がしちゃいましょー」

「あら！ 大胆ねえ！」

「ええつー？ ゼ、全裸にしちゃうのー？」

「全く、最近の若いのは……服からあらうと見えるのがいいんじゅ

ないか」

「おまえがやん、いいじゃない！」「…」

「えへへー、女神様脱ぎ脱ぎしましょーー

「切夜つて沢か！」
氣が昇る

弘姓，申國公，字子淵，號子淵，人稱子淵先生。

私はね、伊達はここまで生きてないんだよ。この程度の修羅場本気を出せばちょちょいのちょいと解決出来るんだ。でもね、久し振りの再会で私の為に舞い上がってるんだと思ってたからこそ遠慮をしてたんだよ。

だがもう限界だ。付き合つてられん。

今までにこゝも好色勝手はや

「でくれたものですねえ」

アレシアちゃん、何たか怖いんだけど――

「ひらかたのまつり」

「ごめんなさいアレシアちゃん。私がどうかしてたわ」

「め、女神様……ふええーん！ママーどーしょー！」

「おー、よしよし。自業自得だね」

「……………もうすき合はれません！」
「……………あがなひー！」

私は魔力を身体に纏わせ【身体強化】し、力技で包囲網を離脱。

階段を駆け上がり自室に閉じこもった。少しば反省しろ!

五、理性は何処へ（後書き）

私の表現力不足で申し訳ありませんが、近所の人々の凶行はひとえにアレシアの魅力が原因なのです。彼らが異常なのではなく、アレシアが異常なのです。

六、鐘の音と共に

私が一階の自室に駆け込む事遅れて数十秒後、どやぢやと近所の人々が部屋になだれ込んで来た。そんなに広くもない私の部屋に全員は入り込めず、先陣を進むファー・ティマさん筆頭に女性陣ばかりがぎゅうぎゅうになりながら室内へ進入して来る。これを受けた私は部屋の最も奥にあるベッドへと後退。シーツに潜り込み、籠城を決め込む。

とは言え、実はもう怒つてはいないけれど。階段を駆け上がりつて体を動かしたらストレスは発散され、平静を取り戻す事が出来た。しかし後々同じ事をされたら嫌なので、今の内にきつちりとけじめを付けておこうと思つたのだ。つまり、私がどれだけ嫌がるかを今之内に知つて貰おうという事。

「アレシアちゃん！ ベッドでならいいって事ね！」

だが、シーツの中にいる私の耳に息を弾ませたファー・ティマさんの声が届き愕然とした。

「何でそういう奴なんですか！？」

私は思わずシーツから顔を出し突っ込んでしまつ。何て事だ。話が全然通じてないじゃないか。

「ファー・ティマ！ あなたといい加減にしておきなさいよ！」

よかつた。ファー・ティマさんの右隣に位置するデウラ・テさんが飛び掛かるうとするファー・ティマさんを押し止めてくれた。

「う……でも、でもさあ！ あんな姿見て思ひとどまれつて言いつの？」

「無理に決まつてるじゃない！」

「何言つてゐの！ アレシアちゃん怖がつてゐるじゃない！」

デウラ・テさんがファー・ティマさんから私を庇うようにシーツ越し

に優しく抱きしめてきた。

「ああっ！ その手があつたかつ！ 親切心にかこつける作戦だなあ！ くそっ、離れるおつ！」

上に覆いかぶさるテウラテさんの腰を掴み、ファーティマさんが引っペがそうとする。

「ち、違うわよ… 私はただ、アレシアひやんを安心させようと思つて…」

「嘘だつ…」

「嘘じやありません…」

「嘘！」

「だから違います！」

「あー、もう！ 二人共黙りな！ ほり！ テウラテさん、あんたもアレシアちゃんから離れるつ…」

一人の騒々しさにたまり兼ねたらしく、イヤニヤさんが仲裁を買って出た。二人まとめて強引に私から引っペがした。そしてしわくちゃになつたベッドに転がりながら様子を見ていた私の前に立ち、その豪快で優しそうな太つた丸顔にすまなそうな表情を浮かべる。

「アレシアちゃん悪かつたねえ。皆あんたに会えたのが嬉しくてつい羽目を外し過ぎちまつたんだよ」

そう言つてくれるのは嬉しいんだけどね。何だか皆の手つきがやましかつた気がしたから、つい逃げ出してしまつたんだよね。

でも、まあ、皆もイヤニヤさんのように反省した事だろうし、いつまでも意地張つてるのもつまらないし、そろそろ頃合いかな。

「もう、服脱がしたりしませんか？」

ただここだけは譲れない。絶対に。皆の前で全裸になるとか、公開処刑じゃん。あー、想像するだけでも恥ずかしいよ。といつか何故服脱がすの？ 私がここにいる情報の発信源は間違いなく医師のフィアウルさんだから、怪我がないか確かめたかつたのかな。

「……！？ あ、ああ、もうしないよ。だから出ておいで」

イヤニヤさんの他、私を見ている全員が今の質問に動搖をあらわ

にし出す。「うん、やはり後ろめたさがあるんだね。」

「……分かりました」

私はシーツを体からはがし、ベッドに腰掛けた。

すると私の前に先程私の足にしがみついてきた女の子がイヤーヤヤさんから出て来て、右手を地面と平行に延ばし、体を腰から直角に曲げた。これは地面に頭を付ける土下座より程度が上の謝罪だ。どういう事かというと、ある魔獣の真似をする事で自らを人間に以下だと表現しているから。

「女神様ごめんなさいっ！」

ともかくこの謝罪方法は大袈裟だ。小さな女児にここまで覚悟をされると逆に申し訳ない気持ちになつて来る。

「え、と。頭を上げて下さい。私はもつ気にしてませんから」

女児が首から上だけを上げ、目が合つ。女児の丸っこい顔が不安に染まつている。

「許してくれるの？」

「はい、私はあなたを許します」

私の言葉を聞いた途端、女児の碧い目は輝き背中はしゃきっと延びた。

「ありがとう！ ワタシはね、チャーリってゆーの。女神様よろしく、ねっ！」

この女児の名前は、チャーリといつのか……って、そういうじゃない。

「女神様って何です？」

「違うの？」

チャーリちゃんはポカんと私を見つめてくる。

「違いますよ」

私はばつたつと否定した。

「じゃあ、何？」

「何つて、私はアレシアですが。といつか何で女神様？」

「すごくキレイだから」

「それだけですか？」

「ううん、それだけじゃないよ。声もキレーだし、イー匂いもあるし、動きがカワイーし、おめめが紅いし、髪もキレーだし……」

それは姿姿だろ。というかベタ褒めし過ぎて胡散臭い位だ。さつきの事はもう怒つていないからそんなおべつか使わないでいいの。」

また申し訳ない気持ちになる。

「とにかく、私は神様ではありません。だからアレシアと呼んで貢つて構いません」

「でも、いいの？」

「いいんです。寧ろ、神様と呼ばれる方が嫌です」

道端で女神様なんて呼ばれてみる。ものすごい恥をかくぞ。

「あ、アレシア……様？」

「何で様なんて付けるんですか。呼び捨てでお願いします」

「アレシアお姉ちゃんじや、ダメ？」

まあ、私の方が年上だもの。呼び捨てには抵抗があるのかもしれない。ただ……お姉ちゃん、か。私は男だつたのだがなあ。

「ま、いいですよ」

「ありがとうアレシアお姉ちゃん！」

「おつと」

諦めの気持ちと共に了承した私の懷に、チャーリーちゃんが飛び込んで来る。私は勢いに押されてベッドに背中から倒れ込んでしまう。

「えへへー」

チャーリーちゃんは私の胸元に顔を埋め、ほお擦りを始める。時々くすぐつたいような感覚に襲われ、体がその度に震えるのだが、チャーリーちゃんの表情がとても嬉しそうな為に、何も言つ事が出来ない。

い。

「あ、するーーー！」

「やめなさい！ あなたが飛び込んだら危なつかしいわ！」

「それどういう意味よ！？」

私が自らの体に戸惑つてると、鐘の音が聞こえ始めた。これは確かに、ロミロアのあちこちに設置されている時計台がおよそ三時間毎

に鳴らしている鐘の音だ。この鐘は……九時を知らせているものだ
るべ。

「いけない！ 仕事に遅れたつ！」

「やべつ！ オレもだつ！」

「くそおつ！ 少しも触れられなかつたぜ！」

「何だか釈然としないねえ。ワシらは見るばかりかい

「おばあちゃん！ いいから急いでつ！ アレシアちゃんじやあね

！」

皆が慌ただしく動き出しそうが、もう間に合わないと思つた。我が家には魔力灯が各部屋の天井に吊されてるけど、まだ大半の家庭の照明が植物油を燃やすランプなのでこの世界の人々は日の出と共に活動を始め、日の入りと共に活動を終える。今は冬だから、まあ六時頃に起きて、七時半辺りから仕事に入つてゐるだらうね。うん、完全に遅刻だ。

「アレシアちゃん、またねつ！」

「はい、また会いましょつ！」

仕事に就いている皆が風のよつと去つていいくと、部屋にはお隣りに住んでいる専業主婦のテウラテさんとイヤニヤさんとその娘さんらしいチャーチャーイちゃんだけが残つた。

「何だか、静かになつたわねえ

「そう、ですね」

「ようやく入れるわ……」

「あ、お母さん」

何だかくたびれた声がしたなと扉の方へ視線を向けると、お母さんとお父さん、それに帰つて来たお祖父さんにディーウアが室内に入つて來た。

「あら、マリーさん。どうして今まで入つて來なかつたの？」

「実の娘が帰つて來たんじやないか、傍にいてやりなよ」

デウラテさんとイヤニヤさんの咎めるような口調の声に、お母さんは黒いオーラを漂わせながら答えた。

「ふふふ。そりゃ入れればそうしたわ。でも皆がアレシアちゃんの部屋に入つて行くから仕方無しに待つてたのよ」

「い、ごめんなさいマニーさん」

「わ、悪かったね」

「女神様、怖いよ」

お母さんの迫力に気圧されたテウラトヤヒヤーちゃんは謝り、チャーハイちゃんは私に強く抱き着いてきた。

「でもいいわ。今からたつぱり触れ合いましょう、アレシアちゃん」そう言つなりお母さんはベッドに座り、私とチャーハイちゃんを抱き上げてその膝上に乗せる。

私達は窓から差し込む温かな日差しに囲まれながら、ゆるゆると過ごしたのだった。

七、昼となつて

鐘が大氣を震わせ、正午を告げる。

時が流れるのは早いものだ。

私はチャーチャンを膝に乗せ、お母さんの膝上に乗せられ、周りを家族や親しい人達に囲まれて他愛のない話をしていたらあつと、いう間に太陽が真上に昇つっていた。

「あら、もうお昼なのね。私帰らないと」

しかしそんな時間も終わりのようだ。デウラテさんが帰宅するらしい。

「あたしらもおことまじょうか」

イヤーヤさんもか。まあ、お昼ご飯の時間だし、潮時なんだろうね。寂しい気もするが、もう会えない訳じゃない。

「えーっ！ やだやだ！ アレシアお姉ちゃんといふーっ！」

だがチャーチャンが駄々をこね出した。私の腰にギュウッと手を回し、断固帰らない体勢を取る。

「こら！ わがまま言つんじゃなこよー！」

「やだつたらやなのー！」

「あの、よかつたら暫かこううちで食べて行きません？」「…」

母親と娘が睨み合ひ険悪な雰囲気をどうにかしやうとお母さんが氣をきかせて皆をお昼ご飯にご招待。私の腰に抱き着いているチャーチャンは満面の笑みを浮かべて顔を私のお母さんに向ける。

「いいのー？」

「もちろんよ」

期待に田を輝かすチャーチャンと、お母さんも笑顔で返事をする。

「わーーー！ やつたーー！」

ただイヤーヤさんはまだ納得してないみたいだ。お母さんへ控えめに辞退を申し出る。

「でも、迷惑だらう？」「

「そんな事ないです。ね、あなた？」

「是非」一緒に下りて

「嬉しいけど、私はアーザスにお毎日飯用意しなくちゃならないから」

「それはあたしも同じだ。ほら、チャーリー。お兄ちゃん達を食えさせたいのかー！？」

「デウラテさんもイヤーヤさんも日常があるのだ。残念だが私とずっとお話しする訳にはいかない。

「うえーん！ お姉ちゃんーん！」

まだ彼女は小さいからそれが分からんんだらうね。チャーリーチさんは泣き叫び、私にしがみついて離れない。

「困ったねえ」

どうしたものかと、ため息をこぼすイヤーヤさん。

「もう皆まとめて呼んじゃいましょうよ。私とデウラテさんとイヤーヤさんがそれぞれ料理を持ち寄つてついにまた集合すればいいでしょ？」「

お母さんも思い切つた提案をし出したね。もうまとめて全員呼べばいいじゃんときたよ。

「あら、それ面白そう。イヤーヤさんはどうします？」「

「デウラテさんは好意的。さて、イヤーヤさんはどうだらうか？

「うーん。ま、いいんじゃないかい？」

お、これでチャーリちゃんのわがままが通つてしまつた。教育上大丈夫かな。泣けば意見が通つて思い込む事がなければいいんだけど。

「じゃ、何を作るか決めましょ？」「えーと、食材庫に何があつたかしら？」

「食材庫の中を見せてくれるかいマリーさん。同じ物作つたりつまらないからね」

「分かったわ、ついてきて」

「あ、私にもお手伝いさせて頂けないでしょつか?」

「ディーウィアちゃん、ありがとう。助かるわ」

「チャーリー お行儀良くしてるんだよ!」

「はーい!」

私がチャーリちゃんの将来を心配しているのを露知らず、お母さん一同はこうして階下へと行ってしまった。部屋にはチャーリちゃんに、お父さんとお祖父さんが残される。部屋の隅にいたお祖父さんだつたが、お母さん一同がいなくなつたので私の隣に腰掛け、私を見つめる。

「元気じやのう、マリーさんば」

「そうですね」

「本当に、よう帰つて来てくれた……」

お祖父さんは小さく咳き、私の頭に手を乗せる。見た目はしわだらけだが、とても温かい手だ。ほんわかした気持ちにさせられる。

「えへへへへ。お姉ちゃんあつたかーい」

チャーリちゃんはさつきからずつとくつついたまま。離れる様子はないみたいだ。

まあ、ここまで慕われるのも嫌な気分じゃない。しばみらいこうしていようかな。

四人でのんべんだらつと過ごしていた部屋に、いきなり一人の少年が乱暴に扉を開けて入つて来た。陽光に暖められた室内の空気が、廊下の冷たい空気を入れ代わる。

「チャーリー、ご飯出来……た、ゾ」

入つて来たのは、安価で庶民の服によく用いられるレモン色の生

地で出来た長袖長ズボンに、靴底が木で出来たサンダルを履いた少年。サンダルに収まる足には、暖かそうな靴下を穿いている。年齢は私と同じ七歳程度だろうか。身嗜みにはまだ気を使ってないようだ、茶色いくせ毛が所々跳ねているのが印象的だ。

その少年は扉のノブに手をかけたまま、姿勢を崩さずにいた。少年の目は私と私の膝上にいるチャーリちゃんに向かられ、一向に動き出れない。

「じーしたの、ルールお兄ちゃん？」

疑問に思ったチャーリちゃんの呼び掛けにもまるで反応はない。どうすべきかと思い、お父さんとお祖父さんの方を見てみる。あれ、一人共特に気にしていないみたい。ただお父さんの雰囲気が心なしか悪いような気がするけど、それ以外の変化は見られない。「ジョン、どうする？ あの子も餌食になつたようじやぞ」「まだ分かりませんよ。ただ驚いているだけですか？」

ああ、そういう事か。お祖父さんの言葉の意味は分からなかつたがお父さんの発言で合点がいく。あの少年は死んだと思われていた私が存在しているのに驚いている訳だね。

「お兄ちゃん、だいじょーぶ？」

しかし身動きを止めた兄が心配になつたらしいチャーリちゃんは私の膝上から下りて、少年に近付いていく。ついでだし、私もついでいる。ベッドから滑り降り、右手にある木製のがつしりした机に背中をもたれさせているお父さんの横を通り抜けようとした。すると、何故かお父さんに肩を掴まれた。

「何ですか、お父さん？」

「いや、何でもない」

はつとした表情をしたお父さんはすぐに肩を離す。

「？」

結局何だつたのだろう。でもお父さんが何でもないと黙つてゐるからいいや。

狭い部屋だ。お父さんの脇を通りて十歩もいかずに少年の目の前

に立つチャーチちゃんに追い付いた。

「お兄ちゃん、どーしたの？」

チャーチちゃんがとんとんと少年のお腹をつつく。それに反応した少年は視線を下に向け、チャーチちゃんを見る。

「お兄ちゃん？」

チャーチちゃんの心配げな表情に気付いたらしい。少年は無事だと告げる。

「あ、うん。大丈夫。それより……」

チャーチちゃんと田を合わせる為に俯いていた顔を上げ、私に視線を移す。

「うわあつ！」

えーと……何か、私を見た瞬間のけ反られたんだけど。おまけに転ばせてしまった。

傷付けばいいのか、申し訳なく思えばいいのか、憤ればいいのか。複雑な心境だ。とりあえず、適当に声を掛けてみる。

「あーと……大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫デス」

「良かつた」

廊下に尻を付いた少年の足元まで近寄り、立ち上がるのを助けようと思つて手を差し延べる。

「どうぞ」

「アアアアリガトウゴザイマス」

「あいつ……」

「ジヒイソン、落ち着けつ」

少年は顔を真っ赤にしながら私の手を取りゆつくりと立ち上がる。思春期かい？ 若いねえ。

「お兄ちゃんするい！ ワタシもつ」

何がするいんだか分からぬが、右手を少年に、左手をチャーチちゃんに握られて両手がふさがつた。

この少年、チャーチちゃんにルールお兄ちゃんと呼ばれてたけど

……どんな人だつたつけかな。あーと……ああ、思い出した。私に何かとちよつかいかけて来た男の子といつも一緒にいた子供だ。何をする訳でもなく私を見つめてきて、そのくせ私が視線を合わせようとすると首をあらぬ方向へ曲げてしまう。そんな子だつた。

「あなた……ルール君はお昼ご飯が出来たから呼びに来てくれたんですね？」

「ウン、ソウ」

その時、階段を駆け登る音がした。ルール君が戻つて来ないから誰か呼びに来たのかな。私は階段の方へと首を左に曲げる。

「本当にいた……」

「マジかよ……」

現れたのは一人の男の子。一人はデウラテさんの息子さんで、わりあい仲の良かつたアーザス君。さらさらの金髪が特徴のかわいらしい男の子である。もう一人は私にいたずらを敢行して来たグループのリーダー、ラインラ君。ルール君の兄でもある彼は細身の弟と違い、若干体ががつちりしている。

「お二人共、久しぶりですね」何分突然現れたもので、たいした言葉を紡げなかつた。無言よりはましだらうと、ありきたりな言葉を再会の言葉とする。

それが気に食わなかつたのだろうか。アーザス君が握りしめた左手を自分の胸に当て、目には涙を浮かべながら声を上げる。

「久しぶりじゃないよ！ 死んだつて聞いたからボクは……ボクがどんなに悲しんだと思う！？」

そんなに悲しかつたのか。申し訳ない気分になり、口から謝罪の言葉が滑り出す。

「すみません」

一方、アーザス君の隣に立つラインラ君のアーザス君を見る目を冷ややかだ。

「おまえ男のくせに泣くとか……おおげさだな」

「君にはボクの気持ちは分からないよ」

呆れるラインラ君に対してアーザス君は涙を指の腹で拭きながらそつけない態度で接する。そういうえば、この二人あんまり仲が良くなかつたな。

「わかりたくもねーよ」

そう言つと私に歩み寄つて来るラインラ君。

「よく生きてたな。すげえ爆発があつたつて聞いたから死んだと思つたぜ」

「何て事言つんだ君は！」

「いいんですよ、アーザス君」

私の為に怒つてくれるのは嬉しいんだけどね、これでも彼は私を案じてるつもりらしいよ。

「で、でも……」

「本人がいいつて言つんだろ？ 外野は黙つてな

「くつ」

久々だなこの応酬も。私は敢えて自信過剰に答える。彼にはこれ位スペースをきかせないと味が薄すぎるだらうから。

「ふふ、私は学園に特待生として招かれたんですよ。あんなの楽勝でしたね」

「よく言つぜ。一年も帰つてこねえで」

お互に一やりと口の端を吊り上げる。彼と付き合つと色々荒っぽい目に合つのも覚悟しながらなうにが、気が置けないから楽に過ぎせるのは嬉しい。

「ん？ 何でおまえオレの弟と妹の手を握つてんだ？」
何でと言われても困る。

「……成り行き、ですかね？」

「意味わかんねー奴だな。つーかですます調とかやめりよ。先生と話してるみたいでいらっしゃる」

「あれ、私にわざわざ弱点を教えてくれたんですか。ありがと「うござこます」

「ちつ。おまえもいつまで手握つてんだ」

相変わらず乱暴な奴。ラインラ君は真っ赤になつてゐるルール君の頭に拳骨を振り下ろした。両手がふさがつてゐる私にはどうする事も出来ない。拳骨はルール君の頭頂に直撃する。

「いたつ。何すんだよ兄ちゃん！」

何だかぼんやりしてゐたが、殴られたショックで正気に戻つたようだ。頭を両手で覆い抗議の声を上げるルール君。目に涙をにじませながら兄を恨みがましく睨み付ける。

「知るか。おまえがいつまで経つても戻らないのがわりいんだ」ルール君とラインラ君が言い争い始めたのに乘じてアーザス君が近付いて来て、私の手を握る。

「さ、アレシアちゃん。こんな奴放つておいて下に行ひ！」

「そーだよ、お兄ちゃん達なんかほつておいやおー！」

チャーリちゃん、あんた兄を見捨てるのかい？

しかしその兄は妹の裏切りを聞き逃さなかつたようだ。

「妹のくせになまいきだぞ！」

「べーだ！」

「この兄があつてこの妹あり。兄の脅しに困らず、舌を出して挑発する。

「このー！」

「アレシアちゃん危ないつー！」

あつ、馬鹿。妹に殴り掛かる奴があるか。チャーリちゃんを引っ張り私の懷に潜り込ませ、私自身を盾とする。

「はあ……女子供に暴力を振るつて楽しいですか？」

私に殴り掛かつても返り討ちになるだけだった事を思い出したのだろうか。ラインラ君は振り上げた拳を所在なさ気に下ろした。

「ラインラつー！ アレシアちゃんに当たつたらどうするんだ！」

顔を蒼白にしてラインラ君に詰め寄るアーザス君。

「つるせー！ 誰だらうが関係あるかー！」

今度は私の前に立ち塞がつたアーザス君へラインラ君の右拳が放たれる。アーザス君に避ける気配はない。ああもう。暴力で何でも

物事を解決出来ると思つてゐるのか。

まあ、彼は殴り慣れてるから逆に怪我を負わせる事はないんだけ
ど一応止めに入るかな。

「そこまで！」

私が動こうとしたその時、お祖父さんの耳をつんざくような大声
が響いて全員の体が硬直する。

気が付けば私のすぐ隣に険しい表情をしたお祖父さんが立ち、ラ
インラ君の振り上げた拳を掴んでいた。

「あ……え？」

拳を掴まれたラインラ君は呆然と拳を見、それからお祖父さんの
顔に視線を移した。

「さ、皆。お昼ご飯を食べに行こつじやないか

何が何だかよく分かっていない皆にお祖父さんは険しい顔を一転
してほころばせ、陽気にそう言い放つ。

邪気のないお祖父さんの笑みに、緊張した場の雰囲気はすっかり
流れてしまい、何だか訽然としない気分になりながら一行は階下へ
降りて行つた。

八、皆でお昼ご飯

皆と一緒に階段を下り、廊下を通りて食事室に足を踏み入れる。食事室ではイヤーヤさんとデウラテさんが料理の配膳をしている所だった。木で出来た食卓には真っ白いテーブルクロスが掛けられ、並べられた料理の合間に花瓶が置かれて色取り取りの花が飾られている。窓から差し込む明るい太陽の光も合わせり、食事室は随分と晴れやかになっていた。

「あんた遅遅かつたねえ。一体何をしてたんだい？」

イヤーヤさんが大きな銀白色の四角いお鍋から陶器で出来た円形の平皿に、雪魚と言われる、冬季にしか捕れないアジみたいな青魚を丸ごと焼いた物を盛り付けながら、声を掛けて来る。

「久しぶりの再会だつたもので、少々話し込んでしまつたんです

「……そうかい。良かつたねえ」

私の返事を聞き、微笑を浮かべるイヤーヤさん。

「はい」

そこにラインラ君が近くにあつた椅子を引っ張り出し、背もたれにあじだけを乗せた格好で座りながら会話に割り込んで来た。

「なあ、オレ達はどこに座ればいいんだよ母さん。どこでもいいのか？」

「ラインラ。みつともないからよしな」

顔をしかめて注意するイヤーヤさんだが、ラインラ君は姿勢を正そうとしない。

「腹減つたんだよ。もう動けねー」

「ラインラつ！」

イヤーヤさんは辛抱出来ず、ラインラ君を怒鳴る。

「へいへーい」

あ、一応言う事聞くんだ。ラインラ君は気のない返事をしてから、椅子に背を預けた。

「全く、始めからそうすりやいいんだよ」

イヤーヤさんはそう咳き、また魚を取り分ける作業に戻った。席、ねえ。お父さんとお祖父さんはいつもの場所に着席しているようだし、私も定位置に着こながな。私はいつもの場所、廊下から食事室へ入ると食卓で左右に食事室が分断されるのだが、その左側の奥から一番田の席に座った。ちなみに椅子は左右共に五脚ずつあり、ラインラ君は廊下から入つてすぐ右側の椅子に座った。

「アレシアちゃん。あの、さ。隣に座つてもいいかな？」

するとアーザス君がもじもじしながら近付いて来た。私の隣の席を所望らしい。

「ダメーーー！ お姉ちゃんの隣はワタシ！」

しかしアーザス君の後ろにいたチャーリーちゃんから猛烈な抗議の声が上がる。

「チャーリーちゃん、落ち着いて。アレシアちゃんの隣は右と左と二つあるから大丈夫だよ」

「そつか

チャーリーちゃんはすぐに納得した。

「それで、どうかなアレシアちゃん」

目線を不自然にあらこちへ向けながら私に話し掛けてくるアーザス君。私は黙つて立ち上がり、一つ右の席に移動した。

「あ、アレシアちゃん？」

そんな不安げな目で見ないでくれ。

「私の左隣りの席はお母さんの席だつたんですよ

「それじゃあ……」

意味を理解したアーザス君が顔をほこるばす。

「ええ、アーザス君もチャーリーちゃんも、もし座りたければ」自由にどうぞ

「ありがとう！」

「えへへへー、お姉ちゃんとお隣りー」

そんな事をしていると、食事室に扉一枚隔てる台所から、銅製の底の深い寸胴鍋を抱えたディーウアがやって来るのが見えた。肢体に密着している灰色のライダースーツの上に、フリルの着いたレモン色のエプロンを着用した姿はちぐはぐな気がしてならない。

「皆さん、気を付けて下さいまし」

ディーウアは鍋をお祖父さんのすぐ隣に安置する。その後ろからスープ用のお皿を持ってお母さんがやって来た。

「後はスープだけみたいね」

「マリーさん、私手伝うわ

「ありがとう」

ディーウアがお玉でスープを盛り付け、お母さんからテウラテさん、テウラテさんからイヤーヤさんの手を渡つていき、スープは全員の元に行き渡つた。あ、お手伝い位すれば良かつたかもしれない。まあ、次から気を付けよう。

スープの配膳が終わると、お母さんはアーザス君を挟んで私の左側に、ディーウアはチャーハイちゃんを挟んで私の右側に着席した。

「では、食べましょうか」

食卓の短辺に座り、全員を見渡せる位置に座るお父さんの「」の言葉を合図に、一斉に皆食べ始めた。

私はまず手始めに雪魚の丸焼きから手を付ける。僅かな焦げ田の付いた皮をフォークで破り、中の身を見てみる。白くて脂もたっぷりのおいしそうな見た目だ。

よし、じゃ……骨の排除作業に移らうか。

先ずは背骨を視認しなくては。片側の肉を細かい骨が混じらないよう細心の注意を払いながらお皿の隅に寄せる。そして背骨を鮮明に視認出来るようにし、慎重に尻尾を掴んで骨と肉の剥離作業に入る。慎重に、慎重に……くつ、まだ骨と肉がくつついていた。これを一気に引っ張つてはならない。そんな事をしようものなら、背骨

に付随していいる小さな骨達の剥離が困難となつてしまつ。びーけあふる、なのだ。右手で尻尾を掴んだまま、左手でフォークを取る。こうこう時、お箸があればと思うが贅沢は言つてられない。骨と肉のくつこちやつている部分をフォークでこつり、こつりと慎重に叩いていく。よし、剥離成功。背骨排除作業に戻ります。フォークを置き、左手は雪魚の頭へ。一回深呼吸をして、背骨を剥がし始める。あと少し、よし、えいっ。

任務成功。背骨と肉は完全に別れました。

「……えーと。何ですか？」

背骨排除作業の成功に達成感を覚え、何となくおでこを腕で拭おうとしたら、皆がこつちを見ているのに気付いた。

「お姉ちゃんすごいね……」

チャーチちゃんは目を輝かして私の雪魚をじつと見つめている。

「そうですか？」

つい私は懷疑的になつてしまつ。といつのも何ていうかだね、チャーチちゃん以外からは生暖かい目線で見られてるんだ。例えるなら、ひまわりの種を一生懸命類袋に溜め込んでいるハムスターに向けられそうな目線だらうか。うーん、我ながら上手くない例えだ。

「ち、チャーチちゃん。骨取つてもいいですか？」

「やつたー！ お姉ちゃんありがとうー！」

向けられる目線に、何だかいたまれない気持ちになつた私は、チャーチちゃんの未だ手付かずの雪魚と私の雪魚を交換し再度骨取り作業に入つた。

よし、この調子、この調子……ふ、もうその手には乗らないぞつ、終わりだ、えいつ。骨、排除完了。やつぱりこれ、楽しいな。でも流石にお腹が空いて限界だ。食べちゃおう。

私はほぐした雪魚の身をフォークに突き刺し、口へと運ぶ。うん、美味しい。雪魚に染み込んでる甘酸っぱい調味料が雪魚の脂とよく合つてるね。

何口か雪魚を食べた後、次に私はデウラテさん持参の野菜サラダ

にフォークを延ばす。まだ生野菜は危ないご時世、野菜は調理して食べるのが基本。このサラダも全て茹で野菜が使用されている。青いカブ（らしき野菜）に、紫のニンジン（に似ている根っこ）、赤いトマト……てこれは日本でも同じか。ともかく、三種類の茹で野菜には透明な液体が掛けられるようだ。パクリ。ん……ほん酢っぽい。醤油もないのにこの味を出すとは、デウラテさん恐るべし。ていうか、懐かしい。私は左隣りのアーザス君をちらりと見遣る。こやつ……前々からこの疑似ほん酢を食していたのであろうか。何て、羨ましいんだ！

雪魚の骨を気にせざばりほりと頬張るアーザス君が私の視線に気が付く。

「どうかした？ アレシアちゃん」

「いいえ。何でもないです」

私はアーザス君から田を背け、お母さんの作つたスープを飲む。ん？ あれ、お母さん……これ、朝のスープを水増ししたのでしょうか。具に味は染みて美味しいのは確かだからいいけど、人を集めた食事で手抜きをすることは、何という度胸なんだ。

「アレシアちゃん、手が止まってるよ？」

「ふえ？」

おつと、スプーン口に突つ込んだままだった。アーザス君に指摘され、慌てて引き抜く。

「何だかさつきから気になるなあ。本当に何でもないの？」

いぶかしがるアーザス君の方に顔を向ける。するとアーザス君の背後にお母さんがいるのだが、今お母さんの顔が私に向けられている。その顔はにこやかに微笑んでいるが、スープの件は話さないでね、と目だけが笑わずに語つてるのが分かる。

「ハイ。何でもないです！」

「本当にかい？」

「いや、その、久しぶりに美味しい料理が食べれて感動してるのですよ」

「そりゃ言われると嬉しいねえ」

対面の席右側に座つているイヤーヤさんから機嫌の良さそうな声が届く。

が届く

「お世辞に決まつてんだろ母さん」

イヤーヤさんの右側に座るラインラ君は、黙々と料理を口に運びながらしぐれつとそう言った。

「お世辞じゃないです。本当に

私はワニシハ廟の行調を行ひ、其の強ひ口調で語を主

「私もイヤーヤさんとマリーさんの料理、好きよ。アーザスもそつ

でしょ？

イヤーちゃんの左隣りに座るテウラテさんも話に乗って来た。

お母さん
が夕も暮れしいと思つて

るテウラテさん。

ヤニヤニ本當はこの焼き魚は美味しいれ

そこへかい？ そんなに手の込んだ料理じゃないんだよ。

「こんな感じでお毎日」飯は始終和やかな雰囲気で進んでいったのだ

つ
た。

九、去る人達

お昼ご飯を食べ終わった一同、それぞれが思い思いに時間を潰している。

お母さん達は食事室で会話に花を咲かせていた。

「そろそろ家事しないとまずいわ……」

「そうね」

「仕方ない、帰るかねえ」

さつきからその繰り返し。お母さん達、そろそろ動かないといけないんじやないだろ？

一方私達子供組は食事室の隣の居間に移っていた。居間にある対になった四人掛けソファにアーザス君とチャーハイちゃんと私、ラインラ君とルール君に分かれて座り、話をしている。

「なあ、アレシア。ちょっとオレに付いて来いよ」

対面に座るラインラ君がニヤニヤしながら話し掛けて来る。

「何処にですか？」

私は眠っているチャーハイちゃんの頭を膝に乗せながら、話を聞く。「外だよ」

そうだな、久々にこの辺りを見て回るのも楽しそうだ。お母さんに一言残してから行くか。

「いいですね。お母さん、ちょっと外行って来ますね」

少し声を張り上げて、食事室にいるお母さんに言葉を伝える。

「え？ 外つて何処に行くの？」

私はラインラ君に視線を向けるが、ニヤニヤしたまま答えてくれない。

「ラインラ君と一緒になので心配ないですよ」

「でも、今日位家でのんびりしない？」

お母さんの表情は見ていて凄く胸が締め付けられる程必死だった。まだ、私が目に届く範囲にいないと不安なのだろうか。

ラインラ君とお母さんを天秤に架ける。ラインラ君はお空の彼方へ飛んで行つた。

「ごめんなさいラインラ君。また今度にしてくれませんか？」

「ちっ、もういい。ルール、行くぞ」

ラインラ君は舌打ちをすると、足を早めて居間から出て行つた。

「またね！ アレシアさんっ！」

ルール君の別れの挨拶の声に、イヤーヤさんが何事かと居間へ視線を向ける。

「ちよつとラインラとルール、何処行くんだい！？」

イヤーヤさんは慌てて立ち上がり、食事室から居間にせかせかと早歩きで入つて来たが、ラインラ君とルール君の方が一足早かつた。

「遊ぶ約束があるんだよ、行つてきまーすっ！」

「母ちゃん行つて来るっ！」

玄関の扉が閉まる音がして、ラインラ君とルール君は去つた。

「全くあの子達は……仕方ない、あたしも帰るよ。チャーリ、来なさい……て寝ているのかい」

「ぐつすりですよ」

「ま、かえつて騒がないから楽だよ」

いつの部屋に来たイヤーヤさんは、チャーリちゃんを見てホッとしていた。

イヤーヤさんは寝ついているチャーリちゃんを軽々と持ち上げ、抱っこした。

「イヤーヤさん、帰つちやうの？」

「そうだね」

「つーん、じゃあ私も帰ろうかしら」

お母さんとデウラテさんも居間にやつて來た。イヤーヤさんが玄関に歩き出しだの、アーザス君もソファから立ち上がり、皆で後

に続ぐ。

「デウラテさん、マコーさん。昼食会樂しかったよ。アレシアちゃん、アーザス君も元氣でね。じゃあ、さよならだ」
イヤーヤさんはチャーチちゃんを抱き抱え、玄関の扉をくぐった。
私達はその背中に別れの挨拶を送る。

「さよなら」

「うん、またねイヤーヤさん」

「さよなら……ふう、私も帰るわ」

デウラテさんも玄関を抜け、外へと出た。冬の終わりの涼しい風
がデウラテさんの三つ編みに結い上げた金髪を撫でります。

「あら、本当に？」

「うん、お洗濯も沢山あるし、お掃除も、まだ。やる事だらけだも
ん、帰る」

「デウラテさん」至極名残惜しそうな表情を浮かべて、別れの挨拶
をするお母さん。

「やう。じゃ、またね」

「うん、また明日。ほら、アーザスも来なさい」

「ボクなら一人で帰れるよ？」

デウラテさんの手招きにこいつ答えるアーザス君。しかし一人で帰
れるかは問題じゃなかつた。

「宿題、帰つたらすぐ済ませる約束でしょ？」

「……そうだったね、お母さん」

アーザス君は少し俯き、デウラテさんのいる石畳の道路へ足を踏
み出す。

「さよなら、マコーさん、アレシアちゃん」

「また会おうね、アレシアちゃん。マコーさん」駆走でした

「また明日ね」

「さよなら」

私とお母さんも道路へ出て、一人を見送る。デウラテさんとアーザス君が、隣の彼らの家に入るまで手を振ったり声を掛けたりした。

彼らが家に戻ったのを確認して、足を自分達の家へ向けたが、お母さんが立ち止まる。

「どうかしましたか、お母さん」

「……鍋、イヤーヤさんもテウラテさんも忘れてっちゃった」

「あらら。もう一人共帰つてしまつた。

「洗つてから返せばいいんじやないですかね？ その方が喜びます

よ、きっと」

「そうね、そうしましょう」

「あ、皿洗いは手伝います」

「何？ 突然どうしちやつたの？」

「いいじやないです。手伝いたい気分なんです」

「そう？ ジヤあ一緒にやりましょうか」

お母さんは微笑みながら了承してくれた。喜んでくれたのなら幸いなのだが。

「はい」

私達は我が家に戻つた。

「よく出来たわね。偉いわ～」

皿洗いも終わり、居間のソファに座つてくつろぐ私とお母さん。私はお母さんに抱きしめられ、頬擦りされている。多分褒められているんだろうけど、心がむず痒い。

私が恥ずかしさにむずむずしていると、玄関が激しく叩かれる音がした。

「もしかして、お鍋かしら？」

「どんどん、どんどんどん。」

「にしては、焦つてゐるよつた気がします」

「ちょっと見てくるわ」

「私も行きます」

一人で玄関まで歩いて行き、扉を開ける。

「すみません！ 参謀次長殿は『在宅でしょ』つかつ！？」

扉の前には、黒い詰め襟の軍服に身を包んだ童顔の男がいた。綺麗に七三に分けられた髪に、真ん丸の目が余計彼を幼く見させる。「ジョイソンならありますけど……どうつかされたんですか？」

男は私を見つめて固まっていた。

「あの、アレシアが何か？」

慌てて姿勢を直立不動にした男は吃りながら弁明する。

「あ、い、いえ！ 私は『息女に何か誤解をしていたようです。か、可愛い』『息女ですね』」

私の目線に合わせてしゃがんだ男は取り繕うように私を褒め出した。私は社交辞令として曖昧に微笑んどく。

男は顔を真っ赤にして動きを止めた。おーい、どーしたんだー？

「一体何の騒ぎだ？」

お父さんを先頭に、お祖父さんとディーウィアが廊下最奥にあるお父さんの書斎から顔を見せる。

「ジョイソン、軍の方がお見えよ」

お父さんは眉をひそめて男を睨む。

「スタンドゥハル……君は私の娘に用があるのか？」

おとーさん、魔力、魔力漏れ出てるつて。スタンドゥハルさんは威圧感たっぷりの魔力に体をビクリと震わせ、物凄い早さで立ち上がつた。

「ち、違います！ 決してやましい思いは持つておりません！」

おい、自白してるぞ。私は思わず「」、三歩後退する。

「それは、私の娘に何の魅力もないという意味か？」

「そうなの、スタンドゥハルさん？」

不機嫌の度合いを増したお父さんに、目の座つた笑顔を浮かべ出 すお母さん。

はい？ 私の両親はどうしたんだ？ 怒りの矛先が間違つてないか？ といふか、そんなに怒る程の事か？

お父さんは体外に放出した魔力をゅつくりと一 点に集中させ、お母さんは何やらぼそぼそと詠唱を始める。

うわ、本気なのか。私は両親を信じてはいるが、万が一を考えてディーウアに目配せしておく。

「そそそそそんな事ないです……大変愛くるしいお子様だと思います」

もはや腰が引けまくっているスタンドウハルさん。冷や汗をダラダラと流し、顔を青くしながら弁明を続ける。

「本当か？」

お父さんが眼光鋭くスタンドウハルさんに尋ねる。

「勿論です！ 今すぐにでも抱きしめたい位ですよー！」

あーあーあー。もうこの人駄目だな。あんなに不機嫌な両親にこんな事言つなんて。ディーウア、私スタンドウハルさんの命を助ける気になれないよ。

「そうか」

「そうよねえ」

ええ？ 何故今のスタンドウハルさんの言葉で怒りを納める？

何はともあれ助かつたスタンドウハルさんはホッと息を撫で下ろしている。

だが次の瞬間、スタンドウハルさんは恐怖に顔を引きつらせた。

「だがもし実行すれば殺す」

「でももしそんな事したら、黒焦げにするわよ？」

お父さんは魔力を集中させた右人差し指でスタンドウハルさんを指差し、お母さんは既に何らかの魔法の発動を待機させている。この魔力量だと最低でも中級魔法クラス……放たれれば確実に我が家は崩壊するだろう。

「……はい。勿論で御座いますです」

お母さんお父さんの恐喝と呼ぶしかない行動に、スタンドウハルさんは体を子犬のように震わせながらしきりに首を縦に振つていた。

「……それで、何故自宅に訪ねて来た？」

魔力を焼き消したお父さんが用件を聞くと、スタンドゥハルさんが早口に切り出す。

「今朝から参謀次長殿がおられなくなつた為に業務が滞つております！ お戻り下さい！」

「あなた、無断で抜け出して来たの？」

お母さんは隣に立つお父さんの顔を窺い見る。罪悪感があるらしく、お父さんは顔を合わせない。

「……ああ」

お母さんの問いを肯定したお父さん。そのお父さんにお母さんは笑顔でこう言つた。

「ふーん。良かった」

「良かった？」

お父さんにとつてこの返答は意外な言葉だったのだらう。お父さんを見つめて微笑んでいるお母さんを見つめ返す。

「だつて、仕事より家族を優先してくれたのよね」

「やう、なのかもしれないな」

お父さんにしな垂れかかつて来るお母さんをお父さんは抱き寄せた。固い表情だったお父さんの口には微かな笑みが浮かび、お母さんの華奢な肢体に腕を回す。そして二人は顔を徐々に近付けて行き

……。

「ウオッホン！」

お祖父さんの咳ばらいで辺りに目が行くよになつた両親は、そそくまと体を離した。

「スタンドゥハル、身支度をしてくる。先に馬車に戻つてくれ」

無表情になつたお父さんは何事もなかつたの如く命令を下す。

「り、了解しました！ 御者からはいつもの場所に停車させてあるとの事です」

お父さんが首を僅かに縦に振ると、スタンドゥハルさんは逃げるよつにして開いたままの扉から出て行つた。

「アレシア、もう行かないとならしいよつだ」

お父さんに抱き上げられた私は、お父さんと顔と顔を付きました。

「行つてらつしゃい、お父さん。無理はしないで下さいね」

年齢にそぐわない発言だったかもしれない。お父さんは微笑した。

「ありがとう、アレシア」

私を抱いたまま、お母さんに近寄るお父さん。

「マリー、そうこうつ訳だからもう行へよ」

「そつか。お仕事頑張つてね」

寂しげな表情を浮かべるお母さんと、お父さんはゆっくりと近付き何食わぬ顔で口付けした。

うぐ、間近で見せ付けやがって。こいつまで恥ずかしいだら。

「では、行つて来る」

驚いて口を押さえているお母さんと、顔を真っ赤にしたティーウア、ニヤリと笑うお祖父さん、最後に至近距離であんな物を見せられてお父さんの顔を直視出来ない私を置いて、お父さんは仕事に向かつたのだった。

十、日も暮れて

青空が陰り^{かげ}、紺色に近付いて来た頃。太陽が沈むという事はイコール仕事が終わる時間帯である。

嬉しい事に、店じまいした近所の人達が帰りのついでとして立ち寄ってくれた。そしてお祝いと称しては色々と物を頂いた。

例を挙げれば、「うへへ……またアレシアちゃんの頭を撫でられるとはなあ」「何色目使つてんだい馬鹿っ！」という魚屋さん夫婦からは、体長一メートルもある真っ黒なトピードウーという魚を頂き、「アレシアちゃん……」「これも神の思し召しねつ！ 神は言つてはいる！ 彼女を抱けと！」と叫ぶ新興宗教家達からは聖なる水とか言つ物を小さな瓶に詰めて貰い、「はつはつはつはつ！ これをやろう！」「すみませんすみません、ウチの旦那が役立たずですみません」と嘆く金満家夫婦からは旦那さんの黄金の全身像四十口セル（約六十センチ）笑顔バージョンを頂いた。他にも何十人もの人がお昼を過ぎた辺りから今までに訪れて来てくれた。私は、自分が意外に人とのつながりを持つていた事に驚かされた。

それだけの人が訪れ、大なり小なり贈り物を置いていったのだから、居間にはちょっとした贈り物の山が出来ている。

「凄い量ですね……」

「そうじゃなあ」

私はお祖父さんと協力してこの山を取り崩し始めた。大抵の品物は、倉庫に眠つてゐる使いそうで使わないような物だ。タオルや万年筆、コップなど、そんな品々。ただ中には役に立ちそうな物も含まれている。金物屋さんを営むソブルエさんからは上等なナイフを頂き、鞄屋さんのデビジさんからはオリーブ色のメッセンジャーバ

ツグを頂いた。特に、このメツセンジャー・バッグはただのバッグじゃない。バッグの内部空間が拡げられていて、見た目より遥かに沢山の物を収容する事が出来る。名前は名付けるのが面倒臭かつたのかそのまま空間拡張バッグと呼ばれている。

それらの品々を要らない物は倉庫へ、要る物は自室へ分類していく。ただ私は物を大切にする性分なもので、居間が片付いた代わりに自室が物で埋まってしまう。

「これ、アレシア。ただ移動させただけじゃないか」

お祖父さんに苦笑されたが、貰い物って扱いに困る。無下には扱えないよ。俯く私の肩に手を添え、お祖父さんは優しく語り掛けて来る。

「ゆっくり考えていいから、アレシア。時間はたっぷりあるんじゃからな
「……はい」

今度は自室にある品々の整頓に私達は手をつけた。
一時間程経過し、片付けが終わる。片付けというか、部屋のスペースに押し込んだだけの気もするが、まあ、終わりは終わりさ。私はお祖父さんの膝上に乗せられながら居間でのんびりとくつろぐ。
薄暗い室内を暖炉の火がほのかに照らす。静かな空間にゆらゆらと揺れる明かりは幻想的に見えた。

「ご飯出来たわよー」

隣の食事室からお母さんの声が届く。

「では、行くかの」

「そうですね」

私はお祖父さんと食事室に入る。

「豪勢じやな」

お祖父さんが感嘆の声を上げたのも無理はない。食卓の上にはトピードウーの兜焼きがドドンと場所を占め、その周りにトピードウーの胴体部分を使った料理が所狭しと並べられている。トピードウーって魔獸に分類されてるけど、信管さえ取り除けば爆発はしない

のでその身は美味しく食べられる。と、いうか、中々捕獲される事のない高級魚だ。

お母さんが一ヶコリ笑つ。

「生だつたから、鮮度が命ですもの。今日中に食べてしまつましょ」

「アペーダーは我が家の糧となつた。美味しかつた。以上、終わり。

「と、いう事で、おやすみなさい！」

私は食事室から逃げる。

「駄目よ。今日体洗つてないでしょ」

しかし満面の笑みを浮かべたお母さんに後ろから抱き上げられてしまつた。

「一緒に入りましょうね！」

嫌だ嫌だ嫌だ。何でこの歳になつて母親とシャワー浴びなきやならないんだ。私は逃げ出したい一心でじたばたじたばた。はーなーせー。

「そ、そんなに……私と入りたくないの？」

う……私があんまりじたばたしたから、お母さんを傷付けてしまつたみたい。私の馬鹿。もう家族を心配させちゃ駄目じやないか。急いで言い繕つ。

「そ、そういう意味じゃないんです。何と、いうか、恥ずかしいといふか……」

「ふふっ！ なら何の問題もないわねっ！ セ、行きましょー！」

意氣揚々と歩くお母さんに抱っこされながら到着したのはお風呂場。といつても浴槽はなく、固定式のシャワーノズルからお湯が流れ出るだけだ。もし浴槽に浸かりたいなら、大浴場に行かねばなるまい。ここまで来たらおしまいだ。覚悟を決めるか……。

「アレシアちょっと待つててね。着替えを持ってくるわ」

そう言つてお母さんは廊下に出て行つた。

チャンス！ 先に入つてなるべく一緒に入る時間を削つてしまお

う。まだまだ若々しいお母さんと狭いお風呂場に一緒にいたら頭がどうかしてしまつ。廊下とお風呂場の間に設けられた脱衣所で急いで服を脱ぎ、水色のタイルで覆われたお風呂場に足を踏み入れる。足元のタイルはひんやり冷たい。空気も冷え冷えとしている、早くお湯で温まろう。給水栓に手を延ばし軽く捻る。するとシャワーノズルから水がほどばしり出した。さ、寒い！凍え死んじゃう！何でお湯じゃないの？！

落ち着け……落ち着くんだ。きっとだんだん水が温かくなるに違いない。

体を震わせながら、じばし待つ。全然温まらない。いや、我慢だ。あつとも少しあつて。だつてお湯が出てたんだ。出ない訳がない。おかしいな、まだなの？ もう、一分は経過したよ？ 給湯機の調子が悪いのかな？ うー、早くして。風邪引いてしまつ。

あつ……駄目だ、もう数分は経つたのに。無理だ、堪えられない。寒いよ。ポンコツ給湯機、早く何とかして。どうかせめて水を温くして下さい。いや、もう温くなくてもいいから。一、二度水温を上げて……駄目、か。

ああもう、こうなりや魔法で破壊の限りをつくしてしまおうか？ ほーら、魔力がほどばしってるぞー、早くしないと壊されるかもよー？ 私は指向性の高い魔力をシャワーノズルに向け、しばらく睨み合ひ。……はあ、何かやつて自分に憐憫を覚えた。もう諦めてこの冷水に打たれこう。気分的にも冷水に打たれたい。目をつむり、ただぽつねんと冷水に打たれ続ける。

「アレシア？ あらこれ、水じゃない！」

その時お母さんの叫び声と共に、暖かい温水が降り注ぐ。

あー、生き返るー。

「もう、何やつてたのー！ 風邪引いやうでしょー！」

「きなりお母さんに叱られる。そうは言つが、仕方ないじゃないか。給湯機が動かなかつたんだ。と、つむつていた目を開いてお母さんに抗議すると、一糸纏わぬお母さんの姿が真正面で視界に入る。くつ、目のやりどころに困るじゃないか！　あー、もう。昔も今も見ていて恥ずかしいのは何でなんだ。いい加減慣れさせてくれ、心臓に悪い。

「アレシア忘れちゃつたの？　お湯を出すには脱衣所のスイッチを押さないといけないのよ」

「え？」

「そうだつたけ？　あー……確かにそんな記憶があるなあ。道理でいくら待つてもお湯が出ない訳だ。」

「すっかり忘れてた……」

「こんな調子じや、体の洗い方も覚えてるかも疑問ね……」

「私の咳きに、お母さんは嬉しそうな口調でそつと言つた。

「そうね、私が洗つてあげるわっ」

「あ、大丈夫でーす。私、一人で出来ます」

二口二口しながらにじり寄るお母さんに何故か脅威を覚えて後ろに下がるが、大人が五人も立てばぎゅうきゅうになる程度の広さしかないお風呂場だ。すぐに正面から抱きしめられた。うああ、お母さん三十路なのに肌のハリツヤが良いですね、とても柔らかく気持ちいい……つて、私は何を考えてるんだつ！

「ふふふ。先ずは髪から洗いましょうね~」

ふう、助かつた。私の髪は腰の辺りまで伸びてるから、お母さんは私の背後に回つてくれた。今之内に心を落ち着けよう。

植物油から作られた石鹼を泡立て、頭皮をワシャワシャされる。うあー、気持ちいい……。

「アレシア何処か痒いところあるー？」

「ないでーす」

続いて長く伸びた髪を後ろで何やかんやされ、髪を洗い終えた。

「うふえへへへ。じゃあ次はお体キレーにしましょーねー」

それは勘弁してくれ。羞恥で死ぬ。どうにか回避しないと。だらしなく頬を緩めるお母さんに時間稼ぎを試みる。

「あ、あ！ 私もお母さんの髪洗つてあげますよー。」

「あら、本当？」

「はい！」

「じゃ、お願ひアレシア」

「任せて下さい」

お母さんは木製の桶っぽい椅子に座つたので、私は自分と同じ白銀の長髪を洗い始める。よし、なるべく時間を稼ぐぞ……くつ、これつて意外に力のいる作業だね。魔力で肉体を【身体強化】してやり切つたが、ちょっと魔力に頼り過ぎかもしれないなあ。そうだ、これから私はどう生きて行こう。魔王は自爆しちゃつたし、しばらくなはのんびり出来るけどいづれは身の振り方を決めないとなあ。就職するか、結婚……結婚、か。性別変わってるんだが、アレに私は、いやいやいや。まだ早いって！ まだ入れるの入れられるの心配する必要はないつ！

「ありがとう、じゃ今度は私が洗うわね！」

「え？」

あ、しまつた。もうやり切つてしまつた。もう、私の馬鹿！ アレでナーダの考えてたから……つむう、途端に下半身に意識が集中して来た。まじまじと見つめてみるが、何かが変わる訳でもない。そこにはやつぱり、雌雄の内の後者に相当する器官はなかつた。

「うふふふふ。ああもうーー わすが私の我が子ね！」

「つー？」

とかまたくだらない事を考えてたらいきなりお母さんに私の上半身を石鹼で泡立てられた布切れで優しく擦り始められた。

何がさすがなのが分からないが、くすぐったいよ。体が意思とは無関係に震えようとする。だが今のふやけた笑みを浮かべている興奮したお母さんに気付かれたら、状況が悪化する気がしてならない。私は堪える事にした。しかし懸命に努力して隠そうとしたが、荒く

なつた息遣いだけは隠しおおせなかつた。僅かな吐息が漏れる。

「…………ふあ」

「…………」

「どうしたんだりつ？」お母さんは急に私に背中を向けた。

「ぐ…………ううう、アレシア…………私、これ以上、は…………や、先に出て

るわね…………」

「でもお母さん、まだ体洗つてなこじやないですか」

「じめんなさいアレシア！ 私にはもう無理なのっ！」

やう言い残してお母さんはお風呂場の戸を開けをぴしゃりと閉めて
出て行ってしまった。

な、何だったんだ…………？

十一、寝る時間

いきなりお母さんにして行かれ、私はしばらく呆然としていた。私、何かしてしまつただろうか。ちらりと見たお母さんの表情は、何かを必死に堪えていたように見えた。

まさかとは思うけど、久しぶりにあつた私を我が子として受け入れられなかつたのかな。一年以上離れ離れたんだもの、人の気持ちなんてどう変化するか……そんな事考えたくない。でも、もしこの考えが正しかつたら？ この先待つてるのはぎこちない家族ごっこ？ 嫌だ、考えたくない。心にねつとりと沈着する不安をビビりにかしたくて、私は温水を頭から浴び続けた。

指がふやけるまでシャワーを浴びた私は、お風呂場から髪をタオルで拭きながら居間に入つた。天井に取り付けられた魔力灯が室内を柔らかいオレンジ色の光りで照らしている。ソファではお祖父さんとディーウアが座り、その対面のソファにはお母さんが座つてしまへりをしているようだ。私を視界の真正面に捉えたお祖父さんは声を掛けて来る。

「さつぱりしたかねアレシア」

「そうですね、さつぱりしました」

体はね。頭の中ではどうしてお母さんが慌てて出て行つたのかで一杯だよ。

「ディーウアさん、あなたも体を洗い流されはどうかな？」

ディーウアに体を洗うよう奨めるお祖父さん。ディーウアって、

汗かいたりするのか？『ディーウアは入る必要あるのだらつかと思うのだが。

「良いので御座いますか？』

「勿論ですとも。マリーさん、『ディーウアさんに衣服を貸してやつてくれないかね』

「分かりました。ディーウアちゃん、着いていらつしゃい』

「真にありがとう御座います。私、感謝のしつばなしで御座います。嬉しそうに微笑む『ディーウアを連れて私の横を通り過ぎるお母さん。軽く私の頭を撫でてから廊下に出て行つた。触れた手から大きな愛情を感じ、私は戸惑う。さつき何でお風呂場から急に飛び出したんだ？どちらが勘違いなの？それとも、お風呂場での一件には別の、より妥当な解釈があるのかもしれない。』

「アレシア、そんな所に立つてないで座りなさい』

「はい』

私が立ちっぱなしなのに気付いたお祖父さんに促され、その隣に腰掛ける。

「何があつたのかね？元気がないよつじやな』

「うわ、お祖父さん鋭い。何故分かるんだ？』

「いや、私は別に……』

ただ、正直にこの不安を打ち明けたらダイレクトにもうお前は他人にしか見えないとか言われるのは勘弁願いたい。といつ訳で、打ち明けない。臭い物には蓋をしつづけ。後でじっくりお母さんを観測して、真実を明らかにしてやる。

「隠さなくていい。愛する孫にそんな顔をされては儂も辛いんじやよ。話してござらん』

そんな顔？私は表情を隠していた積もりだつたんだけど、お祖父さんにはまるわかりのようだ。なら、少し位しゃべつても大丈夫、かな？

「……たいした事じゃないんですけど、お母さんが突然お風呂から出て行つたのでどうしたのかなーって

お母さんが私を嫌う可能性は、朝からの反応を見た限りではほぼありえないとは思う。でも人間の心中を計る事は出来ないのだ。万が一を恐れた私は回りくどい言い方で自分が傷付かないようにしておいた。

「ああ、お母さんもアレシアに再会して興奮したんじゃねつなあ。のぼせて立ちくらみを起こしたと言つてたよ」

「へ？」

「何だ、そんな事だつたのか。良かつた……。

「どうかしたかいアレシア？」

「あ、いや、お母さんは大丈夫だつたんですか？」

「うん、ちょっと休んだら良くなつたよ」

「そうですか」

不安が解消され、安堵で口元に笑みが自然に浮かんでしまつ。

「あら、私がどうかした？」

そこに、ティーウアの面倒を見たお母さんが戻つて来た。

「マリーさんの体調をアレシアが心配してるんじや」

「心配かけて」めんなさいアレシア、ちょっとほんじゃ過ぎやぢやつたわ

そう言つてお母さんは私をソファから抱き上げた。

「無事なら、いいんです」

先程まで色々とバッドエンドばかり想像していたせいが、抱き上げられた私は反射的に自分からお母さんに抱き着いていた。

「アレシア。大好きよつ！」

それに嬉々として抱き着き返して来るお母さん。ただ耳元でそんな事言わなくとも……体が熱くなるのが分かる。顔見られたら多分赤くなつてるんだろうな。

でも、悪くないと思つてしまつ私はマザコンなのだろうか。

しばらくするとティーウアも帰つて来て、話に花が咲いていく。

それぞれが思い思に語り合ひ、聞き合ひて、あつという間に時間は流れていった。

すつかり夜も遅くなり、小さな私の肉体があぐびを出したて眠りごと訴え出す。すると誰が言つともなしに寝る事になつた。全員で一階に上がる。階段を上つてすぐ左に曲がり最初に見える扉がお母さんとお父さんの寝室だ。

「おやすみ、マリーさん」

「おやすみなさいませ、お母様」

「おやすみなさい、お母さん」

私達はお母さんにおやすみの挨拶をして歩みを進め……ひとつしたら、私だけお母さんに引き入れられた。

「アレシア。今日は一緒に寝ましょうねー」

寝室は窓から差し込む月明かりで、薄明るい。私はお母さんに抱き着かれながらベッドに横になる。

ふああ、眠い眠い。目をつむると、途端に意識が眠りの世界に引き込まれていく。

ん。私の額に誰かが触れている。お母さんだな。

「アレシアあ、もう寝ちゃったの?」

お母さんの不満げな声が耳に届く。寝たりや黙りなのだらうか。

「かくにーん」

私が返事をしようとしたその時、お母さんは私の脇腹をくすぐり始めた。「ああ、体がもにょもにょする。私は目を開き、眼差しに抗議の意を込めてお母さんを見つめた。

「何するん、ですか?」

「なーんだ、起きてるじゃない」

悪戯つ子になつたお母さん。せりに技巧を凝らして、くすぐりを続けていく。

「あははははは、や、やめ、さははは、えへへ、えへへへへー。」
「ちよ、島出来ない。島出来ないってー。」

「あーもつ、可愛いわね！」

「えへへへー！ によほほほー！」やさややややーつー。」

ほ、本当に辛いんだけど……。

「ああんもつとー もつと笑顔を見せてえー！」

「ふへえ……」

うあ……も、無理。急に体から力が抜けてしまった。ははは、どうやらい呼吸困難で倒れてしまつたようだ。

「あ、アレシアつ。だ、大丈夫？」

息を整え、心配させてしまつたお母さんに何とか返事をする。

「大丈夫、大丈夫です。ただ、も、やめて下せー」

「ごめんね、アレシア」

腕を自由に動かしてくすぐれるよう、私から体を離していくがまた抱きしめて来た。

「大丈夫ですから。安心して下せー」

それにして、ちょっと私の体弱すぎないだろつか。くすぐられただけで、体から力が抜けてしまつなんて。

「もう、寝ましょつか」

これで悪戯にも懲りたのだろう。お母さんは皿をつむつた。

「そうですね」

だが、私を抱き枕みたいにギューとしないで欲しいな。寝苦しいんだけど。

ロミリア共和国の首都、ロミリアには七つの緩やかな丘があり、七つの丘毎に建てられる建築物の大まかな傾向があった。丘の内の一つ、パラティアの丘には政府が保有する建築物が多く、ジョイソンが勤めている軍務省もまたパラティアの丘に建てられている。

そのパラティアの丘の道を一台の馬車が走っていた。脊が高く足の細い一頭の馬に引かれる馬車は鉄製の車体を黒く塗られ、前後左右に開けられた窓枠にはガラスが嵌められ中から赤いカーテンが引かれている。クリーム色の石畳みの道は四頭立ての馬車が余裕を持つてすれ違えるだけの広さがあり、左右の端には歩道もある。そして、道の左右には見上げんばかりの高さの鉄柵が延々と続いており、通る者にどうにも閉塞感を与えているようだった。

緩い坂道をしばらく馬車が走ると、軍務省の文字が青銅に描かれた立派な標札が張り付けられている門が見えてきた。

御者が門の前で馬車を止めると、革鎧に身を包んだ兵士二人が門の隣にある煉瓦造りの小さな小屋から出て来て馬車の側面に近付き、扉を叩く。ジョイソンはそれに応じて馬車の扉を開いた。そのジョイソンを小屋に開けられた小さな穴から、ひそかに弓兵が狙う。誤射を避ける為、弦に矢はつがえないが万が一の事を考えての措置だ。

「登庁許可証をお見せ下さい」

兵士は高官であるジョイソンに一瞬気圧されたが、直ぐさま気を取り直し任務を果たそうとする。

ジョイソンは魔法陣の描かれた五センチ四方の紙を取り出し、兵士に渡す。反対側ではスタンドゥハルも別の兵士に同じ紙を渡している。一人の兵士は小走りに小屋へ戻つていった。

小屋の内部は六人が一度に着席出来るテーブルと六脚の椅子があるだけの質素なもので、椅子に一人の男が座り、弓兵は小さく穿たれた穴からジョイソン達を監視している。二つある窓には共に鉄製のシャッターが内側から下ろされ、弓兵の為に開けられたいくつかの穴から差し込む僅かな陽光だけがこの部屋の光源だ。

「お願いします」

兵士二人は紙をロープを羽織つた魔法師の前に置く。魔法師は紙を一覧すると、うなづいた。

魔法師によつて本物だと判断された紙を携え、兵士達はジョイソンとスタンドゥハルの元へと戻り紙を返却した。

こうしてようやく門は開かれ、軍務省の玄関前に馬車は止まる事となつた。

軍務省は白い漆喰^{しっくい}で表面を塗り固められた煉瓦造り六階建ての、立方体の形をした建造物である。玄関前の入口の左右には兵士が一つずつ直立不動で立つていて、馬車から下りるジョイソンとスタンドゥハルに敬礼をした。

軍務省内部に入ったジョイソンとスタンドゥハルの目にまず入るのが、大階段だ。大理石で製作され、十人の大人が手を繋いでも丈夫な程横幅の広い大階段は、一階から二階ではなく三階に繋がつていて。これは軍務省に賊が侵入した場合、簡単に地理を把握させない為の構造……との建前だが、設計ミスというのがもっぱらの噂だ。ともかく、そのテロ対策とやらのせいで軍務省は初めて訪れる人間には迷路のようを感じるかもしれない。

ジョイソンはその大階段の横の通路を通り抜け、複雑な通路を何分もかけて歩いた後、ようやく自らの仕事場所に到着する。参謀次

長の立場であるジョイソンは現在兵站面での最高責任者だ。中々上等な部屋が割り当てられている。それはエレベーターのない時代、下の階の方が家賃が高かつた事と照らし合わしても明らかだ。観音開きの扉を開け、スタンドウハルと共に三十畳はある参謀次長室に入る。室内には入つてすぐの所に来客用のソファと脚の低いテーブルがあり、それらを通り過ぎるとジョイソンの為に用意された机が部屋の中央附近に設置され、さらに奥に向かうと秘書のスタンドウハルの机が窓と向き合うように置かれていて、スタンドウハルの机は左右に書類や書籍の詰まつた棚に挟まれている。さらに入り口側から見てジョイソンの机のすぐ左手には木製の扉があり、隣室で業務に邁進している部下達の仕事部屋に繋がつており、右手にある扉を開ければ仮眠室まで用意されている。

最後に、ジョイソンとスタンドウハルの机やその周辺には、今まで外出していたツケとして大量の書類が散乱していた。机の上には三十センチの厚みはある書類山が築かれ、床には深さ五センチの書類海が床を覆い隠している。

スタンドウハルはその惨状を見るなり、ああつと叫んで書類の海に飛び込み、整理をし出す。ジョイソンも内心苦々しく思いながらスタンドウハルの手伝いに入つた。

日が地平線の下へ沈み、空がすっかり暗くなつた頃。ジョイソンが天井に吊された魔力灯の明かりを頼りに書類仕事に邁進していると扉を誰かがノックする。

「入れ」

ジョイソンが許可した事で、金髪を七三に撫でつけた切れ目の黒い軍服を着た男が闊歩して入つて来た。

「ジョイソン殿、少しよろしいかな？」

男は口元に冷笑を浮かべ、ジョイソンを見る目には軽蔑の色を漂

わせている。

「情報部部長……何用ですか？」

ジェイソンは表情をいかほども変えなかつたが、隣に立つていた
スタンドウハルは耳をほのかに赤くして顔を俯かせた。

「今朝方自宅に翔けるようにして戻つていつたと聞き及んだのでね。
業務に支障をきたさせてまで何故そのような軽挙妄動をしたのか伺
いたい」

男の声には優越感が漂つおり、聞く者を一様に不快感を覚えさ
る何かがあつた。

「私用だ」

「私用？ 私用如きで職務を疎かにしたと？ いやはや、第三階級
出身であるだけの事はありますな」

男は舌なめずりをするようにジェイソンに侮辱を浴びせ掛ける。

「さつ、参謀次長殿はつ！ 『J息女の安否を確認されていたのであ
りますつ！』

スタンドウハルは男の態度に我慢ならなくなり、やむを得ない事
情があつたとジェイソンを庇う。

「……何？ 彼女は死亡したはず……」

スタンドウハルの言葉に男は切れ目を僅かに見開き、口調を乱す。
「生きていました。現在自宅にあります」

男の狼狽を見て内心にんまりしながら、スタンドウハルはきつぱ
り言い切つた。

「と……とにかく、例え『息女が今に死亡』しようがどうでもいい。
参謀次長ならば公私を弁えて貰いたいですな」

「ジェレイコス殿！ それはあんまりです！」

男はスタンドウハルの声を無視し、足早に去つていつた。

「何なんでしょうがあの態度。第一階級出身なんて肩書は今時たい
した価値ないのに！」

「スタンドウハル。気の仕方がない。仕事を続けるんだ」

怒りの收まらないスタンドウハルはジェイソンに向けて愚痴をこ

ぼすが、簡単にスルーされてしまった。罵られた当の本人にそっぽを向かれては、スタンドウハルもこの件に関しては黙るしかない。だが、話題をアレシアに切り替えて会話を続けようとする。延々と続く書類仕事から逃避したいのだ。

「はい……あ、そういえば、」息女は大統領の「息女と親しかったのでは？」

ジョレイコスの来訪に眉一つ動かさなかつたジェイソンが、万年筆を持つ右手が一瞬止めた。

「それがどうした？」

「報告した方が宜しいのではないでしょうか？　ご息女も喜ばれると思いますよ」

「……そうだな、後で私から伝えておこう。さ、仕事を続けるぞ」「はい……」

二人はまた退屈な書類仕事に戻つていった。

ジエイソンの部屋を出たジエレイコスは軍務省地下にある自らの仕事部屋に向かう。本来軍務省に限らず政府機関の勤務時間は朝日が昇ると共に始まり、日の暮れと共に終わるのだが、ペロボネアと戦端を開いたあの日からロミリア軍が戦時体制を解いた事はなく、多忙な日々が続いている。大規模対人戦はペロボネアとの停戦により幕を閉じたが、停戦後は狂暴化した魔獣の対処に追われ、軍属に休む暇はない。未だ各国の調査機関は何故魔獣が狂暴化した原因すら特定出来ていないので。何かに反応した事は明らかなのだが……。

日は既に暮れ、光源は足元に設置された僅かばかりの赤色に光を発する魔力灯のみにも関わらず、ジエレイコスは複雑に入り組んだ通路を躊躇^{ためら}う事なく突き進んで行く。

やがて彼は行き止まりで立ち止り、口を開いた。

「五、四、二、八」

彼が述べた数字の羅列に反応し、ジエレイコスの目の前の壁が横にスライドして奥へと繋がる通路が現れる。壁の向こう側の通路の天井に等間隔に吊るされた照明の白い光が暗がりに慣れたジエレイコスの網膜を焼く。ジエレイコスは目を幾度か瞬かせ、目を光に慣れさせるとまたしても何本にも分かれているへ再度歩みを進めた。装飾品など全くなく無機質極まりない白で統一された迷路のような通路を数分も歩くと、ジエレイコスは行き止まりに突き当たった。しかし先ほどとは異なり、左側に鉄格子で囲まれた窓がある。

「許可証をお見せ下さい」

その鉄格子の向こう側から若い男の声が聞こえ、ジエレイコスは声に従い懐から取り出したクレジットカードのような物を鉄格子の

向こう側にいる男に手渡す。男はカードをリーダー（読み取り機）にかざす。

「ありがとうございました。ジェレイコス部長」

男はカードをジェレイコスに返却した。カードが認証された事によつて情報部室への道うを阻む壁が横にスライドして下へと向かう階段が出現した。この階段を下りればようやく情報部室に到着だ。情報部室は地下に存在するというのに人員五十人以上が同時に作業可能な大きな部屋を与えられている。しかし情報を収集するのには泥臭い手間が必要なため、部屋に留まっている者はそう多くはない。部屋に快適性が全く考慮されていないのも人気のない一因かもしれない。木板にただ脚を取り付けたに過ぎない安い造りの机が無規則にあちこちに四、五脚毎に固まって配置され、壁際には書物や書類をギュウギュウに押し込まれた背の高い本棚がこれまた雑に並んでいるだけである。照明と壁は閉鎖感を薄めようと白色が多用されているが、逆に寒々とした印象を与えてしまっていた。その部屋の中で作業をこなしている者の一人、金髪を短く刈り上げた平均的な日本人男性より若干身長の高めの目が青い中年男性がジェレイコスを険しい表情で見つめていた。

「エリソン、どうかしましたか？」

エリソンの机に広げられている書類や走り書きに目を通していた

同僚が視線に気が付き声を掛ける。

「大した事じゃない。ジェレイコスのジェイソンへの粘着に呆れていただけさ」

「そうですか。それよりエリソン、ここを見てくれませんか？」

同僚の指差した箇所に目を移すエリソン。

「何だ？」

「エリソン、あなたはまさか部長を疑つてはいるんですか？」

思わず顔を同僚へ向けるエリソン。

「ジャレド。何を言うんだ突然」

「あなたが俺に調べるように言つてきた情報に俺の個人的捜査結果

を加えて言つてるんです。あなたは間違になく部長が怪しいと思つてゐる」

ジャレドは自信満々こいつ言い放つたが、エリソンに動搖の色は見られない。むしろジャレドに呆れたような表情を向ける。

「……そんな訳ないだろ。まだお前にこの仕事は早かつたようだな」

「誤魔化さないで下をこへエリソン。俺はあなたの力になりたいんです」

「ジャレド。いい加減にするんだ」

「エリソン。俺はいつまでもあなたに手取り足取り支えて貰わないとならないような新人じゃない。あなたが協力しなくとも俺は独自に動きますよ」

「ふざけるんじゃない！ 手を引くんだジャレド！」

部屋の出口に向かうジャレドを追おうとしたエリソンだったが、声を張り上げた事でジョレイコスの耳についてしまった。

「エリソン、どうかしたかね？」

「いえ」

「あまり叫ばないでもらいたいね。耳障りだよ」

「申し訳ありません」

露骨に眉をしかめてみせたジョレイコスは、エリソンの謝罪を聞くそのまま隣接する部長室へ歩みを進めていった。

「うひ。あの馬鹿……」

その隙にジャレドの姿をエリソンは見失ってしまった。

「アレシア、私もアレシアの事好きよ。好きといふか大好きといふかああもう言葉には表せないつ！ でもね、私は朝ご飯作らなきゃいけないの。だから早く起きなきゃいけないの。だけビアレシアが私ともつと一緒に寝たいなり……」

私を抱き枕として利用し、耳元でぶつぶつと囁くお母さんの声で私は起こされた。まだ部屋全体が暗い青色に染められている中、耳元でそういう事されたので私の心は一瞬ドキッときせられたよ。

「お母さん？」

お母さんの発言の内容は、私を利用してサボタージュしようとしてるという事でいいのだろうか。あなたは何をしているの？ どうか、もしかして昨日の夜から抱き着いたままかい。

「あ、アレシア。起こしちゃつた？」

お母さんは体をもぞもぞとベッドの上で動かし、私と顔を合わせる。申し訳なさそうな口調で言つかけ、こつまでも耳元で語りかけられてたら普通起きちゃつだろつさ。私は首を縦に振る。

「おはよっござこます、お母さん」

「おはよう、アレシア」

お母さんは少しの間私に微笑みかけた後、私に頬擦りをしながら体をベッドから起こした。私とお母さんからシーツがずり落ちるが、お母さんの温もりが私を暖めてくれる。

「まだ眠いなら、寝てもいいのよ」

ベッドから下りたお母さんは私を起こしたまま魅力的な提案をしてくる。だが、私にはやる事があるので。

「いや、起きます」

「そう？ じゃあ一緒に起きましょうか

「はい」

私をベッドに下りたお母さんは衣類棚に近付き、戸を横に引いた。中には数十着の衣服が掛けている。着替えるのだろうか。ただ、何か、お母さんの服にしては小さい気がする。さらにはやたらとフリルが付いていたり、鮮やかな原色が使われてたり、早い話が私の好みではない服が多い。極め付けは意味ありげなお母さんの笑みだ。ウフフフフ……と怪しい笑い声を上げてたり。うん、すつごく嫌な予感がする。さつさとこの場から逃げよう。

サンダルを履いてベッドから下りた私は忍び足で部屋の出口に歩いて行く。そして

「私、皆を起こして来ますね！」

と言い残して部屋を抜け出した。

背後から聞こえるお母さんの嘆き声を泣く泣く無視して小走りに廊下を進み、ディーウィアの眠っているであろう客室に入る。案の定、ベッドではディーウィアが行儀良く仰向けに眠っていた。

私はディーウィアの枕元に近付き、シーツを剥ぎ取つて肩を揺すり始める。

「起きて下さいディーウィア」

「……御主人様？」

お、存外早いお目覚めだね。目をパチリと開き、私を見つめるディーウィアに相談を持ち掛ける。

「そうです、私は。お願いしたい事があるんです」「何でしちゃうか？」

ディーウィアは肌寒い気温をものとせず、はだけたシーツから抜け出しへベッドに腰掛ける。生地の薄いナイトガウンを着ている為、目線がもうに胸元に来てしまつた私は少し動搖してしまつた。ここまで精密にしなくてもいいだろうに。

「サイトの事なんです」

おかげで考えていた前置きは吹つ飛んで、いきなり本題を口に出

していた。

まあ、それはいい。本題はサイトの事なのだから。昨日は家族と幸せ一杯に過ごしていたので考えが及ばなかつたが、そろそろあいつを捜さないと可哀相だ。私と同じく精神に何かをされたサイト。私の場合は多大な魔力が何かの動きを阻んでいた為大事には至らなかつたが、サイトは……彼を最後に見た時、とても苦しそうだつた。「サイトを最後に見たのは確かディーウェアだつたはず。何か、覚えていいないか？」

「申し訳御座いません。私はあの時背後から急襲されたので、レーダーにすらデータは残つていないので御座います」

そりやディーウェアも万能じやないんだろうけどさ。何かないのか。少しでも手掛けりがあると助かるんだが。

「戦闘機のレーダーは背後から来る敵を探知出来ないのか？」

「はい、その通りで御座います」

「そつか。なら仕方ないな」

となると手掛けりは、魔族の国に乗り込むでもしないと手に入らないな。他にも何も告げずに別れたイエラウ様やブルチエさん達ともどうにかして連絡を取りたいし、サハリアお……お姉ちゃんやフルサリアさんの安否も知りたい。サハリアお姉ちゃん達はロミニア共和国内部の人間だから後でお父さんに頼めば教えてくれるとして、エルフであるイエラウ様達とは独自に連絡手段を考えなくては。「御主人。御主人は私を超深部攻撃機として【物質創造】して下さいましたね」

「そうだけど？」

「お忘れで御座いますか？ 私に戦闘支援としての【物質創造】の一環として、人工衛星創造能力を付加されたでは御座いませんか？」私の思考を遮つてディーウェアが何やら興味深い話をして來た。

「何？」

「ただ、それは事実なの？ 全然記憶にない。

「本當か？」

私の懐疑的な視線にムツとするディーウア。

「勿論で御座います！」

きつぱりと言い放つ。ふーん、そこまで言つなら信じよつじやないか。

「でも、人工衛星と言つたつて色々ある。具体的には何が出来る？」

「GPS衛星、通信衛星、画像偵察衛星、電子情報収集衛星、早期警戒衛星、地球観測衛星の中から三百機程度なら自在に配備可能で御座います」

「おお、すごい」

通信衛星があれば一度あつちに行つてイエラウ様に機材を渡せば会話が可能だし、地球観測衛星があれば地図が作れる。そしてもし三百機の配備が可能なら、もしこの星が地球と同規模なら、GPSは誤差数センチ以内に收まる精度で位置特定が可能になり、通信は世界中何処でも可能になり、画像偵察は数分に一回は新しい情報が手に入り、電子情報は……いらないか、早期警戒……弾道ミサイルがこの世界にあるなら必要だな。うわあ、夢の広がる話じやないか。後々搜索に入るとしても、有力なデバイスになりそうだね。ただ、搜索に出たらお母さん悲しむだろうな、時期は慎重に見極めないと。私には【物質創造】の力があるんだから、家にいながらでもそれなりの事は出来るし。

「ディーウア、そういう事なら人工衛星設置して貰えないか」

「御主人様の為ならば喜んでやらせて頂きましょう」

やる気に満ちたディーウアの目はキラキラと輝いている。頼りがいあるね。

「設置にどれだけの期間が必要かな」

「一週間頂ければ、アメリカ合衆国にも劣らない衛星網をお見せ出来るかと思われます」

アメリカ合衆国？ ああ、米国ね。うーん、地球の知識が若干薄れてる。一度紙に書き出した方がいいかもしない。

「ではディーウア。頼む

「お任せ下さいませ、御主人様。ただ私には人工衛星を管制する能力は御座いませんので、そこは御主人様、お願い致します」

管制能力か……」級司令船を【物質創造】すれば、出来るな。

「んー、まあ、うん。分かった」

私は了承しておいた。

十三、朝のパンヌ屋さん

いろんな意味で聞かれるとまづい話を終えた私は、ディーウアのいる客室を出てお祖父さんの寝室に足を踏み入れてみる。

お祖父さんの寝室は昨夜お母さんと寝た部屋の一つ部屋を隔てた所にあり、ディーウアのいた客室からは出てすぐ右と近い。軽くノックをしてから室内に入つたが、既にベッドはもぬけの殻だ。昔からお祖父さんは早起きだったからね、多分一階の居間にいるのだろう。

私がお祖父さんの部屋から廊下へ出ると、ベランダに通じる彩色ガラス戸越しに朝日が照らして来るのが見えた。ようやく太陽が昇つて来たみたい。彩色ガラスを通った陽光は橙、緑、赤色の光線となつて廊下に降り注ぐ。その光に魅せられた私の足は、自然とベランダへと向かつていった。

彩色ガラス戸の施錠具である木製のつまみを引いて、ガラス戸を前に押し出す。冷たい風がそよぐ中、ベランダに降り立つた私に巨大な都市、首都ロミリアの姿が目の前一杯に広がる。

我が家のあるチエリアの丘からはパラティアの丘がよく見え、パラティアの丘には白い建物が太陽光を反射しながら林立している。あの何処かにお父さんがいるのか……昨日出掛けてからまだ帰つて来ていないようだけど、体は大丈夫なのかな。

丘と丘の間には様々な市場や低所得者向けのインスラと呼ばれるアパートメントが雑多に場所を占めている。既に人々は活動を始めているんだね。指先でつまめそうな人が道という道をわらわらと動いてるよ。

私、帰つた来た。ロミリアに帰つて来たんだなあ。

私はしばらく都市を眺めていたが、薄っぺらいワンピース一枚で長くいるにはまだ外はちょっと冷たかった。冷えた体がフルフルと震え出す。家の中に戻り、暖炉のある居間に行く事にしよう。

居間にいるとお祖父さんが暖かそうなゆつたりとした茶色いガウンを纏つて、窓際に置かれたロッキングチェアに座りポカポカと日差しを浴びていた。

「おはようございます、お祖父さん」

私が挨拶をすると、お祖父さんは笑顔を浮かべながら首を私の立つている左側に向ける。

「おはよう、アレシア。体調は変わりないかね？」

「見ての通り、健康そのものですよ」

「そうかい、それは良かった。ああ、ちょっと来なさい」

そう言つと、お祖父さんは自分の膝をぽんぽんと叩く。乗れとう事かな。ただ先客がいるけどいいのかな。私がそこに乗ると新聞がくしゃくしゃになっちゃうよ。ん？ 広がる……魔獣被害だつて？

お祖父さんの膝上に乗せられている新聞から覗き見える、楽観視出来そうもない記事のタイトル。何々、“およそ一年前から活発化した魔獣の行動は依然として続き、特にゲルマフウリオ州では山間部の住民に多数の死傷者を出している。政府としても軍団やギルドに討伐させてはいるが、焼け石に水であるのが現状だ。というのも魔獣被害の増加した一年前から突如出現したフルーキシと呼ばれる魔獣の”、あ。

「アレシアは心配しなくともいい。ジョンソンが退治してくれとる」私の怪訝な視線に気付いたお祖父さんは立ち上がり私の頭を優しく撫で、その足で新聞片手に居間から出て行つてしまつた。子供には知られたくない話題だつたのかな。うーん、先が気になる。ま、いいや。とりあえず顔でも洗つてさつぱりするか。新聞は後でこつそり読んじゃおう。

居間から廊下に出て、少し左に歩くとお風呂場の隣に洗面所があ

る。そこで顔を洗い塩を使った歯磨きを済ませた私は、唐突に昔私が家にいた頃の習慣を思い出した。そうだ、パンヌを取りに行こう。我が家では、というより大体の家庭ではパンヌを自宅では焼かず、ロミリアにはあちこちにあるパンヌ屋さんから毎朝買っている。数多あるパンヌ屋さんの中の内モファラスさんの経営するパンヌ屋さんと我が家は昔から親しくしており、三食分のパンヌを毎日焼いて貰っているのだ。以前の私は、今のように顔を洗つたらそのまま家の裏まで歩いてパンヌを受け取りに行っていた。小さな親孝行にもなるし、モファラスさんにも久しぶりに会つてみたい。さて、食事室から籠を取つてから行こう。

私は食事室に入ると、昨夜と同じく食卓中央に籠が置いてある。近付いていつて手を伸ばしたが、あと数センチといった所で届かない。ならばと椅子を踏み台にして、再度チャレンジ。今度は余裕を持つて掴む事が出来た。準備万端、いざ、モファラスさんの元へ。

籠の左右に取り付けられた取つ手を持ち、食事室から廊下に出て裏庭へと歩みを進める。裏庭に繋がる扉を開くと、石畳の敷き詰められたちょっとした空間が目に映つた。そしてこの空間と道とを分けている、大人の腰辺りの高さしかない木の柵を通り過ぎるとパンヌ屋さんはすぐ目の前だ。

以前と変わらぬ、懐かしい煉瓦造り平屋建ての店は、一四キリと生やしている一本の角みた的な細長い煙突からもくもくと白い煙を上げている。店の前に立つているだけで漂つてくる、焼きたてのパンヌ特有の美味しそうな匂いも昔のまんま。だけどモファラスさんはどうだらうか、ディーウアは元気だと言つてはいたけれど。

「アレシアちゃん！ おはよう」

モファラスさんに会つのが久しぶりなもんで店に入るのを躊躇つていると、私のように籠を持ったアーザス君がやつて來た。爽やかな朝に相応しい爽やかな笑顔。

「アーザス君、おはようございます。アーザス君もパンヌを取りに？」

「そりなんだ。それより嬉しいな、じつしてアレシアちゃんと一緒に歩けるなんて」

「そんな事で喜べるならいくらでも歩いこうかい？」

「私も嬉しいです。さ、入りましょう」

「一人で入れば気が楽だ。」

「！？」

「そそそそそーダネ」

開店中と書かれた板が立て掛けられているのを見て、私は何だか様子のおかしいアーザス君と共にモファラスさんのパンヌ屋さんに入店した。鈴をカラーンカラーンと鳴らしながら私が扉を開けると、すぐ右手にはお会計台があり、そこには淡い黄色のエプロンに同色の三角巾を頭に巻いた長身の女性が口を半開きにして立っていた。私とアーザス君を見ているようにも思える。彼女は何者だろう？ やや時間を隔てて、彼女は首を軽く振つて再度私達を見つめ直してから声を掛けってきた。

「いらっしゃいませ……お使い？」

「ぼそぼそと聞き取りづらい声で話す人だ。接客に向いていない気がする。」

「はい。バルカ家の名で契約してるんですけど」

「おかしいな。モファラスさんのむつつりとした顔に出迎えられるかと思つたら、陰気な女性が口の字形のお会計台の中に立つてている。どうなつているのだろう。」

「……」

「そして何故だか知らないがお会計台から出て来て、無言のまま私のすぐ目の前まで近寄り、頭を撫でてくれる。……まだ撫でられる。まだまだ撫でられる。まだまだまだ撫でられる。まだまだまだ撫でられる。長いね。というか、私はどうリアクションすればいいの？ まあ、気持ち良いし、もう少し位いいかな。」

「……何しとるんだ」

「そんな事やってたらモファラスさんが焼きたてのパンヌの乗つている鉄板を持って現れた。私の頭を撫でていた女性はモファラスさ

んが現れた途端両手をワタワタさせてお詫びの中に駆け足で戻つていった。

私の頭を撫でていた女性を睨み付けてお会計台に引っ込ませたモファラスさんは、私には目もくれずに焼き上がつたばかりのパンヌを陳列棚に並べ出す。

私の事、覚えていないのだろうか？ ん、まあ、私は所詮何十人もいるお客様の中の一人に過ぎないのだからね。いくら以前優しくして貰つていたとしても、忘れるのも無理はないのだけれど。はあ、さつせとお使いを済ませよう。

「久しいな、お嬢」

と、私の頭脳が諦めムードに入った時、唐突に背中を向けたままの彼から声を掛けられた。

「覚えててくれたんですか……？」

じわじわと溢れ出る喜びを味わいつつ、そつと確認してみる。

私の言葉に反応してかモファラスさんはぐるりと振り返ると、「あたりめえだ、客の顔は全員ここに入つてら

人差し指で頭をこつこつとやりながら、仮面のまま私に言い切つたのだった。

そして私のすぐ目の前にまで近寄り、持つて居る籠を取り上げる。

「どれ、ロレーヌ家の坊主も渡しな」

「ありがとう、モファラスさん」

「ふん」

籠を両手に持つたモファラスさんは、店の奥に消えていった。そ

れを見たアーザス君がクスクスと笑い出す。どうしたんだろう。

「はは、モファラスさんアレシアちゃんに会つて照れてるや

「へえ……」

モファラスさん、照れてたのか。どんな顔するか見たかったな。あの仮面を赤くするのだろうか。

「アレシアちゃん」

モファラスさんの恥じらう顔を想像していると、アーザス君が私の名前を呼ぶ。その声音が若干硬い事に違和感を覚えながらも、私はアーザス君に向かつて振り返った。

「はい？」

彼は真剣な表情をしている。どうしたと囁うのだろう。

「アレシアちゃんは今まで何をしてたの？ どうして今まで戻つて来なかつたの？」

「う……嫌なトコ突いて来るな。

「昨日はさ、アレシアちゃんに会えたのが嬉しくて聞けなかつたんだけど……寝る前に気になつちやつてね。よかつたら話してくれないかな？」

遠慮がちに話してはいるが、アーザス君は私に力強い目線を向けている。まあ、それでもアーザス君を「ごまかす事なんか何でもない位簡単な事だ。しかし、アーザス君経由で話が何処まで拡散するか分かつたもんじゃないし……よし、細かい話は記憶喪失で曖昧にしつつ、どうにか納得させてしまおう。

私の演技力を見せてやる！

「アーザス君は私が事件に巻き込まれた事は知つてますか？」

「ここには渋々と話を切り出すんだ。後々それが生きてくる。あ、ちよつと俯くのもいいかも。

「知つてゐる。ペロポネア帝国が大統領の子供を拉致しようとして、アレシアちゃんも一緒に掠われちゃつたんだよね」

「ここ……ここから悲しい顔をする！」

「その時の事……あんまり、覚えていないんです。ただ、何か、とつても怖い思いをしたのは覚えてるんですけど……」

「声を震わしてみたが、変な感じにならなかつただろうか。

「「「」、「ごめん！ ボクのわがままで嫌な事思い出させちゃつたね」

上手くいった！ アーザス君は真に受けた！

「構いませんよ。誰でも今までいなくなつてた人がいきなり現れた
ら、何をしてたか気になるでしょうから」

「なら、続きを聞いてもいい？」

アーザス君の知りたがり屋さんめ！ ええい、だがここまで來た
らやり切るまで！

「いいですよ。それでですね、事件にあつてから私はティーウィアさ
んに助けられたんです。ほら、昨日会った人。覚えてますか？」

「うん、茶髪の女人でしょ？」

「はい。で、昨日無事送り届けて貰つた訳です」

「へえ……あれ、でもそなうなるとどうして帰つて來るのに時間がか
かつたの？ 事件のあつたアンコナーは歩いてもさすがに二年はか
からないよ」

「実は事件に巻き添えになつたせいが、記憶を一部失つちゃつたん
です。だから……」

何か演技でも、悲しくなつてきちゃつた。実際、記憶喪失さえな
ければもつと早く帰れたんだもんね。悔しいなあ、時間を無為に過
ごした気分になる。

「……そうか。大変だつたんだね」

「そうですねえ……」

場がしんみりした雰囲気になつてしまつた。それに合わせて私自
身の心境も、しんみりして来る。

「でもさ、帰つて来れたからよかつたじゃん！ そうだ！ 今日一
緒に遊ぼうよ！」

突然元気よく大きな声を上げるアーザス君。多分、場を盛り上げ
ようとしているんだろう。

その気遣いに思わずクスリと笑つてしまつ。転生して二十年以上
生きてる私が、こんな小さな少年に気遣かれちゃつてるなんてね。
しつかりしろ、私。

「いいですね。じゃ、学校終わつたら私からアーザス君の家に行き

ますよ」

「い……いいよ、アレシアちゃんは待つてて。ボクの方から行くか
ら」

「なら、待ちます。楽しみにしますよ」

私に返事をしようとしたのか、アーザス君が口を開いた時、入口からカラランカラランと鈴の音が勢いよく鳴り出す。そのせいでお会計台に立っている女性の「いらっしゃいませ」の声がほとんど聞こえない。

「よお、お前らも来てたのか」

入つて来たのは髪の毛をつんつんと跳ねさせ、目を半開きにしたラインラ君だ。まだ眠いんだろうね、歩みがのろのろとしている。

「ラインラ君、おはようございます」

「ああ」

「珍しいね、君がお使いなんて」

アーザス君が露骨に眉をしかめてみせる。「の一人の仲大丈夫かな。昔からアーザス君が一方的にラインラ君に反感めいた感情を持つてるんだよね。

「まーな。それよかおつちやんはいないのか？」

まあ、ラインラ君がまともに相手にしてないからそんな問題にはならないけど。

「おう。ほら、持つて來ただ」

ラインラ君の呼び掛けに、店の奥から出て来るモファラスさん。両手に持つて居る籠にはほんのり黄色いパンヌが山ほど入つて居る。

「ありがとうございます」

「モファラスさん、ありがとうございます」

モファラスさんは私達に籠を渡してくれる。て、あれ？ 私の家の分にしてはパンヌの量が多くはないか？

私が疑問に思いモファラスさんの顔を見上げると、目線を反らされてしまった。何なんだ？ 余ったから少し分けてくれるのかな。

「あの、モファラスさん……」

そこをアーザス君に肩をチヨンと突かれる。今度は何さ。

「何ですかアーザス君」

「アレシアちゃん、親切は素直に受け取つた方がした方も喜ぶんじやない?」

「親切? あー、もしかしてモファラスさん、私の帰還を祝福してくれる訳? ふーん。へー。ふふつ。

「あ、アレシアちゃん?」

アーザス君に怪訝に思われるのも仕方ない。私今、気持ち悪い顔してるもの。顔がどうしてもやけちゃう。

「ありがとうございます! モファラスさんつ!」

「……………ああ」

もう、反応鈍いなあ。でもこれも照れ隠しなんだろう。さてと、大分時間をくつてしまつた。お母さんが待ちくたびれてるかもしない。そろそろ我が家に戻ろうか。

「また明日も来ますね!」

「……………ああ」

私は浮ついた心を持て余しながら、帰宅の途に着いた。

裏口から家に入ると、廊下を真つすぐ進んだ先にある玄関でディーウアが来客と応対しているのが見えた。ディーウアの背中が邪魔になつて来客の姿は分からぬ。しかし来客者は、朝早く何しに来たのだろうか。

「あら、見ない顔ですわね。どなたかしら?」

え、待つて、この声……。私はこの声の主を知つていて。

「ディーウアと申します。サハリア様」

な、んだと? やはり、彼女なのか!

「サハリア……サハリアお姉ちゃんですか?」

「そ、その声は……アレシアですか?」

来客者がディーウアを押しのけた事で、彼女の姿をはつきりと田の当たりにする。

淡いレモン色の金髪も、長い髪をツインテールに纏めているのも、エメラルドブルーの瞳も、気の強そうな顔立ちも、全部が全部、サハリアお姉ちゃんだ。で、でも、何でここにいるの…？

「あ、ああ。間違いないわ。アレシア、あなたアレシアね！」

フリルの沢山付いた豪勢なドレスの裾をつまみながらサハリアお姉ちゃんが駆け寄ってきて私の目の前で立ち止まり、勢いよく私は抱き着こうと両腕を広げて迫ってくる。

「うわっまずい！ モファラスさんから貰つたパンヌが潰れてしまふー！」

緊急回避！

「や……避けられ……」

あ、やっぱ。サハリアお姉ちゃんものすごく衝撃を受けてる。でも仕方ないじゃないか！ モファラスさんが丹精込めて作ったパンヌが危険にさらされてたんだもの！

「少し待つて下さいね！」

私は駆け足で食事室に入りパンヌの盛られた籠を食卓に置く。さあ、早くサハリアお姉ちゃんの元へ戻ろう。

「あら、アレシア。あなたパンヌ取つて来てくれたの？」

おつと、お母さんに呼び止められた。

「え、あ、はい」

「ありがとうございますアレシア！」

そしてギューと抱きしめられた。お使い位でこんなに喜んでくれるなら私も嬉しいよ。でも私、ちょっとと急ぎの用事があるんだな。サハリアお姉ちゃんの精神には私が爆撃を仕掛けて結構な打撃を与えてしまつている。早く取り繕わないといけないのだ。

「お、お母さん」

こんな喜んでくれてるお母さんに口出しするのは気が引けるのだが、やむを得ない。さつと放して貰わないと。

「え、あ、もしかしてお腹空いたの？ 分かったわ、すぐ用意するから

助かつた。今行くからねサハリアお姉ちゃん！

私が食事室から顔を出すと、膝立ちの体勢で「避けられた……避けられた……」と呟くサハリアお姉ちゃんの後ろ姿が。ディーウアも扱いに困つているようで、おたおたしながら遠巻きに眺めているだけだ。

何とかしなきや。でも、どうやって？ んー、そ、そうだ。私がお姉ちゃんの抱擁を避けたからこんな事になつてるんだ。なら、少し恥ずかしいけど……。

私はサハリアお姉ちゃんの背中に抱き着いた。さらに避けた訳じやない事もアピールしとく。

「会えて嬉しいです、サハリアお姉ちゃん」

「こら、ディーウア。笑うな。余計恥ずかしくなるだろ。

「あ……アレシア！ もう放さないわ！」

うわ、サハリアお姉ちゃんがいきなり反転して顔と顔が向き合つ体勢になつた。それと何故かサハリアお姉ちゃんが駆け出してるんだが、え、ちょ、何処に向かうんだ？

「出して頂戴！」

「畏まりました」

「……は？」

私はあつという間に馬車へ乗せられ、サハリアお姉ちゃんと共に我が家を離れた。

十五、馬車の中にて

無理矢理というか、問答無用で馬車に乗せられてしまった私。呆気に取られている間に、随分家から遠ざかつてしまつた。いきなり連れ出すなんて、どういづつもりなんだ。

「サハリアお姉ちゃん?」

一応、抗議の意を込めて未だ抱き着くサハリアお姉ちゃんに呼び掛けてみると。

私の背中に回していた両腕を緩め、腰の辺りを両手で持ち上げるようにに掴まれ、さらりと顔と顔をすいと近付けて一言。

「もう一度、お姉ちゃんと呼びなさい」
ものすゞシリアスな表情でこんな事を言われた。

「は?」

「さあ早く! 呼びなさいな!」

まあ、別にいいけどさ。

「サハリア、お姉ちゃん?」

意味がいまいち分からないが、とりあえず目と皿を合わせて見てみた。

「くう……!」

み、身もだえしてる? 何故?

いや、そんな事はどうでもいい。

「早く私を家に戻して下さい」

「あら、どうして?」

サハリアお姉ちゃんはキョトンとした表情。自覚がないとは恐ろしい。

「家族が心配します」

それにまだ寝間着から着替えてないし、強引に連れ出されたから左足のサンダルが脱げてしまつてる。

「ふふふふふ。 それなら問題ありませんわ！」

何なんだ、この自信。 もしかしてお母さんにあらかじめ話を付けておいたのか。

「何故言い切れるんです？」

「あなたのお母様とは親しくしていきますもの。 分かつて下さるはずですわ」

親しいのはいいけど、私を一言の断りもなく連れ出す理由にはならないんじゃ？

「知り合いなんですか？」

あれ。 心なしか、サハリアお姉ちゃんの表情に影がさした気がする。

「ええ……あなたがいなくなつてから、度々会つてましたね。 一人であなたの思い出を語り合つたり……」

サハリアお姉ちゃんは私の腰から両手を離し、顔を俯かす。 点々と、床の赤い敷物が変色する。

「ごめんなさいな。 私のせいで、辛い目に会わせてしまつて」

「え？」

顔を上げ、謝罪するサハリアお姉ちゃんの瞳からは涙が溢れていった。 え、何いきなり泣いているんだ？

「私と関係を持たなければ、アレシアは平和な日々を過ごせたのでしょ？」……私が、私さえ……！」

「違います！」

「アレシア？」

思わず叫んでしまつた。 でも、本当にお姉ちゃんは悪くないんだ。 悪いのは、全て魔族なのだから。 あいつらのせいなんかで、お姉ちゃんに悲しんで欲しくない！

「悪いのは、絶対にサハリアお姉ちゃんじゃないですよ！ 悪い事をした人間が悪いんです！ 拉致されたサハリアお姉ちゃんが悪い

訳ないじゃないですか！」

「だけど、私と一緒にならなければ……」

「そつ、何うじうじ悩んでるんだ。あんたが悲しんでるところも悲しくなるんだよ。

「あーもう！ 私はサハリアお姉ちゃんと仲良くなれた事をものすごく嬉しく思っています！ これ以上私の事で泣かないで下さい！」

「……一年四ヶ月ですわ」

「はい？」

「アレシアが戻つて来るまでにかかった歳月ですわ。私のせいで、アレシアはそれだけの時間を無駄にしてしまったのですわよ！？」

私にはアレシアと親しくする権利なんてないのよっ！」

何が権利だ、親しくするのにいちいち権利が必要な訳ないだろっ

！ あんたはそうやって自分は本当に悪くないと、私に言つて欲しいだけだ！ そしてそれが事実なんだよ！」

「無駄なんかじゃありませんでした！ そりやあ時には辛い事もありましたけど、ディーウアと旅をして楽しかった事もたくさんあつたんですね！ だからもうグダグダ泣き言を言わないで下さいっ！ 私がいいつて言つてるんだつ！ もう泣くんじゃないっ！」

「……」

あ……あれ。サハリアお姉ちゃん、呆気に取られたような顔をして黙っちゃつたよ。もしかして、何かやらかしたかな？ 怒鳴ったのはまずかったかな？

「あの、サハリアお姉ちゃん？」

私が呼び掛けると、サハリアお姉ちゃんは口元を緩め、涙を何処からか取り出したハンカチで拭き取り、私を抱きしめた。

「……ありがとう、アレシア。吹つ切れましたわ」

私の耳にサハリアお姉ちゃんの吐息が掛かる。耳元に響く彼女の声は優しく、そして、穏やかだった。

十六、サハリア宅にて

「アレシア、起きなさい。到着しましたわ」

え、あれ。いつの間にか眠っていたみたい。サハリアお姉ちゃんに肩を揺すぶられてる。

「あ、すみません。ついうとうとしちゃって」

肩を揺する手を止めたサハリアお姉ちゃんは、何が嬉しいのか笑顔になる。

「仕方ないですわね。抱っこしてさしあげましょうー。」

仕方ないと言う割りに、どうして上機嫌なんだか。

「いや、大丈夫……なんです、けど」

「遠慮しなくていいのですわ！」

遠慮して控えめに拒否したんだがね。完全に無視されてしまい、私は既にサハリアお姉ちゃんの腕の中。いまさら拒否しても面倒なので、おとなしくするか。断じてサハリアお姉ちゃんの体が温かくて心地よいからではない。

一人であらかじめ開いていた馬車の扉から出ると、扉の傍に黒のフロックコートを着た口髭の豊かなお爺さんが立っていたのに気付く。

「お帰りなさいませ、奥様」

お爺さんは深々とお辞儀をした後、私達に、えーと、奥様？ と呼び掛けて来た。どういう事なの……。

「まさか、サハリアお姉ちゃん……」

「察しの通り、私結婚しましたの」

私の頭に唯一浮かんだ考えを肯定するサハリアお姉ちゃん。抱っこされてるから表情は分からぬいが、耳やうなじの辺りは少し赤く

なつてゐる。お姉ちゃんの今の感情は嬉し恥ずかしい、といったところだろうか。つて、おい！

「ほ、本当なんですかっ！？」

何冷静にお姉ちゃんの感情について考察してゐるんだよっ！ 一大事じやないか！

「本当ですかよ」

「お、おめでとうござります」

意外とあつさり返答され、私の動搖も収まった。しかし、どんな人と結婚したんだろう。わがままで優しく少し傷付きやすいがすぐ立ち直るお姉ちゃんに相応しい男性とは？

「お相手はいい人ですか？」

「そうですね。軟弱で臆病、そのくせ女たらじ。ああもつ！ 思い出すだけで腹が立ちますわ！」

「そ、そうですか……」

深入りしない方がいい話題みたいだ。

「それにですね！」

「奥様、それからアレシア様。ここは寒いからではいかがでしょうか？」

はお部屋に入られてからではいかがでしょうか？」

話に割り込んで来たのはさつきの口髭お爺さん。

「それもそうですわね。アレシア、行きましょうか」

プリプリ怒つてた割に案外簡単に矛を納めてくれて助かつた。

「そうですね」

お爺さんが歩き始めたのに、サハリアお姉ちゃんが付いていく。だが抱っこされている私には、一人が一体何処へ向かつているのやらさっぱりだ。まあ、お姉ちゃんの足元の歩道に敷いてある石が、赤白緑黄の四色を使ってモザイク模様を形成しているのを見るに、大層豪勢なお屋敷なんだろうな。

少しばかり四色のモザイク模様を眺めながらお姉ちゃんと会話をしていると、不意にお姉ちゃんが足を止める。何だろうと思い、首をぐるりと回してみた。あ、口髭お爺さんが扉を開けるのを待つて

たのか。

ただノックカーがライオンの顔なのに違和感。ライオンってこの世界にもいるのかな。

「どうぞお通り下さい」

「ありがとう、サバヤ」

お姉ちゃんが口髭お爺さんに促され、邸内に足を踏み入れる。白い観音開きの扉の先にはテニスコート並の広間があり、鏡に使えるんじゃないかという位床は磨き上げられ、天井には大きなシャンデリア。さらにシャンデリアの周囲には花畠に囲まれた乙女達の絵が描かれている。

すごい家だなあ、お金持ちは違うなあ。

そしてホールにはメイド服とでも言つのだろうか。白地に黒をアクセントに付け加えた、足首まで隠れるスカートを穿いて二人の女性がお姉ちゃんの出迎えに来ていた。

「お帰りなさいませサハリア様。そのお方はどうされたのですか？お医者様を御呼び立てしましようか？」

先に口を開いたのは茶髪をお姉ちゃんと同じくツインテールにしている妙齢の女性。目が少したれ目だ。もう一人の見た目は優しいおばさんといった感じ。どちらからも殺意は感じない。て、何を探つてるんだ私。やめやめ……んー、駄目だ。努力はしたけどどうしても意識してしまう。何かメイドさんに警戒心持つちゃう。以前メイドさんに毒盛られたからかなあ。

「奥様お帰りなさいませ。よろしければ、私が代わりに抱きましょうか？」

何だか勘違いされてるね。誤解を解くとしよう。よつと。私はサハリアお姉ちゃんから飛び降りた。

「あつ」

驚かしてしまつたらしく、とお姉ちゃんが声が上る。すまないと頭の中で謝つとく。

「えーと、お初にお目にかかります。アレシアと云つ者です。間柄

は友人といった所でしょつか。お邪魔します」

「一わあ。何て下手くそな挨拶だ。魔王討伐旅行に出ていた間、人とあんまり会話してなかつたからコミュニケーション能力が著しく劣化してやがるよ。ええい、もう手遅れだ。お辞儀で」まかせ。私は我ながら完璧とも言える四十五度のお辞儀を済まし、頭を上げる。これで名譽挽回だ。

「……あれ？」

えーと、何故だろう。場にいる全員が私を見て微笑んでいるんだが。

「アレシア、背伸びして変な敬語になつてますわよ」

あ、そう、そういう事ね。挨拶がおかしかつたから私、笑われちやつてるんだね。サハリアお姉ちゃん、口元をいまさら手で隠してもばれてるよ。はあ、第一印象が大事なのに見事にとちつてしまつた。

「アレシア様。無理はなさらずとも構いませんわ。アレシア様のお話はサハリア様から散々聞かされてますから、初対面とは思えません。どうか普段通りに過ごして下さいな」

たれ目のメイドさんからこう言われ、反省。高そうな物に囮まれて、そうだな、少し対上流階級思考に陥つてたかもしけない。落ち着こい。

「ま、ま。可愛らしくてよろしいではございませんか。さ、奥様。奥様の部屋に参りましよう」

「そうですね。アレシア、付いて来なさい」

口髭お爺さんを先頭に、サハリアお姉ちゃんの後を私は歩く。玄関ホールの左奥の階段に向かつているみたい。階段もまたツルツルに磨かれているようだが、滑つたら困るからか赤い絨毯が敷かれていた。あれなら片方のサンダルをなくした足に優しいだろうな。ホールの床は冷たいのだ。

「おや、アレシア様。靴はいかがなされました？」

あ、口髭お爺さんが気付いた。

「アレシア寒くないんですね？ 仕方ないですね、私が……」「しばし我慢下さい。急いで用意をせますので」

「あ……」

何か、お爺さんにおんぶされた。

「私大丈夫ですよ？」

「お客様には快適に過ごしていただきのも私の仕事の一つです。ですからどうか遠慮なさらないで下さい」

こう言われると断れないよ。まあ、お姉ちゃんの部屋で椅子に座るまでの間までの事だし、いいか。

私はお爺さんにおぶわれながら、お姉ちゃんの部屋へと向かう。それはそうと、お爺さんの後ろを歩くお姉ちゃんから物欲しげな目線を向けられるのは何故なのだろう。

十七、謁見（前書~~も~~）

2011/03/25 加筆修正しました。

私を背負つ口髭お爺さんが一階へ向かう階段の最後の一級に足をかけたその時、赤い軍服を着た三人の集団が現れ階段を横一列に並んで塞いだ。全員が全員、ただならぬ雰囲気を漂わしている。

「サハリア様、大統領閣下がお待ちです」

中央に立つ、黒髪を七三分けにした男が、聞いた者の気持ちを底冷えさせる声でサハリアお姉ちゃんと話し掛けてきた。目つきも鋭く、表情のかけらもない。あまり敵にしたくないタイプの人間だ。

「仕方ありませんわね。早く済まして下さる?」

七三分けの彼に見つめられたお姉ちゃんは少し気圧され気味みたい。それにしても、彼らは何者なのだろうか?

「私にはその質問に返答出来る権限は存在しません。アレシアさん、来てくられますね?」

七三分けの目が、口髭お爺さんの背中の私に向けられる。

「私、ですか?」

僅かに首を縦に振つた七三分けが、私の問い合わせに口を開く。

「大統領閣下がご息女が事件に遭われた一件について話し合いたいと申しています。あなたも口ミリア共和国の国民なら、協力しなさい」

ああ、そういうお姉ちゃんの父親は大統領だった。とすると彼らは大統領の護衛かな? ま、お姉ちゃんのお父さんなら会つてもいいか。

「分かりました」

「では、私の後について下さい」

私は口髭お爺さんの背中から降りて、既に歩き出している男達の

後を追おうとした。のだが、お姉ちゃんに腕を掴まれた。

「ちょっと待ちなさいな。私も同席しますわ。それともお父様から私を連れてくるなどでも命令されたかしら？」

お姉ちゃん、トゲトゲしい発言ですね。ほら、七三が立ち止まつてこつちに振り向いたよ。

ジー……私達は見つめられている。お姉ちゃんは負けじと七三を睨み付ける。

「……いいでしょ。付いて来なさい」

ふいに目線を反らした七さんは、背中越しにお姉ちゃんに譲歩の言葉を返す。勝ったのが嬉しいらしく、お姉ちゃんは私に向かって不敵な笑みを向けてくる。あー、うんまあ、よかつたね。私が微笑みを返したらものすごい早さで私を抱き上げ、ギュートと締め上げられた。何で？

「た、隊長いいんですか？」

何か都合が悪いのだろう。部下っぽい両脇の男の左側がお伺いを立てているのを盗み聞き。

「構わん。では、皆さん私に付いて来て貰いましょう」

隊長とか呼ばれてた七さんはそのまま歩き始め、私達は彼の後を慌てて追い掛けた。

「安心しなさいな。お父様は怖い人じゃないわ」

男達から少し距離を取つて歩くお姉ちゃんと口髭お爺さんと私の三人。私の足を心配してか、私が歩こうとした際に無言で私を抱っこしたお姉ちゃんは、さつきから私の顔を見つめながらずっと優しい言葉を掛けてくる。多分、私を安心させようとしてるんだろうね。「その通りでござりますよ。ワイヤット様は心根の大変優しい方で、その人徳が今の地位に顯れておられるのでしょ」

何てつたつて、大統領。この国で一番偉い人だから……て、ちょっと待てよ。私の記憶によれば、ワイヤット大統領はペロポネア帝国が起こしたと思われているサハリアお姉ちゃん誘拐事件での世論操作に失敗して辞任に追い込まれていたような気がするのだが。再

任されたのか？「つーん、何が何やらさつぱりだ。

あ、男達が扉の前で立ち止まつた。中央の七さんが扉を叩く。

「連れて参りました」

「ありがとう。中に入ってくれ」

扉の内側から力強く威厳に溢れる声がくぐもつて聞こえてきた。
こつ、腹の奥底から出る感じの声だ。

「はっ」

七さんは、すすすつと無駄のない動きで観音開きの扉を開いた。部屋の内部では豪奢なソファに深々と座つて手を膝の上に組んだ恰幅のいい中年男性と、ソファの後ろに立つ頭の禿げた老年男性、それに七さん達と同じ赤い軍服を着た女性が中年男性の前に立つている。

「アレシアちゃん、来てくれて助かつたよ。さあ、中に入りたまえ」そして中年男性が立ち上がり、私に手招きした。

私を抱きしめたお姉ちゃんは、手招きに応じて室内に足を踏み出す。だが、中年男性は顔をしかめた。

「サハリアは自分の部屋に戻つていなさい」

この物言いに、お姉ちゃんは眉を逆八の字にして反発する。

「嫌ですわ！ 私にも責任がありますもの。何を言われましたってぜーつたに聞きますわよ」

睨み合つて一人。どうしよう、親子で喧嘩になつたら家庭内がぎすぎすしてしまう。

「全く、仕方ないな」

よかつた。苦笑いを浮かべているが、今回は中年男性が譲つてくれた。

「ありがとうございますお父様！」

お父様つて事はやはりあの威厳たっぷりな中年男性は大統領のワイヤットな訳ね。確かにあのカリスマオーラなら、生半可な事じや国民の支持を離さないだろうな。それでも不支持を国民にたたき付けられたのだから、魔族の情報操作能力の高さが想像される。ま、

今となつては私が壊滅に追いやつたのだから問題はない。

あ、やっぱりお姉ちゃんの存在は都合が悪かつたっぽい。後ろに控えてた老年男性が慌てて中年男性の耳元に近寄り口をぱくぱくさせてる。小声なので何を言つていいかが分からぬが、お姉ちゃんの同席を拒否したとか頼んでるんだろう。

「問題ないだろ？」「

「君がそう言うのならいいのだが」

しかし大統領には断られたみたい。不満そう、というより、不安げな表情だ。

「さて、自己紹介が遅れたな。私がサハリアの父親のワイヤットだ。職業は大統領をしている」

「私はリマルク。ワイヤットの友人だ」

「大統領閣下の護衛をしております、第五魔法戦士小隊のシルマです」

「アレシア ジェイソン バルカです。よろしくお願ひします」

「ではアレシアさん、大統領の対面のソファにお座りになつて下さい。サハリアさんはアレシアさんの隣にお願いします」

リマルクさんの声に従い席に着いた私は、數十分かけてお母さんやアーザス君に話した内容と同じ事を大統領に伝えた。私の虚構にまみれた話に質問一つせず大統領は黙々と話に耳を傾ける。友人のリマルクさんが話の途中で何度も口を挟もうとしたが、全部やめさせてくれた。

「つまり、あの日の事は覚えていないという事かね？」

私が話を打ち切つたところで、流石に堪えきれなくなつたリマルクさんが大統領の制止を無視して不機嫌そうに尋ねてきた。でも、私は真実を話す気はない。リマルクさんの質問には首を縦に振る事で返答した。まあ、当たり前だが、納得のいかないリマルクさんの表情は固い。さて、疑問を持たれるのも最もな話だから反論が出る事もあらかじめ予想出来た。だから色々と言い訳も考えているんだけど、この人頭きれそう。ごまかしきれるだろ？「

は口を開いて発言をしようとする。来るぞ……追求の手が、でもここをごまかせば後は楽勝だ。何としても納得させてやる。と、勢い込んでリマルクさんの口撃を待つていたら突然大統領が立ち上がる。「時間を取らせてすまなかつた。私はそろそろ仕事に向かうよ。後はサハリア、任せたぞ」

「え、帰るの？」

「分かりましたわ、お父様。任せて下さいな」「リマルク、さあ、公務に向かおう」「……ああ」

こうして大統領とのファーストコンタクトを私は終えた。今回は簡単に引き下がつてくれたが、多分私の話をあんまり信用していないっぽい。それなのに一回も問い合わせる事がなかつた。あからさまに疑いを表情に浮かべていたリマルクさんはもちろん要注意人物だが、案外一番危険なのはワイヤット大統領かもしれない。やれやれ、これからどうなるのだろう。

十八、お茶の時間

大統領一行が去つて行き、小中学校の教室程もある部屋には私とお姉ちゃんの二人だけが残るのみとなる。

ふう……思つていていたより緊張していたみたいだ。大統領の姿が見えなくなつた途端、肩が軽くなつたような気がしたね。やっぱ、国家の最高権力者ともなると威圧感がすごい。

「アレシア、大丈夫ですか？」

疲れが表情に出でていたのだろうか、ソファの隣に座つているお姉ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「緊張が解けて、ほつとしているだけだから大丈夫です。やっぱり、大統領と面と向かつて話すのは緊張しちゃいました」
ははは、偉い人と話すのは大変だったよ。

「疲れているように見えますわ。お茶にしましょう」

お姉ちゃんがそう言つと音一つ立てず扉が開き、口髭お爺さんが銀色のトレイにポットとティーセット一式を載せて入つてきた。

「失礼致します」

そして優雅に私達の前で一礼をした口髭お爺さんは、私達の座るソファの前に設置されている大理石で出来たテーブルへティーセットをそつと置くと、これまた静かにティーカップへと無色の液体を注ぎ込んだ。うわあ、これがプロの執事の技つて訳ですね。全く存在が邪魔になつていない。

「ありがとうございます、ハルク」

あ、この人ハルクさんという名前なのか。

「ありがとうございます、ハルクさん」

「お褒めに預かり光栄でございます」

お茶を入れ終えたハルクさんは優雅に一礼をしてみせると、扉に向こうに消えていった。最後まで、静謐性が高い執事だ。

さて、私は、田の前で湯気を立てているお茶を見つめる。これ、色がないんだが味はあるのだろうか。いや、あれほどまでに洗練された動作をしたハルクさんの入れてくれたお茶だ。きっとおいしいに違いない。それに万一失敗作だとしてもお湯の味がするだけだろうし。私はお高そうな陶器のティーカップを持ち、カップに口を付けた。

何だ、これは……レモンの酸味と納豆の臭みがいつぺんに口の中に広がってきた。正直に言おう、これはまずい。すぐにカップから口を離した。でもさ、隣でお姉ちゃんがおいしそうに飲んでいるんだよね。以前私が手料理を振舞った時に、お姉ちゃんは喜んでくれていた。つまり、私とお姉ちゃんで味覚はそこまで差異はなかったはず。それなのに、おかしいな。まさか、私の料理を食べるたびにまずいのを我慢していたのかな。不安になってきた。確かめてみよう。

「あの、お姉ちゃん？」

「何かしら？」

「以前、私の手料理を食べた事がありましたよね」

「そんな事もあつたわね。アレシアの手料理は本当においしかったわ」

ティーカップを右手に左手の人差し指であごをつつきながら、少し上を向いてこう話すお姉ちゃん。うーん、嘘をついているよつには見えない。

「あら、まだそんなに飲んでないみたいね。このお茶とつてもおいしいですわよ。もつと飲みなさいな」

くつ……こいつはお姉ちゃんたら仕方ない。私の味覚には合わないと呟つて、勘弁してもらおう。

「アレシア、まさか、このお茶がまずいなんて思つていでしょうね？」

私の言おうとした事を封じられてしまった。うう、ジト田でにらまれているよ。ええい、高々お茶の一杯や一杯、飲んでやろうじゃないか！

私はティー カップを傾け、一気に飲み干す。うえ……は、吐きたくなってきた。

「ね、おいしいですわよね？」

「は、はい」

今あんまり話しかけないで欲しい。必死に吐き気を耐えているんだ。

「全く！ こんなにおいしいのに、どうしてお父様もクライブもおいしくないなんて言ひつかしら！ 信じられませんわ！ ねえ、アレシア！」

「おい！ あんたの味覚がおかしかったんかい！ 同意を求めるお姉ちゃんには悪いが、これに頷く事は出来ない。そして何故か大統領と未だ会った事すらないクライブさんに親近感を覚えた。

「わ、私もあんまりこのお茶は好きじゃないです……」

「そう？ こんなにおいしいのに……」

寂しそうに呟いたお姉ちゃんはまたお茶を一口にする。

そこへ、ハルクさんが入室してきた。

「お茶菓子でござります」

テーブルに置かれた平皿には、香ばしい甘い匂いを漂わす一口サイズの焼き菓子がこれでもかと山積みになっている。ありがたい、これで口直ししよう。丘の頂点に位置していた、まだほかほかと温かい四角いクッキーみたいな焼き菓子をぱつと口に放り込む。

よかつた。これはおいしいぞ。わくわくほかほか、いくらでも食べれちゃいそうだ。

「うふふ、アレシアったら、まだまだたくさんあるからそんなにがつがつしていたのは、お茶の臭氣から逃れるためだつたんだけど

ね。本当にあのお茶をおいしいと思うお姉ちゃんの味覚が分からながつ

い。ああ、今なら大統領と話が合ひと思つなあ。

十九、のどかな午後

焼き菓子をつまみながらお姉ちゃんと談笑をしていると、お姉ちゃんが私をまじまじと見つめて口を真一文字に結んだ後、いきなり「アレシア……何だかみすぼらしい服を着ているわね」と言つてきた。

失礼な。これは寝間着だからみすぼらしかろうが、質素だらうが構わないんだ。問題は服にあるんじゃない。

「お姉ちゃんが着替える時間をくれたら、もう少しともな服装もあつたんですけどね」

そう、問題は私に出かける準備をさせてくれなかつたお姉ちゃんにある。あ、そう言えばこの白いワンピース姿で大統領と会話を交わしたんだ。さつきは気にもしていなかつたが、今思い返すと恥ずかしいな。

「そうだわ！」

今度はお姉ちゃん、唐突にソファから立ち上がりつて叫ぶ。あれ、嫌な予感がするのは何でだろう？

「私がアレシアに似合う服を用意しましょー！」

「いや、大丈夫です」

田を輝かせて私に視線を合わせるお姉ちゃんに、私は即効で拒绝の返答をたたき付ける。服を買い物に行つた記憶には嫌な思い出しか残つていらないんだよね。だからお姉ちゃん、どうか遠慮してくれ。

「遠慮しなくてもいいのですわ！ これは私からのお祝い品よ！」

「いや、大丈夫です」

「ハルク！ 今すぐ仕立て屋を呼んで来なさいな！」

「いや、呼ばなくていいですって」「

「恐まりました」

「待つてハルク！ 靴屋も呼んで頂戴！」

「いや、だから……」

「恐まりました」

「アレシア、少し待つてなさいね。とびっきりの一品を用意させますわ！」

「……ありがとうございます」

もういいさ。ありがたく服を貰つとこいつ。

どうしてこうなつたんだ？

「大変お似合いでござりますわよアレシア様っ！」

「ああん！ 素敵ですわ！」

いやまあ……私のせいなんだけさ。

大統領との緊迫感溢れる会談を執り行われ、お姉ちゃんと楽しくお話をしていた豪奢な部屋は、今や所狭しと並んだ洋服の数々に大半の面積を占有されてしまつており、その中で私は唯一の着せ替え人形となつて服を取つ替え引っ替えられている。

首から下がどうなつているのか、怖くて見れない。というか見たくない。髪にも何か結んだり、載せたりして。一体何をされたのか……くつ、私は見ない。絶対に見ないからな！

「クロシアっ！ 次は靴を選びましょう！」

「御意にございまーすっ！」

あーやだやだ、何でこの人達こんなノリノリなの？ 私を着せ替えする事の、何が楽しいんだか。あと、後ろに控えてるメイドさん達も何なんだよ。何で私が振り向く度に数が増えているんだ。仕事をしろ、仕事。

あーあ、やつぱりあの時、断固とした決意で拒否すればよかつた

な……。

「クロシア、そこは白がいいんじゃないかしら？」

「いいえ、サハリア様。断然黒でしょう」

「お、おい、こんな事で争うなよ。たかが服装じゃないか。んーしかし、アメリカ大統領選挙で服装によって当選した人がいたし、たかがと馬鹿にするのはいけないかもしない」

「アレシアはどう思いますの！？ ここは白じゃありません！？」

「アレシア様！ 私は黒を推します！」

「やつべ。全然聞いてなかつた。何が黒で何が白なんだ？ ビックでもいいか。地味目な黒にしどこへ」

「じゃ、黒にします」

「アレシア様もこう言われてますし、黒でよろしいですね？」

「んぬぬ……み、ミーフー！ あなたはどう思いますの！？」

「わ、私ですか？」

「お姉ちゃん、そんなに白がよかつたの？ 何を白にするかは分からぬいが、お姉ちゃんの意見を採つてあげればよかつたかな。」

「そうよ！ 白がいいと思いません！？」

「私は、そうでござりますね。ピンクがいいかなー……」

「ピンク、ピンク！？ あなた正気なの！？ 今のアレシアの服装の何処にピンクを合わせる氣なの！？ つて違います！ こいついう時普通は私と意見を合わせるんじゃありません！？」

「そんなつもりだったのかい。こいつう時、権力を振るつちや駄目だろ。ま、空回つてるけどや。」

「あ、すいません」

「軽い。謝り方が薄つペらいな。あんまりお姉ちゃんの怒りに重み感じてないよこのメイド。そういうえば、この人だけお姉ちゃんを奥様と呼んでないな。」

「ピンクね……参考までにどう合わせるか教えてくれないかしら？」

「さ、こっちに来て」

「そして何故か仕立て屋さんが食いついた。」

「えーと、ですね。こじら辺を淡いピンクにしたらいいのではないかと思ったのですが……」

「ふーん、あら、いいかも」

「ですよねですよね！ サハリア様、どうでしちゃ？」

いいのか仕立て屋さん。素人の意見で自説引っ込めていいのか。はつ！ 素人の意見もいい物は素直に認める。これこそが眞のプロ

「まあまあですわね。それよりも……だ、誰かこの二人よりいい考えを出しなさい！」

往生際が悪いぞお姉ちゃん 何かいいのかは分からぬか ピンクがよかつたんでしょ。もうじうでもいいから終わらうよ。もう疲れたよ。

「では私が……」

「はいはい！ 私にも考えさせて下さいつ！」

「うふふふ、ここは私も参加させていただきます」

つて、え？ 何か奥に控えてたメイドさん達がにじり寄つて、え？ も、もうやめてええ！ 私もう疲れたんだつて！ ちょっと、はうわつ、そこは触るなつ！ くつ、ううん……だからそこは駄目だつて！ ていうか、そもそも全然関係ない箇所だろうつ！

奥様、お食事のご用意が出来ましたがいかがなされますか？」

- 1 -

「あら、もうそんなに時間が経つていたの？」

ハルクさん、来てくれてありがとう。すごい助かった。

「お前達、アレシア様に失礼はなかつただろうね。私を取り廻しメイ、やる達二罰をひそめるハレ

私を取り囲むノイトさん達は眉をひそめるノルグさん、ノルグさんの表情に、メイドさん達は慌てて散り散りにどこかへ去つて行つた。よかつた、いなくなつてくれた。私はもう、精神的にくたくただ。大統領謁見とは疲労の種類は違つんだが、度合いは同程度に辛い。

「ふふつ！見なさいハルク！どう思います？」

私の両脇に腕を回して持ち上げ、ハルクさんに私を見せびらかす

お姉ちゃん。うあー。

「アレシア様、大変美しゅ「ひ」れこますよ」

「アリガトウゴザイマース」

微笑をたたえたハルクさんのお世辞。私は残念だが、素直に受け取れない。あと、疲れたー。横になりたいー。あー、ふあー。

「クロシア、アレシアに服を見繕つてくれたお礼よ。お昼と一緒に食べましょう」

「お昼」飯！ お腹空いた。食べたい。

「アレシア……田がキラキラしてますわよ。あんもうー、食べちゃいたいですわ！」

うーん、お姉ちゃんの発言の意味が理解出来ない。私がお昼」飯をせついたのと、お姉ちゃんが私を食べちゃいたいのとにどんな関係が……ああ、お姉ちゃんもお腹空いたのか。比喩表現つて奴だね。でも本当に私を食べないでくれよ。

「……」

「ん？ どうしたの？ お姉ちゃんが仕立て屋さんとハルクさんから生暖かい視線にさらされている。

「じょ……冗談ですわよ？」

お姉ちゃん、冷や汗かいてるけど……何なの一体。やつきの発言におかしい所はあつたつけ？

「……き、気持ちは分かりますけど、駄目じゃないでしょ？ うか？」

「……お食事はこの部屋に運ばせましょう。では、私はこれでいやだから、何この空気。

「本当に、もう帰るんですの？」

「はい」

お皿^いご飯を食べ、その後もおしゃべりを続けていたら時間はあつとこつ間に過ぎていき、もう既に空が赤く染まつつあった。

「泊まればいいのではあります事?」

「すみません。まだお母さんに心配はかけられないんです」

「仕方ないですね。なら私がアレシアと共に行きましょう」

あ、それならいいかも。懐かしい。寮にいた頃は一緒に寝ていたつけか。

「奥様、それはなりません。夜には旦那様が帰宅なされます」

久しぶりにお姉ちゃんと夜を過ごせるかと思つたのだが、ハルクさんの反対にあう。うーん、駄目か。

「……ハルク。アレシアに馬車を用意してやりなさい」

むくれるお姉ちゃんだが、夫を蔑ろには出来ないらしい。

「了解致しました」

「さあ、アレシア。マリーを驚かしてやりましょうー。あ、家にまではついてくるのね。」

薄暗い星空の下、我が家に戻つた私とお姉ちゃんは玄関の扉をノックで叩く。するとダダダダと廊下を駆ける音がしたかと思うと、勢いよく扉が開いた。

「アレシア! 遅かつたじゃな……」

どうしたのお母さん。何かこつ、体が固まつているよ?

「ふふふふふ。マリーさん見なさいな! 素晴らしげでしょう! ?」

私はまたも両脇に腕を滑らせ持ち上げられた。お姉ちゃん、足がプラプラするからこの持ち方やめて欲しいな。

「どじどじうしたのその服装! ?」

ああつー。そうだ、私はお姉ちゃんに貰つた服装に着替えたままだつた! ちらりと視線に入つた服装があまりに私には似合いそつもない恥ずかしい代物だったので、忘れてしまいたくてずーっと心持ち上に視線を向けていたら本当に忘れてしまつっていた。

「アレシアへ私からのプレゼントですわ！ 元が元とは言え、ここまで行くとはアレシアは最強ですわね！」

「最強……？ どういう意味だ？」

「本当ねっ！ それより、私に渡しなさい！」

「わわわ、お母さん。腰を引っ張らないでよ。

「も、もっ少し…！」

お姉ちゃんも対抗しないでくれ。両脇を持つお姉ちゃんと腰に腕を回して引っ張るお母さんの力が合わさって、痛いんですけど。

「何言つてゐの！ サハリアちゃんは今日一日たくさん一緒にいたじゃない！ 私なんか寂しくて寂しくてしょーがなかつたんだから

！」

「奥様、そろそろお時間が」

「もっし、仕方ありませんわね！」

お姉ちゃんが力を緩めてくれたので私はお母さんの腕の中へ。そして何かよく分からんが頬擦りされる。

「あ～んもーつ！ 可愛いわよアレシア！ 可愛い過ぎるう…」

「アレシア、また来てもいい？」

頬を薄く桃色に染め、田線を僅かに横にそらしながら話しあげてきたお姉ちゃん。く、可愛いのは私じゃなくてお姉ちゃんだ！。こんな風に言われたら、断れないじゃないか。まあ、もとより断る気はなかつたけどさ。私はお母さんに頬擦りされつつ、お姉ちゃんに返事をする。

「是非とも来て下さい。歓迎します」

「そう、ではまた来ますわ」

つんとあごをちょっと上に上げて、さらには緩みそうになる口元を懸命に押さえ付けよつとして押さえきれていないお姉ちゃん。ぐつ！ 反則的に可愛い仕草だ。私のツボにクリティカルヒット！

「は、はい」

落ち着け、落ち着け、かるむだう～ん、かるむだう～ん。

「マリーも、さよなら」

「はーい、じゃあねサハリアちゃん！ 服、ありがとうね！」

あつ、私が心を落ち着けている間にお姉ちゃん、馬車に足を掛けたる！ まだお礼の一つも言つていないので！

「お姉ちゃん！ 今日はありがとう！」

声を張り上げたかいあつて私の言葉は何かお姉ちゃんに聞か、馬車の中からお姉ちゃんは窓のカーテンを取り払つて手を振り返してくれた。

お姉ちゃんの馬車が視界から消えた辺りで見送りは十分と判断したらしく、お母さんは私を抱きしめたまま我が家へ入つて行く。

「ジョイソン！ ジョイソンちょっと来てっ！ 大変なの！ アレシアがっ！」

「うわ、びっくりした。いきなり耳元で大声出さないでよね。というか、私がどうしたと言つんだ。

「何があつた！？」

お母さんがせかしたかいあって、お父さんはリニアモーターカー位の速さで居間から飛び出し私達のいる廊下に現れる。

「見てよアレシアの格好！ 可愛いでしょーっ！」

すまない、お父さん。こんな事で急がせちゃって。あと、私を他人に見せる時はお姉ちゃんもお母さんも脇を持つんだね。何でだろう？

「そうだな」

あれ、呆れるのかなと想像したんだが。意外にお父さん、じろじろと見つめてくる。

「どうしたんじゃ？ ほあ……」

「まあ……お綺麗で御座います……」

さらに、お祖父さんとティーウィーも顔を出してきた。

そんな、皆から見つめられると、恥ずかしい……。頭に血が集まつて来ちゃつたよ。

ん？ 皆が一斉に私から視線を反らしたぞ？

「い、いじまでえ！ これ以上は理性が死ねるわ！」

何かお母さんよく叫ぶなあ。というか、理性が死ぬつてどうこう

意味だよ。

「そ、うじやな。若いもんにはまきつかうつ
え、何がきついの？」

「夕食の準備は出来て御座います。食事に致しましょ
うでは、行こうか」

お父さんの掛け声と共に、皆はざわざわと食事室へ向かって歩き出
した。

えーと……見られてるよね、私。

何だか家族の皆がおかしい。私が帰宅してからずっと、私の事を
こそそと覗き見て来るのだ。夕食の時も、夕食後の今も。
やつぱり、この服装が原因だよなあ。しかしここまで注目される
服装とははどういった代物なのだろうか。興味が湧いて来た。見てみ
よ。

私は首を仰角三十度から俯角八十度に曲げる。

「なつ」

私は即座に仰角四十五度へと戻した。

「どうかした？」アレシア

「いえ、何でもないです」

何とか平静を保つて、お母さんに返事をする。

私は……私は、何て恥ずかしい服装をしているんだ！ 極力恥ず
かしくないようにならば、黒と白を主力として展開
しつつ、ピンクを要所に配置。フリルを何重にも重ねて防衛線を構
築といった所だろうか。うん、この表現なら全然恥ずかしくなんて
な……うわああああ！ 無理！ こんな服装してられるかっ！

「私、着替えて来ますっ！」

今まで普通にこんな格好して歩いていたのか私！ 何たる厚顔無
恥！ 穴、もしくは布団があつたら潜り込みたい！

「駄目よー。」

「やめて下さいませつ！」

「」の場から逃げ出そうと椅子から飛び降りた私だが、左右の席に座っていたお母さんとティーウェアに両腕を掴まれてしまった。「何を考えてるのアレシア！ 着替えるなんてとんでもないわ！」「その通りで御座いますよ！ 寧ろ毎日その格好でいて頂きたいのが私共の総意で御座います！」

そんな総意認められるかっ！

「これ以上は無理！ 恥ずかしい！」

「恥ずかしい！？ 素晴らしいスペイスじゃない！」

「恥ずかしがられれば恥ずかしがられます程、田の保養で御座います！」

お母さんとティーウェアが何言つてるんだか分からない！

「お願いですから行かせて下さい！」

「イ、イかせて欲しいので御座いますか？ 御命令とあらば、喜んで！」

「だつ、駄目よティーウェアちゃん！ アレシアは不可侵のまま、綺麗なままでいてちょうどいい！」

綺麗なまま、か。ごめんねお母さん。もう私は殺人という罪で汚れているんだ。羞恥に熱くなっていた思考回路がお母さんの発言により一気に冷却されていく。

「いい加減にするんだ！」

喧嘩に耐え兼ねたのか、やけに険しい表情のお父さんが立ち上がる。

「」近所さんにも迷惑だろ？ が、今日はそろそろ寝てしまお？「お父さんの一喝に、お母さんとティーウェアはうなだれ私に謝つてくれる。

「ごめんね、アレシア。お母さんはしゃが過ぎたわ」

「申し訳御座いません御……アレシア様。如何なる罰も甘んじる所存で御座います」

まあ、私は着替えさせてくれるならそれで構わない。一人に気にしていなかった。告げた後、駆け足で一階に向かった。というか、もう着替えとかどうでもいいや。自分がお母さんの想像するような清純な存在じゃない事に思わずため息が出てしまった。

でもさつきまであれだけ着替える着替える言つてたんだし、この格好のままでいる訳にもいかない。なので自室に入りさあ着替えようしたら、きいいーと扉のきしむ音が聞こえてお母さんとティーウアが室内に入ってきた。

「……何か用ですか？」

今はちょっとお母さんに会いたくないんだけどな。悲しくなつてうつかり秘密を全部ぶちまけちゃいそう。

「ねえ、本当に着替え……どうかした、アレシア？」

鋭い。これだから困るんだ。

「いや、別にどうもしてませんよ？」

だがしかし、私はお母さんに心配かけないと決めたんだ。過去がばれる事は絶対にあつてはならない。動搖が顔に出てしまったのは失点だが、とつさにお母さんに背を向けたので見られてはいけない。背を向けたのも棚から着替えの服を取ろうとした行為だとすれば、不自然には見えないだろう。というわけで、私はいつも通りのペースで歩き、自然な風を装つて棚に手を伸ばす。

「お母さん？」

「何か心配事があつたら、すぐお母さんに言つつのよ？ 大丈夫。アレシアは必ずお母さんが守つてあげるからね」

背後からふわりと抱きすくめられ、こんな事を囁かれちゃった。こんな事されたら私は……私はこんな事を言ってくれる家族を大切な家族を傷つけたくない。お母さんにしてみれば私に相談して欲しいのだろうが、今のお母さんの言葉は私の搖らいだ決意を固めるのに役立つた。抱擁から抜け出してから、背後のお母さんに少しの弱音と隠蔽の決意を述べる。

「ありがとう、お母さん。でも大丈夫。私なら平氣です。ちょっと

一人になつたら不安になつちゃつただけですか？」

その後何事もなかつたように足を数歩動かして衣類棚の前に立ち、引き出しを開いて服を引っ張り出す。就寝時に着るのだからこだわりはない。いつもの白いワンピースだ。

ふう、覚悟を決めよう。アレが視界に入らないように皿をつむりながらアレを脱ぎ、ベッドの下にスロー・イン。悲鳴が聞こえたのは気の迷いに違いない。次に引き出しに収納されていた衣服の一番上に配置されていた白いワンピースを手探りで奪取しすぐさま着用。これで完璧だ。

「駄目じゃない。サハリアちゃんからの頂き物を粗末に扱つたら」皿を開くとお母さんはベッドの下に体を潜り込ませお姉ちゃんから贈り物を取り出そうとしている。

「すみません」

ただ私も限界だつたんだ。察して欲しい。

「もう！ そんな辛氣臭い顔しないの！ お母さん一緒に寝てあげるから！」

いや、それどんな繋がりがあるのかな？

「いいですよ」

「遠慮なんてしない！ ほらつ、行くわよ！」

お母さんつたら、強引だな。でもまあ、いいか。温かいし。

「アレシア、おはよー」

私の睡眠は、耳元から聞こえるお母さんの優しい声によつて破られ
た。

「ん……おはよー」わざとまく、お母さん

「あら? 起こしきやつた?」

「はい」

頬をゆきくつと撫でて来るお母さん。くすぐつたいけれど、案外
気持ちいい。

「まだ寝てもいいのよ」

「いえ、モファラスさんに会う予定があるので助かりました」

「別に無理しなくてもいいわ、アレシア」

「やりたいんですよ。駄目ですか?」

「……ありがとうございます、アレシア。それじゃあお願ひね

「はい」

私は軽く身支度を整えてから、裏口を通りモファラスさんのパン
ヌ屋さんに向かった。うーあ、日光が眩しいなあ。今日もお昼頃は
暖かくなりそう。

カラソカラソと鐘を鳴らして入店する。

「いらっしゃいませ。アレシアちゃんだったかしら?」

お出迎えは、昨日知り合いになつたちょっと陰気な女性。陰気な
だけじゃなく、ちょっと優しげな雰囲気もあるから多分いい人なん
だろうね。

「はー、今日も昨日と同じくバルカ家のお使いとして来ました」

「おうー、今日も来たかお嬢」

おー。やっぱモファラスさん元気だ。いつでなくちゃ朝つて感じがしないよ。

「おはよー」やこます、モファラスさん」

いつして朝の日課を済ませ、朝食をお母さんとおじいさん、それにティーウェーと一緒に取つていると、お母さんが私に話し掛けて來た。

「そついえはアレシア、アーザス君と何か約束でもしてた?」

突然アーザス君の話題を振られる。

「えーと、どうでしたつけ。でも何でいきなりアーザス君が出て來たんですか?」

「すっかり忘れてたんだけじね。昨日アーザス君がアレシアに会いに訪ねて來たの。だから、遊ぶ約束してたのかと思つてたんだけじん、あれ。そういうわれるとしてたよつな氣がするな。確か……昨日モファラスさんのパンヌ屋さんでアーザス君から私に会いに来て貰うとか約束してたかも分からぬ。

「アレシアその顔もしかして」

「はい、すつぽかしちゃいました」

「仕方ないわ。サハリアちゃんつたら強引なんだもの」

「まあそなんですけどね」

お姉ちゃんが大部分悪いんだけじ、私も完全に忘れちやつてたからなあ。その気になれば、お姉ちゃんの事だから私の都合もある程度は考慮してくれただろうし。責任が私にないとは言えない。そうだな、まだこの時間帯ならアーザス君も登校してないだろうし、ちよつと会いに行くか。

「私、ちよつと出て来ます!」

思い立つたが吉日。即行動だ。

「待ちなさいアレシア! 何処に行くの?」

と意気込み食事室の椅子から飛び降りたはいいものの、お母さんに腕を掴まれてしまつた。

「アーザス君の所です」

「駄目よアレシア。まだ着替えてもいなじやない。女の子なんだからそこいら辺はちやんとしないとね」

「うげ。めんどくさいな。

「そんな顔しない。もう、元が元だからちやんとそういうのには気が付けて欲しいわ。さあ、着替えに行くわよ」

そのまま私はお母さんに引っ張られるがままにされ、気が付けば昨日の衣装を身に纏っていた。

「え？ お母さん？」

どうしてこうなった。

「やっぱいいわねこの服！ ぴったりだわ！」

いやいやいやいや。ありえないから。絶対これドン引きされちやうから。

「さあアレシア行つてらっしゃい！ 頑張りなさいよ！」

何か微笑まれてそのまま外に出されてしまつて。さあ、私はどうしよう。このまま会いに行けばいいのか？ いや無理だ。次の日からしづらくなりともに田を畠わせられなくなる。うん、着替えてから出直……え、ちょっと、お母さん、何で鍵掛けちやつてるの？ この装備で行けど？ 嫌なんだけれども。本当に勘弁して欲しいんだけれど。

「アレシア。そろそろアーザス君が家の前を通り頃よー。頑張つて！」

何を頑張るんだ！？ 精神的苦痛と戦えという事なのか！？

「あれ？ アレシアちや……ん？」

あ。見られた。なんというジャストタイミング。お母さん、あなたはエスパーだったのかい？

「お、おはようございますアーザス君」

心中の動揺を押し隠して、あたかも何事もないかのように挨拶してみる。

「……」

唖然としているアーザス君。口を閉じる余裕もないみたい。そり

や、気持ちは理解出来る。そうだよね。久し振りに帰つて来たと思つたらこの奇行だものね。掛ける言葉もないんだろうね。精神的におかしいって思つちやうのも仕方ないよね。

だがちょっと待つて欲しい。アーザス君。確かに私の今の格好はとても見れた代物じやないかもしれない。そこは認めよう、うん。というかさ、たとえこのフリルひらひらな服の似合つような人だつてさ、そこらの道端にいたら奇異の目線で見られると思うんだよ。やつぱりこういう服は場所を考えて着ないと駄目だと思う。つまり何が言いたいのかと言うとだね、この服を着たのは私自身の意思じゃないのだから、だからもうそんな目で見ないでくれると助かるのだがという事なんだ。

「あのですね、アーザス君。これは決して私の意思で着ている訳じやないんですよ？ そこは理解して貰えますか？」

これから付き合いを考え、ちゃんと釈明する事じよ。変な目で見られると、色々と困る。

「て、アーザス君？」

「いくらなんでも固まり過ぎじやないか、と思つて手を握り、揺さぶつてみる。あれ……この人、反応しないぞ！ どういう事なんだおい……こいつ、死……んではいなが氣絶していやがるぞ！」

「お母さん！ 大変です！ アーザス君が氣絶してます！」

私の声に、窓から覗き見していたお母さん、お祖父さん、ディーウアの三人が慌てて家から飛び出して来る。というか、見てたのか

……。

「彼には刺激が強すぎたみたいね。迂闊だつたわ」

「最近の若いもんは軟弱じやのつ」

「アレシアちゃんの美貌なり、」「なるのも不思議では御座いませんでしたよ」

「そうね」

「そうかもしけんな」

好き勝手に何を言つてゐるんだこいつら。まあい。とにかくアーヴィング

ザス君をなんとかしなきゃ。

私達は気絶したアーザス君を居間に運び込み、ソファに寝かせた。

「どうしますお母さん？」

「さなり気絶する位だもの。アーザス君、体調が悪かつたんだろうなあ。生死に問題がなければいいんだけど。

「そうね、まずはアーザス君のお母さんに一言言つておくれべきでしょうね。私、ちょっと行ってくるわ」

「ちょっと待つて下さいー。お医者さんを呼ぶのが先ではないでしょーか？」

「それはいいわ。原因は分かりきつているもの」

「え？」

「アレシアもそろそろ自覚して欲しいわ。成長していく毎に磨きがかっているんだから」

いや、全く理解出来ないんだが……どう考へてもアーザス君が気絶した理由に私はないだろ。ん？　いや、え？　もしかして、私の格好にひどい拒絶感でも覚えたのか？　それを遠回しにお母さんは忠告してくれたのか？　理不尽だ。お母さんがこの服着せたんじやないか。

「アレシア。何処に行く積りじや？」

「着替えてきます」

それにして、なんだか噛み合つていらない感じがするんだよな。気のせいかな？

十一、「やれはわわわひやつてこるのか？」

さて、アーザス君のお母さんが来る前に着替えてしまおうと考えていた私だが、予想外の速さで一人が戻つて来たから階段に足を乗せようとした所で背後の玄関の扉が開く音を聞いた。そしてお母さんに私の行動を咎められる。

「アレシア、アーザス君はどうしたの？ ちゃんと見てないと駄目でしょ？」

えー。原因が分かりきつてこるから、大丈夫なんじゃなかつたの？

「すみません。ただ、この服は着替えておくべきだと思ったので」「何言つてるのー。今日はずっとその服着てなさいー。」

それは断固として拒否させて貰う。

「でもお母さん、この服昨日も着たばかりですし、このいつ服は大事に取つておいた方がいいと思います。滅多な事じや手に入らない貴重品なんですよ。こんなに頻繁に着ていたらすぐに擦り切れちゃうかもしれません」

「……しょうがないわね。じゃあ今日に焼き付けるから、や二でちよつとじつとしてなさい」

「はあ……。分かりました」

よく分からぬなあ。お母さんにとってこの服を着た私は気持ち悪く映つていいのかな。我が子ならばどんな姿でも可愛いのかな。気になるなあ。聞いてみようかな。でも……ええい、別に容姿が少し位悪かつたってなんだつていうんだ。このまま頭にしこりを残しておきたくない。さつさと聞いてすつきりしよう。とはいえ、私

の個人的な意見としては自分の顔はそこそこ綺麗な顔しているとは思つんだけど。

「お母さん。この服、似合つてますかね？」

少し不安だつたのだが、思い切つて質問してみた。

「そりやあもう！ 似合い過ぎよ！ その服はアレシアの為に作られているんだから当然かもしれないけどね。サハリアちゃんはいい仕事したわ！」

ああ、考えてみれば似合つように作られたのだから似合つのが当然な訳か。でもこれで、アーザス君が気絶した理由に私は含まれないつて事になるよね。良かつた良かつた。

「それより、お母さん。『テウラテさん』の様子がさつきからおかしくありませんか？」

「え？」

何かさつきから全く動いてないよう見えるのは気のせいいか？

「もう！ アレシア自重しなさい！」

「はい？」

何で私？

「それより『テウラテさん』をどうしますか？」

「そうねえ……。しばらく横になつてればじきに氣づくから、ソファに寝かせておきましょ。後、アレシアは今すぐ着替えてきなさい。これ以上の被害は出したくないわ」

「でも、やっぱりお医者さんに診断して貰つた方がいいんじゃないですか？」

私の服装に原因がないなら、いや、何かお母さんに叱られたし、また真相はどうなのか怪しくなつてしまつたが、ないのなら、二人の人間が倒れるのはおかしい。

「大丈夫よ」

「どうして断言出来るんです？ もしかして、お母さんは事の真相を知っているんですか？」

「お母さんはまだアレシアが気付いていないのにびっくりよ

そんな事言われても、分からぬ物は分からぬんだ。この服装に原因がある可能性は推察出来るけれど。

「すみません、どうしても分からぬんです。教えてくれませんか」

「そうねえ。口で言つより鏡を見た方が早いと思うわ」

「ありがとうございます！」

いてもたつてもいられなくなつた私は、洗面所へ駆ける。

一体鏡には……何が映し出されるというんだ……！？

廊下を奥に進み、洗面所に入ると早速鏡を覗き込んで見る。そこに映し出されたのは当たり前だが、私の姿だ。えーと……これから何が分かるとこだ？ ふむ、冷静に分析してみよう。まず、洗面所は日本にあるのと同じような蛇口から水の出る洗面台と、顔を映す目的で設置された鏡とで成り立つていて。洗面所の設置された部屋には窓から陽光が差し込んでいて、視界は良好だ。また、私の身長がそこまで高くないので洗面所では木箱を踏み台として使用している。そうする事で、鏡に私の体は胸の辺りまで映る。そこに映しだされた私が普段と異なつている点は、服装を除けばないような気がするんだが、まあ一応まとめてみるか。何か分かるかもしない。

肌は白く、地球での北欧系に類似していて、頭髪はお母さん譲りの白銀色。目は紅色だが別に太陽に弱い訳でもない。鏡に映つてゐる範囲内での服装は黒を基調にしたドレスみたいな服だが、その手の知識が薄いので詳しく種類を上げる事は出来ない。

ふう、全然分からん。変わつた点なんてないじゃないか。

もういいや。お母さんに答えを聞こう。そつちの方が手つ取り早い。

おそらく居間にいるだろ？ と中に入ると、お母さんはソファに寝かせたアーザス君とテウラテさんの看病をティーウアと一緒にしていた。

「お母さん、全然分かりませんでした」

「……まあそうよね。分かるならどうの昔に気付く筈だものね」

何、その諦めきった表情。私には理解出来ないとでもいうのか。
「そんなに難しい事なんですか？ 私も頑張りますから言って下さいよ」

「分かったわ。この一人が倒れた原因はね、アレシアが綺麗過ぎるからよ」

「面白くない冗談だ。

「で、眞実は何ですか？」

「……ディーウアちゃん、どうしたらいいのかしら？」

「申し訳御座いません。どうしようもありません」

「何で私に理解力がないかのよつた雰囲気になつていいんだ？ 人の美貌程度でこんな現象が発生する訳ないだろ？」からかわれているのか、それとも実はこの一人にも真相は分からんんだけど、答えがないのは怖いから私を理由にしているのか？ つて無理のあり過ぎな妄想だな。あっ！ もしかしてこれが大人にならないと分からぬ事つて奴か！ いやいや、私も身体上はともかく精神は二十歳過ぎてるから。という事は、肉体が大人にならないといけない……？ ん？ あれ？ 何か訳分からなくなってきたぞ。結局、アーザス君とデウラテさんの倒れた原因は何？ そして何故私には教えてくれないの？

「お願いします。本当の事を言つて下さいよ。頭がこんがらがつてきちゃいます」

「アレシア、ホント、お願いだから鏡をよく見て来なさい。私は嘘を付いてないわ」

「……絶対に言わないという事だね。仕方ない、後でディーウアに主人命令で眞実を吐かせてやる。フフフフ、素直に吐けよディーウア。でないとちょっとだけ苦しい目に会つかもだよ？」

「分かりました。一人が倒れた理由は私が綺麗過ぎるせいだつたんですね！」

「よかつたわ……ようやく、本当に―――うやくアレシアに納

得して貰えたみたい。これもティーウアちゃんのおかげよ。ありが
とうね」

「……お褒め頂き有難う御座います。それより何だか寒気がしませ
んか？」

「いいえ、そんな事はないけど。もしかしてティーウアちゃん疲れ
てるんじゃないから? お手伝いばかりじゃ、体が持たないわ。
で、そこに座りなさい」

「申し訳御座いません」

「いいのよ、気にしないで。それよりアレシア着替えて来なさい」

「はい」

どういう風の吹き回しか知らないが、ありがたい。わざわざ着替
えてこよ。

一一三、アーザス君を追い掛け（前書き）

2011/7/29 加筆しました。

一一三、アーザス君を追い掛けて

着替えを済ませた私が階下に下りるとアーザス君とピカウラさん
の二人が目を覚ましていた。

「あら、着替えちゃったのね」

「仕方ないわよ。まさかあれだけの被害が出るなんて思わなかつた
んだもの」

まだ言つてら。まあいいや、私はアーザス君に謝らないと。
大人の会話を始め出したお母さん達の横をすり抜け、ソファに座
るアーザス君の前に立つ。

「アーザス君、昨日は約束をすっぽかしてしまつてすみませんでし
た」

あれ、何だかぼんやりしているな。

「アーザス君？」

返事がない。肩に手を掛け揺すぶつてみる。

「アーザス君、大丈夫ですか？」

あ、私と目が合つた。

「あああああああアレシアちゃん！？」

ちょっと、いきなり立たないでくれ。急だからびっくりしたじや
ないか。

「ええ、そうですよ？」

「どどどどどどどしてこここー？」

しかし、慌て過ぎだろ。どうしたんだアーザス君。

「ここ、私の家ですよ？ いて当然じゃないですか？」

「え、えええ？ ど、どうなつてるのー？」

結構な混乱具合だが、アーザス君大丈夫かな？

「覚えていませんか？ アーザス君、あなたは道ばたで急に倒れた
んですよ。それでうちに運び込まれたんです」

「え………？」

やつとアーザス君落ち着いて来たみたい。良かつた。

「そ、そうだ。アレシアちゃんを……あ、あの時に服装じゃないんだね」

おつとその話題は鬼門だ！

「あの、あれは私の意思で着たんじゃありませんからね！」

「ふ、ふーん。そつか」

「あ、ちょっと引かれてる？ やつぱあの服装はないよな……。はあ……。」

「あ、正気に戻ったみたいねアーザス。大丈夫？」

「うん、お母さん……あ！ ボク、学校行かなきや！」

「そうね……。でも、もう間に合わないんじゃない？」

「そうだけど、少し位顔出した方がいいもん！ 行つてきます！」

「いつてらつしゃいアーザス！」

アーザス君はあつと/orの部屋から駆け出でしまつた。何というか、真面目だな、アーザス君は。私なら面倒で休んじゃいそうなものなんだけど。

「偉いわねアーザス君。私だつたら休んじゃつわ」

「あ、お母さんも同じ事言つてる。

「ふふ、そうかしら？」

「デウラテさん、アーザス君を褒められて嬉しそうだ。

「アレシアもアーザス君となら安心ね」

「あら本当ー？」

さつきお母さんから掛けられた言葉より、こんな言葉の方が嬉しいのか？ さつきからよく分からない事が多いな。美貌が人を氣絶させる無殺傷兵器だといつ荒唐無稽な話で話題を逸らしたり、私とアーザス君の生涯親友発言にデウラテさんが歓喜したり。

て、おいおい。アーザス君にちゃんとまだ謝つていないで。わざわざ私の美貌（笑）で氣絶させてまで呼び止めたのに、本来の目的を遂げない訳に行くものか。

「お母さんまだアーザス君に謝つてなかつたので追い掛けて来ますね！」

「ちょっと！ アレシア！？」

なあに、まだそんなに時間も経つてないし、アーザス君の通う学校の場所は把握している。間に合つでしよう。

私は家を飛び出し閑静な住宅街の中を駆ける。材質は知らないが、今履いている茶色い革靴で敷き詰められた石畳を蹴るのはちょっときつい。元々走り回る為の靴じゃないしね。それにしても、静かな住宅街をたたたたと足音鳴らして走つているせいか、妙に出会つた人々から見られてるな。

我が家のあるチヨリアの丘を駆け下り続け五分が過ぎようとした頃、ようやく学校が見えてきた。内部に列柱のアーケードを持ち、建物の背が高く、奥行きの広い設計で建築された一階建煉瓦製の学校は私達の住む地区の人々の集会場にもなっているが、午前中は教育の場として使われているのだ。古代ローマのバシリカに似ているといえば似ていらない事もない。

その学校の授業も太陽がだいぶ高く昇つていいし、もうそろそろ終わるんじゃないだろうか。まあいい、私が魔法を使ってノンストップでここまで走り抜けて来たんだ。アーザス君はまだ到着していないに違いない。少し待つていればアーザス君の方から来てくれるだろう。その間、学校の中でも覗いてみようかな。

観音開きの扉をそつと開いて僅かな隙間を作り、内部の様子を見てみる。

「……で、あるからして四分の一は一分の一と同じなのです」

「ほらほらほらほら。足し算引き算より先に掛け算をしなきや！ ね、分かった？」

学校の中からは先生の声だけが聞こえる。私語とかはないんだ。いや、ただ目立たないようにしているだけか。もぞもぞ生徒達が動いているのが私の位置からはよく分かる。内部は七つまとまりに分けられ、それぞれで異なる授業をしているみたいだ。私の近くで授

業をしている二十人程の集団は、四人掛けの長机の上に蠅を流し込んだ板を乗せて、その蠅を鉄棒でガリガリ削つて筆算とかをしてゐるみたい。まだ紙は貴重だから、そんなホイホイ使える物じゃないんだろうね。

「あれ？」

七つのまとまりの内、一番奥の集団の中にアーザス君がいるぞ。私の走行速度は通行人に不審に思われない位に抑えていたとはいへ、ほぼフルスピードで走つて来たんだけどな。どういう事だろ。アーザス君がフルスピードで走つたら五分も走り続けられないだろうし、かと言つてペースを落として家から学校まで走つて来たのなら追いつく筈なんだが。

「せんせーっ！　だれかが入口から覗いてるーー！」

しまつた。私に気付いた女の子が学校中に響き渡る大きな声で叫ぶから一斉に視線が私に集まつてしまつた。

一番近くで授業をしていた面長の中年女性が私につかつかと歩み寄つて來た。着用している薄黄色のローブが床に付きそうだけど、よく踏んづけずに歩けるな。

「あなたはどなた？　見た所、学校に通つている年頃のようだけど、どうしたのかな？」

中年女性は私のすぐ目の前に来て、膝を折り曲げて私に目線を合わせて話し掛けて来る。

「この学校に友達がいるんです。だからちよつと確認しようと見て覗いたんですけど……ご迷惑でしたね、すみません」

「あらあらしいのよ。そんなにかしこまらなくて」

「ありがとうございます」

でも、私はいつも丁寧語で会話しているからね。お気遣いは無用だ。

「そうね、外は寒いでしょう？　お友達の授業が終わるまで中で座つていなさい」

「いや、大丈夫ですよ？」

「いいから、や、や、こちに来なさい」

おわ、急に手を引つ張らないで欲しいね。まあ、そんな意固地を張る必要もないし、ここはお言葉に甘えよう。今日の天気は日差しは暖かいのだけど、絶えず冷たい微風が吹いて来るから外で待つのは嫌だつたし。

女性教師に腕を引きずられ私は七、八歳位の子供達が二十八人いるまとまりの所へ連れ込まれた。あ、顔見知りが一人いるぞ。ルル君じやないか。

「席に空きがないわね」

何だか嬉しそうに呴いているのは、何故だろ？

「先生！ ここ、ここが空いています！」

「こっちも空いてるよつ！」

成る程、先生の呴きに反応して生徒達が自発的に四人掛けの長椅子を詰めて私を座らせようとしている。この先生、分かつてやつたのか。自分の生徒が優しいというのは慢慢になるんだろうね。

「……」

ん？ 何で嬉しくなさそうなんだ？

生徒達の声を無視して教壇に移動する先生と私。

「みなさん、ちょっとだけこの子を預かる事になりました。仲良く出来るかな？」

先生の問いかけに、「はーい」と生徒達の大きな返事が返つて来る。

「先ずお名前から自己紹介して貰えるかしら？」

「……はあ。いいですよ」

何これ。私は何で転校生みたいな状況に追い込まれてるんだ。

「皆さん初めてまして。私はアレシア バルカです。少しの間だけですがよろしくお願いします」

まあ、こんな感じでいいよね。

「今日は授業はここまでとします。先生はアレシアちゃんのお世話をするので皆さん帰つてもいいわよ」

「やー。わたしもアレシアちゃんのお世話をねー」「するいせんせー！」

いや皆落ち着けよ。帰つていいんだからさつさと遊びに行くなりしろよ。何で皆して私の方に近寄つて来ているんだよ？ ちょっと、待つて。待つてくれえ！ 一斉に私を押さないで！ つ、潰れる！

圧殺されちゃう！ 痛つ！ も、もつ駄目だ……後で疑いを持たれたつて構うものか！ 強引に脱出してや、あれ？

「何をしとるんだお前は？」

「ラインラ君……」

君が助けてくれたのか。私を呆れた表情で見つめつくるのは少々気に障るが、この際不問にしよう。

「ありがとうございます。助かりました」

「つむせえ、ルールがどうしてもつたからだかんな。勘違いするなよ！？」

照れるなよ、ラインラ君。子供じみていいとは思うけど。

「お兄ちゃん！ とにかくここからでよー。」

ルール君の焦つた声を聞き辺りを見回してみると、周囲の人々から

らの困惑や羨望、好奇の混じつた目線が私達に突き刺さる。

「ん？ ああそうだな」

私達は周囲の人々の混乱が収まる前に学校を抜け出した。

一十四、友人達の放課後にて

学校から何事も無く出て行つた私達三人は取り敢えずそれぞれの自宅への道を歩いていた。と言つても、私の家までは同じ道を通るんだけど。

「しつかし、子供つて恐ろしいですね。夢中となる対象物にがつり食らいついて来るんですから。まあ、幼年者のお世話を皆がやりたがるのは悪い事じやないんでしょうか?」

そう考えてみると、私のお世話をしようと率先して群がつて来た彼らは素晴らしい精神の持ち主だったのかもしれないなあ。まあ私にしてみれば群がつて来る彼らの方が幼年者なんだけどね。

「何言つてんだ? お前も子供だろ?」

ラインラ君にすかさずツッコまれてしまつた。

「いや、そなんですけど」

私はただの子供とは些か違つのですよ。色々な意味で。

「あ」

「私、またすべき事をしていいじゃないか。」

「どうした?」

「アーザス君つてまだ学校ですかね?」

「あいつに用があつたのか」

「そつなんですよ、それなのにあんな事になつてしまつて……」

「困つたもんだ。」

「あんな事になつたのはお前のせいだろ」

「つ……」

言ひ返す言葉がない。うん。確かにそつではあるんだけど。でも

や、どうしてああなるんだかな。

「アーザスになんの用があつたんだよ」

「いやそれが、昨日ちょっと会つ約束をしていたんですがすっぽかしちゃつたんです。だから謝らなきゃいけないのです」

「それでわざわざ学校に押しかけてきたのかよ?」

ラインラ君に私がしようとしていた事を復唱されてみたが、ここまでする必要ないよな。学校が終わつてからアーザス君の家に訪問すればいいだけだったね。とんだ無駄骨だ。しかも、そんな事で学校に迷惑をかけてしまつたし。後日謝りに行くべきかもしれない。で、謝罪対象がどんどん増えていつてるよ。

「ははは……」

乾いた笑いが喉を震わす。

「ばつかじやねえの」

「ごもつとも。本当にその通りだ。

「で、これからどうすんだ?」

「そうですね……アーザス君の家に行つて待たして貰いますかね」

「そうか」

「その後、何があるか?」

「いえ、特になかつたと思います」

「ならアーザスに謝つた後、オレンчинに来い」

「え? どうしてですか?」

「うつせい! 一緒に遊んでやるうつてんだよ! お前どーセア

ー ザス以外友達いねーだろ!」

何だこの状況は? ラインラ君つてこんな子だつたつけか。以前はイタズラは頻繁に仕掛けては来るものの、遊びになんて誘つて来る事は無かつたのに。

私を気遣うようになるとは、ラインラ君も成長してゐんだな。年長者としては微笑ましい限りだよ。

「そういう事ならありがたく行かせて貰いますよ」

「……なんだよ。一ヤニヤしやがつて」

「いやいや。何でもあつません」

あらから十数分後。ラインラ君達とは別れ、私は自宅のすぐ隣にあるアーザス君の家の前に立つてこる。煉瓦むき出しの我が家とは異なり漆喰で白く塗り固められた白い壁が美しい。汚れやすいだろうに、よくこの白さを維持しているもんだ。壁に令わせたのか白く塗装された木製の扉をどんどん、と一回叩いて訪問を知らせる。

「あら、アレシアちゃん。どうしたの？」

ちょっと時間を置いて、デウラテさんが扉を開けて出でてきた。

「アーザス君帰つて来ますか？」

「「めんなさいね。あの子まだ帰つていの」

「そうですか」

まだ学校なのかな？

「もうお昼ご飯の時間でしょ。食べてからまたいらしゃい。マ

リーさん心配してたわよ」

「分かりました。ありがとうございます」

デウラテさんの言葉に従つて我が家に戻る事にしよ。アーザス君の家は自宅の隣なので三十秒もかからずに玄関に入る事が出来た。

「ただいま帰りました」

私の帰宅の挨拶と同時に、いきなり台所の扉が威勢よく開け放たれお母さんが飛び出して来る。

「遅いじゃない！ 何をしてたの！？」

「うお、凄い剣幕。

「すみません。アーザス君と上手く鉢合せにならなかつたもので」

「心配したでしょ！」

「すみません」

床を踏み鳴らしながら近付いてきたお母さんは前触れもなしに私をギュウと抱き締め上げる。

私もまさかこんな時間がかかるとは思わなかつた。お母さんもちよつとアーザス君とお話しして帰つて来るばかり思つていたのだ

ろうから、何があつたかと心労をかけちゃつたんだろう。馬鹿だな、私は。こんなちよつとした事でお母さんに負担をかけてしまった。本当に愚かだよ、ちゃんと気を付けなくてはいけない。

「もう、一生涯このままによつかしら」

「……え？」

今とんでもない発言を聞いてしまつたが、本氣か？

「ジョーダンよ、冗談。さ、お昼ご飯にしましょ」

だよねえ、真剣な表情で言つてそれらしく見せただけだよね。その慌てたような表情も驚かす為の演技なんだよね。……だよ、ね？

さて、お昼ご飯を済ませた私はちゃんと行き先を告げた後、最初にアーザス君の家に向かつた。扉をノックして来訪を告げると、すぐ扉が開いてアーザス君が出迎えてくれた。

「アレシアちゃん！ 待つてたよ！」

「こんにちは、アーザス君。少しだけいいですか？」

「もちろん！ とにかく中に入つてよ！」

それにしてアーザス君は機嫌が良いようだ。何か嬉しい事でもあつたのかな。

「いえ、次の予定もあるのでここで」

「そつか。それで何の用かな？」

うん？ 少しテンションが下がつたようだが、私は何かしてしまつたか？ まあいい、先ずはやるべき事を済ませよう。

「昨日の事です。約束していたのにすみませんでした」

ようやく目的が達せられた。というか、何か、謝る事が目的になつちゃてたな。

「そんなのいいよ。全然気にしてない」

「そうですか。良かつたです」

これでもうアーザス君には用が無いのだけれど、これだけでお別れというのもアーザス君に悪い気がする。

「そうだ。実はラインラ君の所に行くんですが、予定が空いている

のならアーザス君も来ませんか？」「

「ふ～ん……」

あれ、ちょっとした親切心からの発言だったんだけど、お節介だつたかな。

「アーザス君？」

「うん。ボクも行くよ。お母さん！ アレシアちゃんと遊びに行つて来るね！」

「行つてらっしゃい！」

私はアーザス君と隣り合つてラインラ君の家へと歩いて行く。徒歩でも三分以内に着ける位の距離だ。しかし、私達を除いて人がほとんど歩いてないなあ。

「ねえアレシアちゃん。ちょっと聞いてもいいかな」

隣を歩くアーザス君が話し掛けて来る。

「何ですか？ 構いませんよ」

「あのさ、ラインラの所に何をしに行くの？」

「何でしょうね。ただ来いとしか言われていなくてよ」

「そりなんだ。じゃあ、彼はアレシアちゃんをビッグして呼んだのは分かる？」

「分かりません。でも、そういう悪い事にはならないとは思いますけど」
ラインラ君は意地悪な性格はしているけど、陰湿な性格はしてないからね。それに大雑把な性格だし、変な小細工はして来ないでしょう。ガキ大将っぽい感じと言えばいいのかもしれない。

「そうだといいんだけどね」

アーザス君は何が心配なのかな。私と話している時は笑顔なんだけど、時々考え込むように下を向いたりする。少し警戒し過ぎだと思う。大体再開する前のラインラ君のレベルなんて私のスカート捲らうとしたり、私が外を歩いている時に通せんぼしたりとか、もう日本の小学生でもやるか分からぬ程度の低いものでしかなかつたよ。それに比べれば……。

「遅かつたじゃねえか！」

おや、到着したか。ラインラ君の住む地域は私達の住む地域より丘の下辺りに存在している新興住宅地だ。元々小さな賃貸住宅に住んでいたようだが、私のお父さんと仲が良かつた事もあって近所に引っ越しして来たと聞いている。そういう事もあってラインラ君の家は築五年も経っていないんじゃないだろうか。とにかく新築なのだ。建築には最新の流行が取り入れられていて、三階建てのラインラ君の家は大きな窓と青い壁が特徴になっている。

その家の前はフットサル場位の広さがある庭になつていて、広い庭からラインラ君は私達に声を掛けてきたのだ。

「すみません」

「つーか、何でアーザスまでいるんだよ

「悪いかい？」

アーザス君、けんか腰はやめなよ。確かにラインラ君の物言いはがさつで無神経だけどさ。

「いや、その、駄目でしたか？」

「まー、いてもいーけど邪魔はすんなよ」

「そう、ありがとう。ラインラ」

何だこの緊迫した雰囲気。来て早々帰りたくなつて来た。これから大丈夫か？

私とアーザス君、それにラインラ君の三人が気まずい雰囲気の中綱渡りのような会話をしていると、ラインラ君の弟のルール君が玄関から姿を現した。

「遅せえぞルール

ラインラ君の声は心なしか嬉しそうだ。私が嬉しいからそう感じ
るのかも知れない。とにかく、ルール君の登場で変わった空気をさ
つきまでのようにならないようになないと。

「「めん兄ちゃん」

「さてと、じゃあ行くか」

てつきりこの場で何かすると思つてたが違うのか。

「何処に向かうんですか?」

私の質問に、ニヤリと笑うラインラ君。

「いいトコだ。ついて来い」

ラインラ君が歩きだしたので、それに合わせて私達も付いて行く。
ラインラ君が意気揚々と前を歩き、その横には楽しげに笑うルール
君。その少し後ろをアーザス君と一緒に私が歩く。

「何処に向かうんでしょうね」

「ボクには分からないよ。変な場所じゃないといいんだけど」

相変わらずアーザス君は不機嫌そうだ。あんまり外で遊ぶのが好
きじゃなかつたつけ? そんな事は無かつたと思うけれど、幾分情
報が古いからなあ。もしかしたら、嫌いになつてたりするだろうか。
「アーザス君は外で遊ぶのって好きですか?」

「好きだよ」

あれ、好きなんだ。

「じゃあもう少し楽しんだりどうです？ ラインラ君の用意するお楽しみに期待してみましょ「うよ」

あいつの事だから、きつとびつとさせてくれるが。

「うん……」

どうにも気の乗らない返事だな。

「おい！ 早く来いよ！」

おつと。ラインラ君達と随分離れてしまつた。

「ほら！ 行きましょう！」

私はアーザス君の手を握り彼を引っ張る。

「あ、う、うん！ そうだねっ！」

私達はラインラ君の元へ駆け出す。まあそんな距離が離れていた訳でも無いからすぐ追いついた。しかしアーザス君運動不足なんじやないか？ 五十メートルも走つてないのに、顔が真っ赤だぞ。

「何やつてんだ！ はぐれたらどうすんだよ！」

私達に対しても怒りの様子のラインラ君。

「すみません。さ、もう大丈夫ですから先を進みましょう」

ラインラ君はこっちを睨み付けたまま動こうとしない。

「？ どうしたんですか？」

私が問いかけるとラインラ君は舌打ちをして

「後ろにいたらまた遅れるかもしないだろうが！ アレシアはオレの横だ！」

と怒鳴つて私の腕を強引に引っ張つた。危ないので私はアーザス君の手を離した。

「痛いじゃないですか」

「うつせい！ さ、行くぞ！」

「仕方ないですね。アーザス君、行きましょう」

「うん。そうだね」

どうしたのアーザス君。笑顔なのに威圧感が漂つてくるよ。

「アーザス君、どうかしました？」

「ん？ どうして？」

ちょっとこの子怖い。どうするよ。

「いや何にも無いのなら構いません」

よく分からんが、しばらく触れないで置こう。

こうして私達は止まっていた足を前に進めた。ラインラ君の態度が軟化していく友好ムードになると想いきや、性格温厚だった筈のアーザス君の頑なな態度によつてあんまり居心地の良くない環境である。私としては別にそれでも一向に構わないっちゃ構わないのだが、どうしてこの一人の仲はこうも悪いのだろうか。改善出来ない類の対立なのかねえ。

「アレシアちゃんと一緒に外を歩くのも、久し振りだね」
機嫌が直つたのか、アーザス君が話し掛けて来た。

「そうですね」

「オレは一度目だけどな」

ラインラ君も参加して来た。

「ふーん、そうなんだ」

おい、ラインラ君が会話に参加したらたちまち機嫌を害しやがつたぞこいつ。笑顔が何故か黒く見えるな。

「アーザス君はそろそろ機嫌を直してくれませんか? こうして大勢で外を歩いているんです。もつと楽しみましょうよ」

私にとつて、こうこうのつて久し振りなんだから、楽しくありたいんだ。

「ごめん、そんなつもりじゃなかつたんだ」

途端に罰の悪そうな顔をするアーザス君。

「ですから! 一緒に楽しもうと言つているんです! し�ょげた顔しないで下さい」

「分かった。じゃあ思い切り楽しもうと思つ」
いい心掛けだ。だが何故私の手を握る?

「あの?」

「駄目かな?」

「一向に構いませんが、こんなんで楽しいですか?」

「ボクはこれで楽しいよ」

さつきまでとは違うきれいな笑顔を浮かべるアーザス君。

「なさいいんですが」

何が何だか分からぬ。

こんな具合で新興住宅街の出来たばかりの新しい街並みの中、新しく敷かれた石畳の広い道路を進んでいたのだが、先頭に立つルル君が住宅と住宅の間の細い脇道に入り込む。覗き込んで見ると脇道は日の光も満足に差し込んでおらず薄暗い。ここからは表の道を外れるらしい。

「本当にここを通るのかい？」

「ああ」

アーザス君が嫌そうな表情でラインラ君に問いかけるが、ラインラ君の方は意に介していないよう投げ槍な返事を返す。

脇道に入り込んだ後もアーザス君と私が今まで通った事の無い入り組んだ路地を進み続けておよそ五分。唐突に道が開けたかと思うと、木々の生い茂る雑木林に私達は立つていた。

「こんな所があつたんだ」

アーザス君も驚いているようだ。

「私も知りませんでした」

そういえば、上空を飛翔していた時この丘の一部に縁があつたな。陸路でどうやって行けるか検討も付かなかつたが、よもやラインラ君が道を知つていたとは。

「おい、まだ着いてないぞ」

私達は縁の芽吹き始めたばかりの木々や灌木を避けつつ、雑木林の中へ足を踏み入れていく。しばらく進むと開けた土地に出た。広さはそうだな……縦百メートル、横八十メートル位かな？ 結構広さだ。

「おっラインラ。遅かったじゃ……」

「そりだよ～今まで何して……」

そこにはかつてラインラ君と共に私にイタズラを敢行した一人の少年の姿があった。茶髪が完全に逆立つていて生意気そうなのと、ここでは珍しい黒髪の氣弱そうな少年だ。身長は伸びているけれど、全般的な特徴はちつとも変わっていない。ラインラ君とは現在でも親しき仲にあるようだ。

「ガーンにドウス。こいつ、覚えてるか？」

ラインラ君が私の腕を上に突き出して、プラプラと振る。

「おおおおおお覚えているのなんのつてもんじゃあないよラインラ

！アレシアいつ帰つて来たのさ！」

ドウス君の方が凄い剣幕で叫び出す。落ち着けよ、どもつてるぞ。

「つい一日前に帰つて来ましたね」

「そそそそそうすか！ ありがとうございます！」

何に対してのありがとうござりますなんだろ？

「それよりラインラ！ なうにアレシアに触つてくれてんだあ！

アーザス！ お前もだつ！」

一方のガーン君はラインラ君田掛けて突つ込み、私の腕を掴むラインラ君の手を振り払つた後即座にアーザス君に突撃して腕を引き離す。

「いてえじゃねえか！」

「何をするんだ！」

二人はこの奇行に抗議の声を上げる。

「知るか！ くそつ！ 何て羨ま……けしからん！ ちよつとこつちに来なさ～い！」

「お、おい」

ガーン君に連れ去られてしまったラインラ君。少し離れた所で三人で円陣組んで、彼らは一体何をしているのだろう。

「ルール君。説明してくれませんか？」

状況がいまいち理解出来ないのだが。

「う、うん！ ここはボク達の秘密の遊び場なんだ！」

「へええ。そうなんですか。凄いですね」

「この大都市にこんな場所が未だに残つてたんだからなあ。

「へへへ～」

ルール君は秘密を自慢出来たのが嬉しそうだ。

「アーザス君。秘密の遊び場ですつて。面白そうな展開じゃありますか？」

「そう？」

「あーあ。せつかく機嫌が直つたのにガーン君の行動のせいでアーザス君のテンションが下がつちゃつたよ。

「おいお前ら。これからナデュルやんぞ。じつち来い円陣を解いたラインラ君が私達に呼び掛けて来る。

「うん」

ルール君は真つ先にラインラ君達の方へ駆けて行つた。

「やるの？ アレシアちゃん？」

「久し振りの事せすからね。楽しそうです」

「そつか……うん。じゃ、ボクも参加しよう」

私達もラインラ君達に合流すべく歩いて行つた。

「じゃあ誰がナデュルになるか決めようか

「いつせーの！」

全員がそれぞれグーやパー、チヨキを出す。グーは肉弾戦を意味し、パーは魔法、チヨキは剣を現す。グーはチヨキに弱いがチヨキはパーに負ける。しかしグーはパーに勝つ。じゃんけんみたいなものだが、勝ち負けの基準が異なる。

「私の負けですね」

「ちゃんと十回回るんだぞ？」

「分かつてます」

ナデュルは鬼ごっこに似た遊びで、じゃんけんをして負けた者がナデュルとなつてその他の者を捕まえる。ナデュル役の者は十回立つたまま回転してからその他の者を追い掛けなくてはならなくて、ナデュル役の者に足をタッチされたら捕まつたと判定される。捕まつた者はその場に仰向けになる。これを繰り返してナデュル役が全

員捕まえたらお終いなのが、捕まつた者もタッチされていない方の足で動き回る事は可能でそのハンデの下、ナチュル役にどこでもいいからタッチすると全員復帰となる。しかし、片足歩行時にナチュル役に捕まつたらその場でずーっと仰向け待機となるが、この場合でも誰かがナチュル役をタッチしたら復帰出来る。とまあ、こんな遊びだ。逃げる範囲は時によつて変わるが今回は無制限っぽい。私は早々に回転し終えると、方々に逃げ去つた者の内誰を狙うか見定める。足場は枯草が生えている程度だし、辺りは木々に囲まれている。木々の中に隠れるせこい手さえ使われなければ索敵は無問題。後はいかにして追いこむかだ。

まあ、やつてやうづじやないか。

太陽が天頂から沈み始め、雲が空を覆い始めた昼下がりのある小さな村落。枝が雪に包まれた広葉樹が林立する中、円を描くように木が切り倒され、その円の中に煉瓦造りの家が十数軒程軒を連ねている。人口八十人もいない、小さな村だ。

その小さな村落に茶色い革鎧を着込み、頭には鈍い銀色に輝く金属製のヘルメットを被つた、百人にもなるうかという集団がいた。彼らは槍や剣、弓などを携えており、集団の中央に銀色の鷲が描かれた旗がたなびいている。その集団の中心にいる黒い詰め襟の軍服を着た若い男が、支柱四本に革を上から張つただけの簡易なテントに身を寄せ、革鎧を着た男からの報告を聞いていた。

「これで、住民は完全に避難しました」

「了解した。これよりバルグ州境までの撤退を開始する」

以前より魔獣被害の急激な増加や新種の魔獣が現れるなど、ロミリア軍は魔獣脅威の増加に懸念を示してはいた。正規部隊での処理能力に限界が生じた為、予備部隊を戦力化までして対応に努めていたのだ。

だがしかし、それは急遽として発生したため当該区域は成す術もなく蹂躪されていった。警戒監視に当たっていた少数の部隊（つても一千兵規模はあつた）は敵にあつという間に飲み込まれてしまい、主力部隊に敵の存在が認知されたのは既に軍民合わせて数十万の死傷者を出した後の事であつた。当該地域を担当するロミリア北方軍は区域内に五万近い戦力を保有していたが、その半数が敵の侵攻の速さに組織として交戦する前に殲滅されてしまった。

現在第九歩兵軍団は甚大な魔獸被害を被つたゲルマフウリオ州の住民を退避させる為、軍の掌握出来た極僅かな範囲内における撤退の最後尾を守る役目を担つていた。その第九歩兵軍団に所属する第三小隊は、一応この周辺の住民全員が避難出来ているか確認をしていたのだが、その確認作業も終了し、小隊長であるこの若い男は撤退の命令を下そうとしている所なのだ。

しかし、テントに息を切らせて入つて来た灰色のローブに身を包んだ男の報告により事態は一変する。

「現在我々の北々東より魔獸の群れが接近中！ 会敵まであと十分以内！」

ローブに身を包んだ男の報告と共に、敵の接近を告げる太鼓の音が辺りに鳴り響く。

「敵の数は！？」

顔をさつと赤くした小隊長は灰色のローブの男へがなりたてる。

「不明です！」

「くそっ！ 伝令つ！ 第一中隊に会敵する旨伝達つ！ 部隊には北々東へ戦力を集中させろと伝えろつ！」

「はつ！」

小隊長の命令に、小隊付きの伝令が一人駆けて行く。

「カルつ！ 付いて来い！ 現場で指揮をする！」

小隊長は馬を休ませている場所へと歩き始める。

小隊長にうなづきを返したカルと呼ばれた灰色のローブの男は、雪の中を歩く小隊長の横に並ぶ。

「この森林地帯だ。魔法部隊はどこまで戦える？」

「敵目標は森林を高速で動いています。索敵魔法に頼つた遠距離攻撃は魔力の消費にしかならないでしょつ」

この索敵魔法と連結させての魔法の集中砲火がロミリア軍の得意とする戦力の効率活用の一端であり、小隊単位にまでこの単純であるが有力な戦法の行える軍隊は大陸上にはロミリアだけだ。

「それは弓兵にも言えるな。魔獸相手に接近戦か……厳しい戦いに

なりそうだ。よし、伝令。歩兵と歩兵の間に魔法師と弓兵を等間隔で十箇所に分散配置。お互いを援護出来るようにしろと伝えろ」

後ろに続く伝令の一人が肉体を魔力で強化して駆け出す。小隊長とカルの一人と、後に続く伝令は仮設の厩に着くなり馬に跨がつて馬を走らせた。

数十秒も馬を走らせるべく、円の形をしている村落の北々東に陣形を整えている小隊の歩兵、弓兵、魔法師の一群と命令を叫んでいる革鎧を着た老年の男の元に到着した。

第三小隊は小隊長の指示に従い、以下のよつてに展開していた。

成人男性一人分の長さはある長槍と兵士と同じ大きさの橙円形の盾を装備した歩兵部隊六十八人を数メートル感覚で四つに分け、その四つに分散した歩兵部隊の間に一人一組の弓兵が三組入り、さらに車輪が付いた連射式弩一基が弓兵一人に操作されて、陣形の左翼最前線に陣取る。魔法部隊九人は陣形の後方に纏めて配置されて、陣形は即座に円陣を組めるように右端と左端の歩兵部隊は中央二つの部隊より十メートル程後方にいた。最後に弓兵一組が狙撃用に自由に動くよう言いわたされ、辺りをせわしなく見回している。

つまり、第三小隊は村落が形成している円に沿う形で弓なり形の陣形を森林から百メートル程後退した場所に、横幅約五十メートル、縦幅約五メートルの広さで展開した形となる。

「副隊長！ オレは魔法師も分散しろと言つたぞ」

「小隊長お忘れですか、魔法師は集中運用した方が効率良く敵を倒します」

一般に小隊長は新米の士官であるが為に、実際の指揮は実戦経験のある古参の下士官に任せた方が良い結果をもたらすとロミリア軍では考えられている。第三小隊の小隊長はこの経験則に従う事にしたようだ。

「……そうか、ならない」

小隊員達は息を凝らし、魔獣を待ち受ける。それは徐々に近付い

ていき……突如として、木々の間からトカゲのような頭を持ち、その頭の下部から多数の触手を延ばしている体長二メートル程の醜悪な化け物、十八匹のフルーキシが姿を現した。

「弓兵、射撃開始！」

小隊長の張り上げた声に、八人の弓兵が陣魔法が施された矢を放つた。と同時に、連射式弩からも矢が発射される。

放たれた矢九本の内、七本が五匹のフルーキシに突き刺さり爆発する。矢には着弾時に、爆発する魔法陣が描かれていたのだ。金属製の矢じりが爆発して幾つもの金属片に分離。フルーキシの体内で金属片が暴れ回り、ズタズタにする。

触手や頭部を吹き飛ばされた五匹のフルーキシ。しかし無傷の十三匹は弓兵達が矢筒から矢を補充している間に宙を浮いて時速二十キロ弱　　自転車程の早さ　　で迫り来る。

そんな中、連射式弩は構わず次弾を発射した。この連射式弩は矢を現代の突撃銃のように箱型弾倉に装填し引き金を引く毎に一本の矢が発射される仕組みとなつており、矢を射出する弦が二十本予め引かれているので連続二十回の射撃が可能な代物だ。射撃手が引き金を引き、撃ち終われば次第装填手が弓に五キロもする弾倉を装填する。弦も二十回撃ち終わつたら弦のバーツを丸ごと取り外して交換可能なよう設計されており、撃ち終わつた弦を高速で引く為の機材も配備されているし、通常一小隊には弦の交換バーツが十個支給されるので、弾切れは早々起こしはしない。この方式で連射式弩は、弓兵と比べて数倍の連続発射が可能なのである。これだけでは持ち運びの不便性というデメリットに対するメリットが少ないとされたが他にも弓兵より射程も長いし、射撃手は狙いを定める事だけ考えればいいので命中精度も高い、何より弓兵より大きな矢が放てる。これらは弓兵向けに陣魔法を附加した短射程の矢を多数配備するより、弓兵には斉射時用に少数だけ陣魔法附加弓を与え、高威力長射程の弓兵には放てない大きな弓に陣魔法附加弓を優先して与える方針にロミリア軍を進めた。製造コストが高い陣魔法附加弓を

より強力に運用する為の措置であった。しかし、一つの車輪が付いただけの連射式弩はペロポネア戦時の主戦場であつた森林地帯や山岳地帯、砂漠地帯での運用が著しく制限され、さらに連射式弩が破壊された場合高威力の陣魔法付加弓がほぼ封じられてしまうせいに役に立つたとは言いがたい。ともあれ、平原での会戦では中々活躍してくれたのでこんなキワモノ兵器が一部に限り使われている。ちなみにペロポネア軍も魔法の使えない兵士への火力増強の為に野球ボール位の大きさの皮袋に金属片を詰め込んで、放り投げて地面に落ちたら魔法で爆発して金属片をまき散らす代物を投入したのだが、むしろちょっとした振動ですぐ爆発してしまうので兵士達にはロミリア軍よりも怖れられられたりしたとか。残念ながら、投石器や火砲の類の役割は魔法がになっている。

蛇足もそこまでにして、弓兵が一回目の射撃をするまでに連射式弩は四回の射撃を終えていた。

フルーキシの中でも歩兵部隊の槍林に到達出来たのは僅か一匹。その歩兵部隊に肉薄したフルーキシは十本ある触手の内、先端が鋭い一本で突き刺そうとしてくる。だがそれと同時に三人の歩兵も槍を前に突き出す。一本の触手は盾の表面に直撃したが表面の鉄板を僅かに凹ませたに過ぎず、一方突き出された三本の槍はフルーキシの頭をそれぞれ貫いた。フルーキシの灰褐色の肉体から、緑色の体液が槍の穂先にネチャリと付着する。頭を潰されたフルーキシは、地面に落下し事切れた。

「カル。これで終わりか？」

「おかしいですね……索敵魔法ではもつといった気もしたのですが」

「その時、伝令の一人が叫んだ。

「小隊長殿！ 後ろです！」

その言葉に背後を見ると、村落の家々の隙間から一十匹以上のフルーキシが見える。

「つ！ 魔法攻撃、開始せよっ！ 家ごと焼き払うんだ！」

「小隊長！ 前方からもおよそ三十の群れです！」

「円陣組め！ 伝令！ 中隊にフルーキシ五十以上に包囲されたと伝達！ 急げつ！」

「はつ！」

伝令が走り出したのと同時に、魔法部隊が数十発の火球を村落の家屋十数軒に着弾させた。

その火力に満足し、小隊長が前方に視線を移すと森林からワラワラと数百以上湧き出て来るフルーキシの群れに歩兵達が蹂躪されるのを目の当たりにした。

小隊長は、フルーキシが自分に向かつて触手を振り上げた瞬間を見たのを最後に、永久の眠りについた。

第三小隊が壊滅したのと時を同じくして、その上級部隊である第一中隊にもフルーキシの魔の手が振るわれていた。第一中隊は隸下にある第三小隊の到着を待つて、見晴らしの良い街道沿いの雪原に駐屯し、円陣を組んでいた。だが、そこを三百六十度フルーキシに包囲されてしまった。第一中隊五百十二人に対して、フルーキシの数は三百を数える。激戦となつたが槍を三百六十度全面に向け、さながら針鼠のような体勢を取つた第一中隊は、弓兵五十人が一斉に放つ爆発矢や魔法師四十二人の大規模面制圧火力の支援もあり、何とか乗り切つた。

しかし行軍中であつたならば、たちまち壊滅していただろう。第一中隊は運が良かつたのだ。後に、第一中隊は上級部隊である第九歩兵軍團に合流する為に移動した所を襲われたと伝令を寄越し、消息を絶つ。

日が沈み、闇が大地を覆い隠そうとする中、人気のない都市の中

央部に一棟だけ照明の付いた建築物があつた。その建築物はゲルマフウリオ州とゲルマスペリオ州の州境から十キロ程の場所に位置するゲルマフウリオ州内の人口三万の町の庁舎で、煉瓦造り二階建ての立派な建物だ。そしてこの建築物の一階に、第九歩兵軍団の軍団本部が居を構えていた。

その第九歩兵軍団の軍団本部は喧騒の最中にあつた。軍団本部にいる百六十七人の軍人達は各部隊から届く情報整理や、各部隊への指示、作戦の立案、物資の補給などの対応に追われるのだが、それが他人の出す声より大きく声を出して自分の発言を通そうとしてさらに発言が聞こえにくくなる悪循環が発生していた。普段ならばこの悪循環を止める立場にいる上官達も、隸下部隊から届く数々の報告に顔を青くするばかりで役に立たない。軍団のトップである軍団長もまた、軍団に一つしかない魔力話機にしがみついて北方軍司令部と声を張り上げている。

「もう既に六個中隊と連絡が途絶えて、ここを守っている残りの四個中隊もフルーキシ数百に襲われてんだよっ！ 増援がないと撤退すら出来ん！」

軍団長である髭面の中年男性が黒の軍服に身を包み、黒い箱から延びる受話器に怒鳴るように話し掛ける。

『近隣にいる第十二軍団、第六軍団も襲われているのは同じだ』

一方、安全圏にいる司令部の男はいたつて冷静だ。その冷静さに、軍団長は苛立ちを募らす。

「ふざけんな！ こつちは六個中隊三千一一名が行方不明なんだぞつ！」

『とにかく。今第二十七歩兵軍団と第二十八歩兵軍団が北上している。これが州境に到着するまでは応援に回せる部隊はない。何とか近隣の部隊と協力してくれ。辛抱しろ、辛いのは何処も変わりないんだ』

「くそつたれ！ おい、通信手！ 第六軍団のハーヴリーに繋げ！」

軍団長は悪態をつくと受話器を置き、それを確認して通信手は魔

力話機の横に付いたダイヤルを操作する。調節を終えた通信手は受話器を軍団長に手渡した。

「ハーヴリー！ お前の第六軍団を応援に寄越してくれ！」

『フツイ。悪いが私の第六軍団は州境防衛の任務で分散しているから無理だ。三時間もすれば第二十七歩兵軍団が来るんだが、待てないか？』

「三時間だつて！？ その頃にやオレはあの世にいるぜ！ 一個位回せないのか？」

『無理だよ。予備すらかき集めてやつとこ持たせてるんだ』

「そうだ！ せめて特殊戦歩兵を百人位寄越せよ。そつちは軍団扱いだからいるんだろ？」

フツイ軍団長はこの時、背後から上がる人の声が恐怖を帯びている事に気付いた。後ろを振り返ると、割れた窓ガラスから一匹のフルーキシが侵入し、窓を背に仕事をしていた一人の男の首から上を口に含んでいる。

『駄目だ！ あいつらがいないとこっちがやられてしまうよ！』

受話器を手放し、フツイ軍団長は思わず腰に手を延ばしたが何もない。そう言えば軍団長になつてから武器を持つていなかつた事をフツイ軍団長は思い出した。

『おい、聞いてるのか？ 特殊戦歩兵は駄目だが、騎兵なら出してもいいぞ』

フルーキシは続々と室内に入り込み、武器を持たない軍人を血祭りに上げていく。辺りには悲鳴と血溜まりが充満する。

『おい、どうしたんだ？ 様子がおかしいぞ？』

人の声がする黒い箱に一匹のフルーキシが興味を持ち、近付く。グゲルググ……。ハーヴリー軍団長の耳に、聞き慣れた嫌な鳴き声が聞こえた。

『何があつた！？ 答えろ！ おい！ 大丈夫か！？』

フルーキシは耳障りな叫び声に気分を害し、黒い箱へ触手を振り上げた。

「フツイ！ フツイーーっ！！」

普段温厚な軍団帳が突然叫びだした事で、第六軍団本部は一瞬の静寂に包まる。

「軍団長、第九歩兵軍団に何かあつたのですか？」

恐る恐る一人の幕僚が声を掛ける。

「フツイ軍団長との交信中に……あの化け物の声が聞こえて……多分、第九は壊滅だ……」

あのペロポネアとの戦いに勇敢な働きを見せたフツイ軍団長率いる第九歩兵軍団の壊滅の知らせに、軍団本部の面々は衝撃を隠せない。動搖する者、憤激の余り歯を噛み締める者、悲しみに涙を流す者、恐怖に崩れ落ちる者……。

「落ち着くんだ皆！ 私達がしつかりしないと部下の命に係わるんだぞ！」

ハーヴリー軍団長の一喝によつて一同はそれぞれのやるべき事に取り掛かり始める。敵は強大なのだ。感情に流されていてはすぐに殺されてしまう。

散発的なフルーキシの群れを撃退しつつ、増援を待つこと二時間。そろそろ増援が到着してもいい頃合いだ。

しかしここで最大の試練にぶち当たる。

どんよりとした霧囲気の軍団本部に、隸下の第八中隊とエーン国土守備隊の混成部隊から緊急通報が入つた事から試練は始まった。

「第八中隊より通報！ 魔獣の群れ八千以上から猛攻を受けている

！ 火力支援を要求するつ！」

「了解。魔法中隊に支援を命じろ

「はっ！」

ロミリアの歩兵軍団と軍団には大きな違いがある。それは歩兵軍団が小隊規模の魔法部隊しか保有していないのに対し、軍団には中隊規模での魔法部隊が存在することだ。小隊規模の魔法部隊の主な役目は目視射程圏内にて中隊規模の歩兵部隊の火力支援を主任務とするのだが、魔法中隊は射程数十キロをカバーする長遠距離射程攻撃を主任務に据えている。

この戦法はダキアが純研究目的で開発した重量数百キロもする魔力話機にロミリア軍が着目し、数十キロクラスにまで小型化した事から生まれたロミリアにしか出来ない恐るべきパワーなのである。

従来の攻撃用魔法は目視による攻撃しか行えず、距離を取つても精々数キロの範囲内までしか攻撃が出来なかつた。遠距離と言うと真つ先に思い浮かぶのが転移魔法ではあるが、転移は極めて高等な魔法で一部の特殊な人間にしか扱えず魔力消費も激しい。大人数で陣を組めば転移も確かに可能だが、前述の魔力消費の激しさは陣を組むのに参加した平均的な魔法師を（距離にもよるが）転移魔法二、三回程度の使用でダウンさせてしまう程だ。

そこで、魔力話機が登場するのである。魔力話機で前線の部隊が火力支援を求め、前方管制官が敵にポインティングを魔法によつて施せば、数十キロ離れた場所からでも大規模火力をデリバリー。この戦法をこの世界の砲兵師団とも言える魔法軍団およそ七千兵で行えば、射撃命令から一分以内で一つの街を廃墟に変えるのも容易いだろう。この大陸においてこのような長距離通信能力を全軍単位で採用している軍はロミリアを除いてない。という事はロミリア軍と相対した軍は一方的にロミリアの火力を浴び続けなくてはならないのである。これに対抗可能なのはこの大陸で唯一飛行戦力を保持しているペロポネア軍だけであろう。魔力話機など使わないで、テレパシーなり声を長距離に飛ばせばいいと考えた者もいたがこの世界の魔法は目に見えない物を再現すると、どうしても高等な代物にな

つてしまい、一部の特殊部隊を除けば採用される事はなかつた。

第八中隊とエーン國土守備隊は川を挟んで防禦陣地を構築し、対岸から迫るフルーキシの大群へ向けて持てる限りの戦力を叩き込む。兵士達は薄く雲掛かつた夜の闇の中、足首をすっぽり覆う雪に体力を奪われながらも無数の火球、投げ槍、弓を眼前に迫るフルーキシの大群に投射する。対岸の雪が、大地が、フルーキシの肉片が空中に舞いあがり、ただでさえ良好とはいえない兵士達の視界を悪くする。そして、彼らの猛攻によつて出来た仲間の死体の山を乗り越えて、飛び散つた血霧、土埃、雪片の中から数千のフルーキシが眼前に現れた。その絶望的なまでの物量差でも彼らは諦めずに火球を放ち、投げ槍を投擲し、矢を射続ける。だが、目視で八千以上、実数にして一万を数えるフルーキシの行進はペースを緩めずじりじりと近寄つてくる。

彼らの火力ではこの進軍を止める事など出来なかつた。どだい、度重なる戦闘で戦力は三千を切つっていたのだ。ついにフルーキシの先頭集団が渡河を終え、その鋭い触手が一人の兵士の持つ楯を貫き彼の手から奪い取る。彼は身を守る術を奪つた。だが彼は空から近く強大な力に助けられる事となる。

「全員伏せろっ！」

楯を奪われ目の前に迫るフルーキシに恐怖していた一人の兵士は、上官の声に反応し咄嗟に倒れこんだ。

と、同時に空から殺傷半径三百メートル、致死半径五十メートルを誇るロミリア共和国の面制圧上級魔法【ヴルカーノ】が十二発空からフルーキシに降り注いだ。殺傷半径とはその範囲内にいた場合運の悪い者は死に、運の良い者は怪我を負う範囲を現し、致死半径は範囲内の人間をほぼ確実にあの世へと送る。この攻撃により、縦千二百メートル、横九百メートルの範囲が殺傷半径内に入った。着弾によつて辺りに響き渡つた筆舌にし難い爆音が、兵士達の聽力を一時的に麻痺させる。

上官の声に助けられた、楯を失つた兵士はつい閉じてしまった目を開くと、そこには目の前のフルーキシが無傷で立っていた。

「うあわあああ！」

彼は未だ持つていた槍で訓練の賜物である高速の突きをお見舞いする。その突きは速さこそあつたものの、狙いが全く定まっておらず、フルーキシの触手の一本に刺さってしまった。これではフルーキシを仕留められない。彼の努力は実らなかつた。彼は死を覚悟した。

「ん？」

彼が小突いたフルーキシは何の抵抗もせず、あっさりと倒れた。よくみれば、フルーキシは背部をごつそりと抉り取られていた。

先ほどまで、圧倒的な物量で迫つて来た怪物達に現在その面影は見られない。彼の目の前に見えるのは、四方に散らばるチリチリと焼けている大小様々な肉片の塊だつた。獲物を前に殺到していたフルーキシの大群は魔法部隊放つた魔法のキルゾーンの中にまんまと入り込んでいたのだつた。

第八中隊とエーン国土守備隊の混成部隊は既に生き残つた僅かなフルーキシの掃討に移る事となる。

しかし、彼らが火力支援を受けている間に他部隊にも敵が迫つていた。第六軍団本部の魔力話機に次々と火力支援の要請が届く。

「第四中隊から火力支援要請！ 敵数およそ六千！」

「第二中隊、二千以上の魔獸と会敵！ 火力支援求む！」「

「魔獸の群れ五千二百と交戦中！ 第十中隊が火力支援を要請しています！」

「くそつ！ 魔法中隊が第一射を放つまで後何分かかる！？」

「残り五分四十一秒！」

魔法中隊は全力での火力支援を行うと、七分のインターバルを挟まないと第一射が放てないのである。

とりわけ第一中隊の戦況は悪かつた。

「絶対にあのクソッタレ共を近づけるんじゃないぞっ！」

小隊長の罵声と共に放たれる二十三本の投げ槍は全面から突っ込んでくるフルーキシの群れ数十に見事命中するも十三体を地に落としただけで全体の勢いは止められない。

「チクショウ！ 白兵戦用意！ テメエら死ぬなよ！」

第二中隊を襲ったフルーキシの大群は数こそ少ないが、第一中隊が陣地をその場しのぎで構築したため、なだらかな丘を背にしていたのだ。この失敗は痛かった。丘が死角となつて後方の様子を把握しきれなかつたのだ。それにより後方からフルーキシが浸透してきて奇襲を受け、貴重な魔法部隊は一緒にいた中隊司令部と一緒になく全滅。指揮系統の壊滅により第一中隊隸下の各小隊は各個撃破されていった。

この場には一個小隊にすら劣る戦力しか残されていなかつた。

否。

もう一人、紫髪の少女がいた。いや、突如現れた。

「……邪魔」

その少女が一言呟くと、フルーキシはあらうことか同士討ちを始めた。数千いたフルーキシは徐々に数を減らしていき、やがて数十の群れにまで減つた所を紫髪の少女が魔法で全て焼き払つた。

「……あなた達、大丈夫？」

少女の後ろではフルーキシの群れに止めを刺した炎が未だ威勢よく踊つている。

「あ、ああ……」

「……そつか。良かつた」

生き残つた第二中隊の面々に少女は微笑みかける。その後、辺りをキヨロキヨロと見回し出す。

「……来ない」

少女の探し物はここには無かつた。実の所、探し物はこの時自宅で平穀な時を過ごしているのだが、それを知る術を彼女は持つていなかつた。少女は落胆し、しょぼんと下を向く。

ちょうどその時、空から一人の女性が飛び降りて來た。

「何だ。もう片付いたのか」

女性はだらしなく黒い詰襟の軍服を着、腰には剣を穿いている。

「……ミーシャ。危ないよ？」

少女はミーシャの行動を注意するも、ミーシャはそれを意に介してはいないうようだ。

「私を誰だと思っている。魔法戦士だぞ？ こんな魔獣共に後れを取るものか」

「……そう。じゃあ、手伝ってくれる？」

「無論だ。全て斬り払ってくれよ！」

一人は空から飛来した二頭の竜に乗つて、第一中隊の生き残り達の元から去つて行つた。

第六軍団本部には陰鬱な空気が流れていた。第一、第七中隊からの応答が途絶え、その他の隸下部隊も戦況は目も覆わんばかり。頼みの綱の魔法中隊も射撃目標の情報がなければ役立たずだ。そこに第四中隊からの通信が入る。

『こちら第四中隊だ。我々は竜に救われた』

「……は？ 今、何と言つた？」

軍団本部の通信手は思わず聞き返す。

『竜だ。竜がいきなり現れて、フルーキシを焼き払つた。その後、フルーキシは同士討ちをし始めた。だから……だから、そう、我々は無事だ。助かつた』

第四中隊からの通信を皮切りに次々と隸下の中隊から不可解な報告が上げられて来る。

『嘘じやないんです！ 空から魔法剣士の方と竜が降りて来たんですよ！ え！？ 近衛が来てくれたんじやないんですか！？』

『こちら第九大隊。大型の白龍と魔法師一名による支援を確認。戦線は持ち直した。ん？ そのような支援はしていないと？ だが現に……』

その後、二個歩兵軍団の増援が到着した事により、防衛線の構築は完了された。

「疲れましたね」

「そうだね。でも、楽しかったよ」

ラインラ君達とはつこさつき別れ、アーザス君と一緒に私は帰路に就いている。久し振りに子供に返つて遊ぶのも以外と悪くなかつた。動き回つてストレスが大分発散されたかもしれない。たまにはこういうのもいいよね。

「もうすぐ家に着きますね」

太陽ももうだいぶ傾いてる。またお母さんから不穏な咳きを聞かされるかもしね。

「あつという間だつたなあ」

私があの発言の真意について考えよつとしていたら、ふいにアーザス君がぽつりと呟く。

「何がですか？」

「ん。遊んでた時間がさ」

「確かに、つい時間を忘れちゃつんですよね」

楽しい事程、時間は短く過ぎちゃうんだよなあ。

「じゃあ、ここまでだね」

私達はアーザス君の家の前に到着した。明るい時分には白い壁が目に映えていたが、この時間帯だと紺色に塗りたくられているように見える。

「今日は誘つてくれてありがとう。アレシアちゃん」
日が暮れて表情は見えないけど、もし本心からそう思つてゐるなら嬉しい。

「こちらこそ、一緒に遊べて楽しかつたです」

アーザス君はそのまま私に背を向け離れていつたが、家の扉の前

で立ち止って振り返る。

「あ……明日も会えるかな?」

そんなおずおずと尋ねる事もないの?」。

「特に予定もないですし、会えるんじゃないでしょうか?」

「そつか」

「はい」

アーザス君は再度振り返り、家の戸を叩いて中の人へ帰つて来た事を知らせる。少しの間を置いて扉は開き、デウラテさんが姿を現した。デウラテさんは手のひらを上にかざして光球を浮かせている。そんなに強くはない光だけど、デウラテさんとアーザス君の周りはぼんやりと明るくなつた。

「ただいま、お母さん」

「おかえりなさい、アーザス。アレシアちゃんも遊んでくれてありがとね」

「こちらこそ楽しかつたです」

「アレシアちゃん、また明日!」

「さよなら、アーザス君、デウラテさん」

今度は私がアーザス君達に背を向け、我が家への帰り道に就く。「待ちなさい、アレシアちゃん。アーザス、アレシアちゃんを見送つてあげなさい」

「いいですよ。すぐ近いです」

「ここから私が家に入るのが見えるのに、そんな手間かけなくともいいじゃないか。」

「なーに言つてるのアレシアちゃん。アレシアちゃんなら二ロメルの間に一回は拉致られちゃうわ」

「それないですよ」

「いくらここロニアの治安が悪いって、五メートル毎に子供が拉致されちゃお終いだ。」

「さ、行こう。アレシアちゃん」

アーザス君もその気なの? まさか真に受けたりやつたんじゃない

だらうな。ま、いつか。別に害もないし。

「行つてきます、お母さん」

「頑張りなさいアーザス！」

何やら気負いこんでいるけど、私の家とアーザス君の家は隣だからね？

当たり前だが何の支障もなく我が家の前に到着する。が、アーザス君は何を警戒しているのやら、辺りを見回すのに忙しない。

私はアーザス君を気にせず戸を開けると、玄関天井に設置されている魔力灯の橙色の輝きが出迎えてくれた。ああ、やっぱ人工の明かりを見るとホッとする。何でこんな気持ちになるんだろう。帰つて来たと体が実感するのかな。

「アレシアちゃんの家、鍵掛けでないの！？」

アーザス君は心底驚いているが、何でだらう。結構我が家にアーザス君は来てたように思えるけど今まで気付かなかつたのか？

「我が家は私が帰つて来るまでは施錠しないんですよ」

「それなら、アレシアちゃんが帰つて来たらちゃんと鍵掛けるんだよね？」

そんなの当たり前だらう。施錠しないと何があるか分からぬ。

「勿論です」

「それなら安心だね」

私の事を心配しているのか分からぬけれど、ちょっと反応が過敏だと思う。いちいち生死に関わるような驚き方をされたり九死に一生を得たような笑みを浮かべたりされると、じつちもびっくりするんだよね。

「おかえりなさい！」

私達が家に入らず玄関前で鍵談義をしていると、お母さんが食事室から駆け寄つて來た。私の肩を両手で掴み、がつちりホールドして来る。

「ああもう、随分と汚れてるわね」

ナチュルのゲームルール上、土が付いちやうのは仕方ないとはい

え白い服だと汚れが目立つなあ。お母さんが洗うのだと考えたら申し訳ない気持ちになる。

「すみません」

「この服は後で私が洗濯しようかな？ でもお母さんの洗濯テクの高さには敵わないし、余計なお世話になりかねないんだよな。

「いいのよ、謝らなくて。もうすぐご飯できるから、その間にお風呂に入つて来なさい」

「分かりました。アーザス君、見送りありがとうございました」

見送りの意味はともあれ、心意気には感謝を示したい。

「アーザス君！？ き、気付かなかつたわ！」「めんなさい…」

「気付いてなかつたんかい！？」

「ボクは気にしてません。アレシアちゃん、また明日」

本当にかなか、さつきまであんなにオーバーリアクションしてたのに。アーザス君って意外と敏感なんだね。

「はい、明日も会いましょう」

今度はちゃんと会わないと、彼の心を傷付ける恐れがある。どうせこれから予定も決まっていないのだし、この社交辞令のようないい別れの挨拶も履行しておくべきだらう。

ともあれ、先ずは体の汚れを洗い落とすのが先決だ。

私がシャワーを浴び終え食事室に入室すると、私以外は全員が席に着いていた。

「さつぱりしたかね」

お祖父さんが声を掛けてくる。

「はい」

流石に長時間動き回つていたからね。シャワーだけじゃ少し物足りない気分もあるが大分すつきりした。でも、湯船にも浸かりたいと思つてしまふのは日本人だからだらうか？

「外で遊ぶのは楽しかつたかい？」

「はい」

「そりかそりか。で、誰と遊んだんじゃね」

「ラインラ君とアーザス君とルーール君とガーン君とドウス君の五人と遊びました」

「ほうほう、それは良かった」

「何をして遊んだの？」

今度はお祖父さんに代わってお母さんからの質問。

「ナデュルです。」これだけをお皿からずっとやり続けてました」

思い返すと、同じ種目延々やつてた事になる訳だ。よく私飽きなかつたな。

「ナデュルか。懐かしいわねえ」

その時、玄関の扉を叩かれた音が聞こえた。慌てているのかせつかちなのが、激しく連續でドアノックカーを振り下ろしているようだ。夜だというのに迷惑な訪問者。

「様子を見て来る。皆は食事を続けてくれ」

お父さんが立ち上がり、食事室から出て行く。

「こんな時間に何の用かしり」

「さて、何じやろうかのう」

私達が席を立たずにだらだら喋つてたら、何やら緊迫した表情のお父さんが戻つて來た。

「すまない、急ぎの用事が出来た」

「何があつたの？」

「……何とも言えないが、当分家に戻れるか分からない。マリー、荷造りを頼めるか？」

「分かったわ」

お父さん位のお偉いさんが夜間に緊急招集を受けるとは、軍務省で何が起きたのだろう？ 魔族のトップは潰したから大した事じやないと思いたいけど、魔族が暗躍しなくとも人間は争うからな。

「アレシア。心配せんと大丈夫じゃ。アレシアのお父さんは優秀じ

やからな

「はい」

お父さんとお母さんのいなくなつた食事室は少し物静かになつた。それを打ち消そうとしてかお祖父さんが話し掛けたが、私はお父さんの事が気になつて仕方がなかつた。

食事を終えた私は台所で食器をディーウアと一緒に洗つていた。お母さんはお父さんの見送りに時間を取られたのでまだ食事の最中だ。

「ディーウア」

私はタイル張りのシンクの中の洗い残しの食器類から手を離し、ディーウアに話を切り出す。

「何で御座いましょうか？」

「衛星網の方はどうなつていますか？」

もし完成していなくとも一部が使えるんなら、情報収集が出来るんだけど。

「現在の所、衛星網構築の諸条件計算をしている所で御座います。衛星の稼働は後四日待つて頂けませんか？」

「分かりました」

仕方ないか。ここは地球ではないのだから、色々と勝手の違う部分があるんだろう。

「何か御不安が？」

「お父さんの招集の件、どう考えますか？」

「何か不審な点が御座いましたでしきうか？」

ディーウアには疑問に感じる部分がなかつたらしい。だが、私だけ具体的に不審な点を示せと言われても答えられない。杞憂に過ぎないと私だつて思う。事務手続きの問題に過ぎない可能性だつてあるんだしね。

「心配のし過ぎで御座りますよ」

「なら、いいんだが。どうにも嫌な予感がする。

「偉いわアレシア、ありがとうね。でも、子供はそろそろ寝る時間
よ。後はお母さん任せなセー」

台所に食事を終えたお母さんが入って来た事で、『ティーウィ』との
会話は中断されてしまった。

「もうすぐ終わりますから

「いいから。お母さんのやる事がなくなつちやうじやない」

そこまで言わると断れない。どうせまつり日しかないんだし、
お母さんに任せても負担にはなるまい。

「じゃあ、私は先に寝てます

私は台所を後にした。

私が目を覚ますと浴室のベッドで寝ていた筈なのこ、お母さんこ
抱きすくめられていた。

「あれ？」

周りを見回したが、ここは間違いなく私の部屋。という事はお母
さんの方が私の部屋に入り込んで来たのか。窓からはまだ太陽の光
が差し込んでいないところを見ると、未だ夜なのだろう。

「……あら。アレシア、起こしちゃつた？」

「お母さん？」

吐息に混じるアルコール臭。これは酔つているな。

「駄目でしょうアレシア。自分の部屋で寝ちゃ。ちゃんとお母さん
のベッドで寝なさい。アレシアが自分の部屋でなんて寝るから、お
母さんアレシアの部屋に来ちゃつたじゃない」

「……はあ」

私も寝覚めだから何とも言えないが、多分お母さんは理不尽な事
を言つてこるのでないが。

「さ。お母さんと一緒に戻りましょ」

私はお母さんに抱っこされ、自室から夫婦兼用の寝室へと移送された。もう何かどうでもいいや。お休みなさい。

「あれ……あ、そうか」

私は昨日の夜の間に移動していたんだつけ。寝る時は自室だったのに、起きたらお母さんとお父さんの部屋にいたんで一瞬混乱してしまった。

ベッドから抜け出し部屋を出る。階段の窓から今日の天気を見てみると、空全体が雲に覆われ朝だというのに何処か薄暗かつた。雨でも降りそうな雲行きだ。そのまま階段を下りて居間に入ると、新聞を慌てて畳み出すお祖父さんとお母さんの姿を叩撃する。何と言うか、あからさまに怪しい。

「何があつたんですか？」

「アレシアには関係の無い事よ」

「なあに、子供にはつまらない大人の問題じやよ」

これ、自白したようなものだよね。まあいや、先ずはパンヌを取りに行こう。

「そうですか。私はパンヌ屋さんに行つて来ます

「気を付けてね、アレシア」

「はい」

ふふふ、新聞に載る程度の情報なら大抵の大人なら知つてゐるつて事だよね。パンヌ屋さんで、ちょちょっと世間話でもすれば今日の話題のニュース位分かつてしまつたのさ。

情報を得るべくパンヌ屋さんに入店する私。鈴の音を鳴らし店内に入ると、案の定大人達が立ち話をしている。だが、私の入店と共に皆口がつぐんでしまった。困ったな、どうしよう。まあ先ずはパンヌを受け取ろう。店の奥から顔を出して来たモファラスさんの元に近寄り、声を掛けた。

「おはようございます、モファラスさん」

「よつ、今日も来たか。ほれ、貸しな」

モファラスさんは籠を持つてすぐに店の奥へと引っ込んでしまう。さて、この待ち時間の間に聞き出せるだらうか。

「あらあらまあまあ、アレシアちゃん。お使い？」

仲のいい近所のおばさんから話しがけてくれた。ありがたい。

「はい」

「偉いわねえ。ウチの子なんて朝はいつもお寝坊さんよ」

「あたしゃ情けないよ、ウチの馬鹿息子の怠け具合と違つてどうだいこの子は！ 見上げたものじゃないか！」

「うーん、会話の輪の中に入る事は出来たけどどうやって新聞の内容について聞き出せるかな？ はつたりでもかましてみるか？」

「そう言えば、今日の新聞見ましたか？」

「という事で、餌を投下。

「ああ……」

「そりや、見たさ」

食いついてはくれたんだが、新聞の話題になつて一気に空気が重くなつたな。よっぽど酷い事が書かれていたのだろう。問題はその中身が何なのかだ。

「まさか、ゲルマフイリオ州が魔獣にやられて死傷者数百万名も出るとはね。ふん、軍は一体何をやっていたんだか。」

「何だつて！？」

「ちょっと、おばあちゃん！ 子供に聞かせる内容じゃないでしょう！」

「何さ、「この位そこらを歩けば自然と耳に入るよ。黙つてた方が子供に毒だよ」

おつと、動搖が目に見える形で表れてしまったかもしない。新闘の内容を漏らしたホーエル家のお婆さんが叱られてしまった。

「アレシアちゃん。気になくても大丈夫だからね！ 軍にいるアレシアちゃんのお父さんが魔獣なんて全部やつつけちゃうからね！」「そうさー！ ロミワアの軍は世界最強！ 魔獣なんかぼっこぼこだよー。だから安心しな！」

そして、周りの大人達から続々と入るフォロー。これに応えない訳にもいかず、曖昧に微笑んでおく。そしたら何故か周りの大人達の中から固まつたり、顔を赤く染めだす者が現れる。何なんだ。

「お嬢も大変だな。ほら」

「ありがとうございます、モファラスさん。では、また明日」

「ああ」

そこに上手い事モファラスさんが現れてくれたので、パンヌ屋さんからは早々に逃げ出した。

朝食を終えた私は自室に籠もり、ゲルマフイリオ州方面に無人機を展開する方法を考えていた。

未だ衛星網の構築が成されていない以上、私自身が出張る訳にも行かないし、現地の情報を知るには無人機を【物質創造】して送り込まないとならない訳だが、その操作には片眼鏡装着式統合多目的指揮統制及び情報表示装置（VER1・0）『Monocle』

Oun ted joint multi - purpose Command control and information display version 1.0』、略してモノクルが必要なのだ。衛星網が完成していてもこれは変わらないのだが最大の違いは命令の伝達方法だ。

衛星網が構築されていれば、モノクルを付けた私から衛星を中継して無人機に命令を下せるのだが、衛星網がない場合直接私と無人機が結ばれる。まあどちらにしろ命令は下せるのだが、無人機が超遠距離を飛翔している為私は強力な魔力を使用しなくてはならない。すると、お母さんやお祖父さん、何よりお父さんに見つかってしまう。我が家は魔法の扱いの上手い人間ばかりで困ったもんだ。

となるとプログラムに沿つた飛行をさせて行きと帰りの僅かな時間のみモノクルを【物質創造】させなければならぬのだが、それだとちゃんと情報を持つて帰つて来れるか不安なのである程度の数を飛ばさなくてはならない。確かゲルマフィリオ州の広さがおよそ二十五万平方キロメートルで、ロミリアからの距離は一番遠い場所で一千キロはあるから、燃料事情を考慮しないとしてもなるべく早く帰つて来て貰うには……州境付近を軽く調べてすぐ帰つて来るのに一機、深く調査するのに一機、その他に二機あればいいか。それで最短四時間二十分は待たなくてはならないのか。遅いな。でも仕方ないか、高速で飛翔する偵察機なんかないもの。

さて、と。私は自室の窓を開け、空を見上げる。都合のいい事に曇り空だ。これならロミリア市民に見られる心配もないぞ。我が家には魔力の扱いに長けた人がいるので、気付かれないようこつそりモノクルを【物質創造】し、耳に装着。久し振りにこの緑色の画面を見たなあ。モノクルに高度な指令を任せ上空にRQ-4”グローバルホーク”を……て、あるじゃないかSR-71が！ あれなら

「マッハ二で飛べるぞ！ 操縦は機械兵に任せればいい！ よし、SR-71 “ブラックバード” 出撃！」

あれから、四十分。そろそろ出撃させたブラックバード一機の内、一機が帰つて来る頃だ。この一機の内一機には州境付近の偵察を、もう一機には州内をくまなく偵察して来るよう命じてある。操縦する機械兵はそれなりに状況判断が可能なAIが積まれているし、有用な情報を集めて来てくれる期待する。モノクルに表示されている光点もじりじりと私の元へ接近中だ。

「アレシア、入るわよ」

お、お母さん！？ くう、よつによつてこんな時につ！ ノックの音と共に扉が開きだす。

「？ どうしたの、アレシア？」

「な、何がですか？」

馬鹿な、もうモノクルは消したし、疑問を持たれるような点はない筈。

「慌ててるよつに見えるけど？」

態度自体に疑問持たれてる！？

「そんな事ありませんよ？」

「寒いのに窓開けて何してるのよ？」

「ちょっと空気の入れ替えをしようと思つたんです」

「何とか誤魔化せたか？」

「そうなの」

「はい、それより何か用ですか？」

話題もさつさと変更してしまえ。疑念を抱かせたら負けだ。

「サハリアちゃんが訪ねて来て、居間でアレシアを待つてゐるわえー、来るなら来るでもつと遅く来てくれれば助かつたのに。」

「分かりました」

やむを得ない。私はお母さんと一緒に居間に向かった。

「アレシア！」

「うわ

居間に入るなりお姉ちゃんに突撃された。

「会いたかったですわ～！」

そして、同時に抱き締められる。

「ちょっと、何なんですかいきなり

後少しど情報が得られたにも関わらず、妨害されていつまは不機嫌なんだ。そういう行為は慎んで欲しいね。と、表情で遺憾の意を表明する。

「ああ、怒った顔もいいわあ

駄目だこりや。日本人なら表情から察してくれたろう。

「お母さん～」この人何とかしてくれませんか！？

困った時の親頼み。

「え？ あ、ああ、そうね。サハリアちゃんよくやつたわ

「お、お母さん？」

何を言っているんだいお母さん。お姉ちゃんの行為の何処によくやつたと言える部分がある？

「サハリアちゃん。ようやく私達の願いが叶つわね

「やつと、ですわね……」

え、何なの？ この流れ。

「一体何が始まるんです？」

「よくぞ聞いてくれましたわ！ 私とお母様はアレシアがない間、アレシアにどんな服装をさせるか想像してお互いを慰めあつていたのですわ！」

「そして今日、その空想が現実化するのよ～」

私がいない間この一人は何やつたんだ……色々とおかしいだろ。

「先日、体の採寸は済ませたから、後は着せるだけなのですわ！」

「冗談じゃない！ こんな事に時間を費やしていられるか！ わた

と逃げるぞ！

抱き締めた位で私の動きを封じる事は出来ない。首に回されたお姉ちゃんの両腕に私の手を突っ込んで隙間を作り、しゃがむ事でお姉ちゃんの拘束から抜け出す。そして一直線に居間から廊下に出て扉へと駆け出す。

しかし、扉を開けた先には“ディーウア”が立ち塞がつていた。

「ディーウア、裏切るんですかーー？」

お前は私の言う事を聞くべきじゃないのかーー？」

「偶には親孝行をするもので御座いますよ？」

「……、仕方ない。少しだけ付き合つか。

あれからもう一時間は経過しただろつか。衣装の着せ替えという行為に時間を費やす事を無理矢理させられている私だが、楽しげに動き回っている筈のお母さんが時折表情を陰らせている事に気付いた。それに気づいた私はさらに注意して観察してみると、お姉ちゃんもお母さんの顔から笑顔が消えたのを見た瞬間、ほんの一瞬だが難しい表情をしていた。お母さん達も新聞の内容は気掛かりで仕方がないのではないのだろうか。ならばやめればいいのにと思つたが、やめられない理由もあるのか？

私の注意を逸らす為？ そんな馬鹿な。私は証拠を残すようなヘマはしていない……と、思う。どうだったかな。でも、私が行動を開始したのはつこせつきだぞ。この世界の情報伝達の速度からしてたつた四十分やそこら。その僅かな時間でお姉ちゃんに情報が伝わり数十着にも及ぶ衣服を用意し馬車に詰め込みここまで来れるか？ 無理でしょ。

ならば、このイベントは当初から予定されていたと考えた方が無難だろう。妨害のタイミングがジャストミート過ぎる気もするが、

それは私の運が悪かつたのかねえ。

となるとだ、このイベントは何が目的で行われているのかが分からぬ。純粹に衣服の着せ替えの為か？ まあ女性はそういうの好きだろうしそれが理由でもいいだろ。でもそれだったら、何故あんな深刻そうな表情を一瞬垣間見せたんだ？

ん？ そういうば、私は見た目が女性じゃないか。つまり、私も衣服の着せ替えに多大なる興味を持つていると思われていて、このイベントは私を喜ばせようとして企画されたのかもしない。じゃあ、その思いを無下にするのも忍びない。

「アレシア、どうかした？」

「いえ、ちょっと疲れてただけですよ」

お母さん、私の精神はそろそろ限界です。

「そうですね。もうすぐお昼になりますし、休憩に致しましょう」

休憩……この好機を逃してなるものか。

「何処行くのアレシア？」

「ちょっと私の部屋まで」

「昼食は私が持参してましてよ。すぐに戻りなさいアレシア」

「分かりました」

ばれたら元も子もないが時間に余裕がないのも事実。慎重かつ迅速に自室へと舞い戻った私はモノクルを【物質創造】。急いで上空を旋回して待機している偵察機からの情報をモノクルに収める。見てる時間はないが、取り敢えず情報 자체は手に入った訳だ。よし、さつさと戻ろうか……でも少し気になる。ちょっとだけ覗いて見よう。偵察機は画像データとして現場の情報収集をして来たようだから、無難に最初から見てみるか。

んー、一枚目から順番に眺めてるけど、特に何も変わらない森林と丘陵の写真ばかり。まだこの地域の雪は融けきていないんだ

な……ん？ この写真、ロミリア軍が映ってる。結構多い、一千人はいるんじゃないかな。それだけの人数の兵士達が陣地を作つて何かと戦つていい。何かの方も凄い数だ。兵士達とも引けを取つていい。むしろ若干何かの方がが多いようだ。この何か、以前私も戦つた事のある。確か、一体ずつはそんなに強くはなかつた。魔法さえ使えるならば、そこらの大人でも数人集まれば殺傷出来る位の強さ。でも、こいつらは群れを成して襲いかかってきた。数でゴリ押ししてこちら側の対処能力を飽和させ、着実に接近して来る嫌な戦法を取る。

でも、兵士達も同数ならばキツイだろうけど、ロミリア軍は質量共に充実しているから増援を呼べば撃退出来るでしょ。ん、ちょっと待てよ。ゲルマフライオ州で死傷者数百万名とか聞いたな。とう事はさ、もしかして、ロミリア軍の対処能力を超える数が侵攻しているんじゃ……？

一十八、先遣的な【物質創造】開始

「アレシア、遅いですわよー！」

突如として開かれる扉の音に反応してすかさずモノクルを消す。

「お姉ちゃん……」

「まずい。見られたか？」

「何をしていますの？ もう準備が出来ましてよ」

ふう、大丈夫だったようだ。それにしても、予想だにしていなかつた情報を前に時間の経過を失念してしまっていたな。私があんまり遅いのでお姉ちゃんが私を呼びに来てしました。

「すみません」

「ほら、行きますわよ」

私はお姉ちゃんに腕を取られて食事室まで引っ張り込まれた。食卓には様々な料理の詰まった大きな籠がいくつも並べられ、既にお母さんとディーウア、それにお祖父さんが着席して私達の到着を待つていた。

「凄いわよアレシア！ このお肉トルアنس産ですって！」

料理にはしゃいでいたお母さんだが、私を見た途端表情を固くする。

「アレシア、どうかしたの？」

いけない、私の態度に問題があつたらしい。だが、お母さんを巻き込む訳にはいかないんだ。何とか取り繕わないと。

「ちょっと昨日はしゃぎ過ぎちゃったのかもしませんね。少し疲れてるみたいです」

「大丈夫なの？」

う、眞面目に心配してくれるお母さんに罪悪感が……しかし、仕

方ない。「実は州境でのロミリア軍と魔物が交戦する画像データを取得して、それに衝撃を受けているんですよ。ははは」なんて言える訳がない。

「……はい

少し肯定するのにためらつてしまつたが、何とか怪しまれる事は無くお母さんは信用してくれたようだ。

「昨日何かありましたの?」

ありがたい事に、上手くお姉ちゃんが話題を変えてくれる。

「近所に住んでいる友人達と遊んだんです」

それにもしても、昨日までのほほんと生活出来ていたのが嘘のような気分。これからどうなるんだろう。

「羨ましいですね。私達もいつか遊びに行きましょう」

そう出来れば私も嬉しい。でも、果たしてその願いは叶うのか。

「いいですね」

心から私はお姉ちゃんの提案に賛成した。

だが正直な所、私は食事なんてほっぽり出して当該地域の魔獣群についての情報収集並びに従事し、必要とあれば爆撃しに行きたい。至急片付けなければならない仕事を抱えているのに、子供の遊びに付き合わなくてはならないお父さんみたいな気分。子供の遊びに付き合うのは楽しいが、仕事の事が頭を放れず素直に楽しむ事が出来ない。仕事されなければとため息を付く所も私の心境と似ている。だが、例えとして挙げたお父さんと異なる点は下手に動くと事態を悪化させる恐れがあるという事。ここは慎重に行動しなくてはならない。先ずは偵察機から得た情報を整理してこの状況が何を示しているかを判断しよう。だからお願ひだ。さつさと私を自由にしてくれ。

私としては普段通りに行動していたつもりだったのだが、どうやら

ら周りからは疲労しているのに無理していると判断されたらしい。
今私は自室のベッドに寝かされている。

「ほり、しつかり休みなさい」

お母さんが横になつた私にシーツを掛けてくれる。

「はい」

「全く。だらしないですわね」

お母さんの幾分後ろに立つお姉ちゃんは不満そうだ。当然だろつ、わざわざ訪ねて来てくれたのに私がこの様なのだから。

「すみません」

本当に申し訳ない。今抱えている問題が解決された時、今日の埋め合わせをしたいと思う。

「今日は帰りますわ。次来る時までにしつかり体を休めなさい……無理は禁物ですわよ？」

仏頂面のお姉ちゃんだけ、私を心配してくれているようだ。嬉しいんだけど、これが嘘なので心に刺さる。

「勿論です。今日は来ててくれて嬉しかったです」

ただ、タイミングが良ければもっと嬉しかったんだがね。

「そう？」

「はい」

来てくれた事自体は本当に嬉しこよ。

「では、御機嫌よう」

「はい」

「さあ、少し眠るといいわ」

「はい」

「お母さんお皿洗つて来るけど、すぐ戻るから」

そう言い残してお母さんは部屋を出て行つた。

「はい」

時間は今しかない。モノクルを【物質創造】して、入手した情報の解析を開始……良し、終わった。何々、長さ約五百キロにも及ぶ州境線上に展開しているロミリア軍戦力はおよそ八万六千。対して

群がる魔獣はおよそ十二万。ふむ、展開地域の広大さ故、軍団規模で丸々交戦している部隊もあれば、魔獣の監視の為戦闘に参加していない部隊もある。ただ幸いにも、いや兵士達にとつては幸いではないだろうが、魔獣は人間目掛けて動いているようだ。兵士を餌と判断し、わざわざ兵士の多くいる場所目掛けて突撃しているようだから、防衛線からの取りこぼしはそこまで多くない。

主な戦場は二つにまで絞れそうだ。この主戦場においては”火力の鬼”と呼ばれている第二魔法軍団が、爆炎のカーテンを歩兵部隊と魔物の群れの間に引く事で大幅に魔物の数を削つて、ロミリア軍側が優位に戦況を進めている。画像から判断するに、第二魔法軍団は数キロ四方を一回で制圧しているっぽい。恐ろしい火力だ、地球上にある最新鋭の兵器を備えた軍隊だつて中々真似出来ないだろう。しかし、ロミリア軍側がこの優位を保ち続ける事は出来ないだろうね。第二魔法軍団がロミリア軍随一の火力投射能力を持つているとしても、彼らも人間だ。いつかは歩兵への支援が出来なくなる時が来る。そうなつた時、防衛線が持ちこたえられるとは到底思えない。私からも、ロミリア軍に戦局を傾かせる事が出来るだけの早急かつ強大な火力支援をしなくてはならない。もししなかつた場合、他の地域にも甚大なる被害が発生する。時間はほとんどない。お母さんが皿洗いをして戻るまで……いや、ディーウェアが手伝つているからもう戻つてくるかもしれないぞ。

州境防衛に死力を懸けるロミリア軍兵士達の為に私が出来る事は何だ？

弾道ミサイルに核兵器並みの破壊力を持つN2弾頭を搭載して叩き込むか？駄目だ、座標が分からぬから命中精度に期待出来ない。偵察機の航行データから指定座標の数百メートル以内に投下は可能だが、その程度の命中精度では下手すればロミリア軍側に被害が及びかねない。とすれば、N2を使うならば爆撃機に搭載するし

かないか？しかし爆撃機じゃ間に合つか分からぬ。いや、命中精度が数百メートル程度でも後方に叩き込んで、魔物の混乱を誘えればいい。そうして稼いだ時間でどうにか爆撃機を送り込む。

まづい、誰かが階段を上る音だ！

私はベッドから跳ね起きて窓を開き、魔獸目掛けてパーシング弾道ミサイルとB-1爆撃機、それにU-2偵察機を【物質創造】しロミリア軍支援に送り込んだ。

私がモノクルを解除した次の瞬間、お母さんが扉を開き室内に入つて來た。

「何しているのアレシア？」

変な目で見られるのも仕方ない。今の私は疲れてベッドに横になつているべきなのに、窓から顔を突き出しているのだから。

「空氣の入れ替えを……」

我ながら苦しい言い訳だ。

「今日はもうしたでしょ？」

お母さんにいぶかしげな目線で見られているが、もうこの言い訳で押し通すしかない。

「でも入れ替え足りなかつたんですよ」

感情論に持つていけばどうにかならないだろうか。

「十分よ。寒いんだから閉めなさい」

お母さんは、肩をいからしてずんずんと私に近づいてきてぴしゃりと窓を閉めてしまった。

「分かりました」

でも、間に合つたから良しとしよう。

さて、私の火力支援は効果があるだろうか。

一十九、ディーウェア出撃

お母さんに見守られながらベッドに横になる私。頭の中では州境の戦闘の事ばかり考えている。私が投入した戦力は役に立つただろうか。あれでも結構強力だとは思うけれど、敵が敵だけに戦果を直接確かめたい。ああもう、じれついたいなあ。私自身が行けば万事解決なのにこんな所で何油売つていいんだ。

早急に対策を講じないとならないといつのに……もう駄目だ、我慢出来ない。

「アレシア？」

思わず目をかっ飛びでシーツをはねのけた私に、お母さんの声が耳に入る。

この状況下で無駄な時間を費やすのには耐えられない。でも、ここで私が飛び出したら家族に秘匿していた私の能力が知られてしまう。そうなれば、どうなるだろうか。

私の持つ力は、人が持つには大きすぎる。家族のみんなは私を人間として見てくれるだろうか。それとも怪物として見るようになるだろうか。

問題はそれだけに止まらない。何らかの権力が私を知つたらどうするだろう。家族を人質に利用される事になるかもしれない。いや、私を利用するにはリスクが高いと判断して殺されるか？

考えれば考える程、私自身が出るのは難しいと判断せざるを得ない。

だがしかし、私にはディーウェアがいるのである。自立判断すら可能なAIを搭載し、何故か人型に変体出来るディーウェアなら前線に行つて的確な指揮を執れるだろう。ディーウェアに州境へ出撃するよ

う頼んでこよつ。

「私、お手洗いに行つてきます」

「そうと決まれば、早速行動だ。

「気を付けるのよ

「はい」

お母さんの温かい声を背に浴びて自室を出た後、ディーウアの魔力を探る。ん、どうやら一階にいるようだ。

階段を下りると、廊下を掃除するディーウアの姿が見える。篠で大きな汚れを掃き出している最中のようだ。私の足音に気付いたのか、こちらに笑顔で顔を向けるディーウア。その笑顔は私を見た途端弾け、ディーウアは眉間にしわを寄せる。

「御主人様、どうかなされましたか？」

私は掃除をしているディーウアに近寄り、前置きなしに話を切り出す。

「ディーウア、時間がないから手短に行く。今からモノクルの情報を送るからそれを元に魔物を撃滅して来てくれないか」

こう言い終えるなり、有無を言わさずモノクルを【物質創造】してディーウアへ情報を与える。

だが、ディーウアは州境に出撃してくれるのだろうか。今の日常を楽しんでいるディーウアには酷な仕打ちだろうし。もしかしたら断られるかもな。

「分かりました。御主人様」

私が案じていたのを恥じ入らせる位の即答を頂いた。何てありがたい。

「ではお祖父様とお母様に挨拶後、現地に向かわせて頂きます」

「私が行くべきなんだろうが、押し付けてすまない」

「宜しいので御座います。これが本来の私の務めで御座いますから私に向けて、清々しい笑顔を見せてくれるディーウア。そんな顔するなよ、お前を戦線に投入する事に引け目を感じちゃうじゃないか。

「本当にいいのか？ 無理はしなくてもいい。他にやりようはある」「ですが、私を投入した方が確実で御座いましょう。安心して下さりませ。私の心配は御無用で御座います」

確かにディーウアの言つ事はもつともだ。極端な話、ディーウアが粉々に撃破されても私の膨大な魔力を以てすれば簡単に再生される事が可能だ。

「では、行つて参ります」

私が、自身の良心の為に「ディーウアの決意を鈍らせるような台詞を量産しようとするのをこれまた良心によつて躊躇している間に、ディーウアはすすすつと動き回つてお祖父さんとお母さんに挨拶を終えてしまつていた。仕事の早い奴だよ、本当に。

「それでは、しばらくお暇させて頂きます」

玄関に立ち、ぺこりと頭を下げるディーウア。

「いつてらつしゃい、ディーウアちゃん」

見送りに一階に下りてきたお母さんの背中で、びつしたものかと逡巡する私。何とディーウアに声を掛けるべきだらう？ 何か上手い言葉はないものだらうか。

ああもつ、そういうしている間にディーウアが行つてしまつ！ 何を喋つても構わないから、口よ動け！

「ディーウア！」

それで出たのが名前だけかい……まあいい、出発しようとした背中を向けていたディーウアを振り向かせる事には成功したのだ。後はこういう場面に相応しい台詞を口走つちゃえばいい。まあ、思うがままに声帯を震わせよう。

「あの、その、頑張つて下さいー！」

うわあ、やつてしまつた……「頑張れつ」て、何て陳腐で無責任な台詞なんだ。もう、私の馬鹿馬鹿馬鹿！

「はい！ 行つて参ります！」

それにも関わらず、ディーウアつてば、とびつきりの笑顔で飛び出でいきやがつた……無事でいてくれよ、ディーウア。

三十、三人兄妹の来訪

ディーウアがゲルマフィリオ州へ向けて発つたのを見送つた私は、お母さんに食事室へ誘われお茶を嗜んでいた。

お茶にも色々と種類があるのでどうが、白い陶製マグカップに注がれたこの空色の液体は何といつ種類なのだろうか。よく分からんが、ほのかに感じる爽やかな酸味は中々悪くない。

「ディーウアちゃん、楽しんでいいかしら？」

隣に座るお母さんがカップを両手に持ちながらぽつりと話す。どうやらディーウアは観光を理由に外出したらしい。

「そうだといいですね……」

実際は魔物との戦いだからなあ。うん、後で爆撃機を追加で送つておこう。それこそ十二万の魔物を根こそぎ焼き扱える位。少しはディーウアの負担を減らしてやらないと、ディーウアの主人としての面目が立たない。

お母さんと二人つきりでほんわかとお茶を啜^{すす}る。何て素晴らしい時間なのだろうか。

ゲルマフィリオ州では大変な事になつてゐるのに、私だけこんな幸せでいいのかねえ。といつか、お姉ちゃんも来訪するのが今だつたら大歓迎だったのだが。つづづくタイミングの悪い人だ。と、誰かが来たみたいだ。玄関の扉がガンガン叩かれている音が響いてくる。

「あら、お客さんみたい。見てくるわ

「はい」

お母さんが食事室から出ていくのを眺めつつマグカップに口を付け、中身を含む。美味しい。

お母さんが玄関の扉を開いた音が耳に届くと共に、ぱたぱたと駆け足で誰かが食事室に接近する音も聞こえてくる。何だ？ また「近所さんの誰かか？」

「アレシアお姉ちゃんっ！」

妹のチヤーイちゃんだつた。

モヤモヤしたんですね？」

お兄ちゃんたちに連れてきてもらいたの!!

私の質問に答えると同時に私は掛けで跳躍していくチャーリちゃん。まさか幼い子供を床に激突させる訳にもいかない。即座にマグカップを食卓に置き、チャーリちゃんを受け止めた。が、私の小さな体では幼女とはいえチャーリちゃんを受け止めた場合その運動エネルギーを受けきれる筈もなく、椅子から転げ落ちてしまった。運の良い事に私は物凄く長い髪の毛を有しているのでそれが衝撃を緩和してくれ事なきを得たのだが。

女神様だいじゅうよ!

「何があつたの!?」

椅子が倒れてうるさ

二二君とハーリ君達が開き二はなしの扉口から懐てて入ってくる

てお母さんが呆れたような目線で私達を見て一言。

「何をしてるの？」

「いや、何と言えばいいのでしょうか。チャーリーさんが少し泣いていたみたいですね」

脱力するお母さんに対し、『ライン』君は頭をかつかさせて私達近くへいく。

「オレが連れて来てやつたのに勝手な行動すんじゃねえ！」
「わーん！ 女神様助けてーっ！」

ラインラ君の剣幕に怖がつて強くぐつこつしていくキャラーラちゃん。

仕方ない、仲裁に入るか。

「まあまあ、私もチャーチャーも怪我もしてませんし許してあげてくれませんか。ただ女神様はやめて下さい」

「ちつ」

何とか舌打ちだけで我慢してくれたラインラ君。昔なら迷わず鉄拳制裁だったのに、進歩したなあ。

「それで、今日はどうして用件ですか？」

「なんにもねーよ」

「え？ ジヤあどうして来たんだ？」

「あのねあのね！ ワタシずーっと女神様に会いたかったんだよー。私の胸元に顔を埋めて何処か恍惚とした表情を浮かべているチャーチャー君をラインラ君が苦々しげに見つめているのに気付く。

「もしかして、チャーチャー君を連れて来ただけですか？ あと女神様はやめて下さい」

「……ああ、そーだよ。悪いか？」

「ははは……」

それは御愁傷様だったね。

「まあまあ。せっかく来たんだから、お茶とお菓子でもどうかしら？」

お母さんがラインラ君達にお菓子を出してくれるようだが、ラインラ君は苦い表情を崩そとしない。

「ありがとうござります！」

だがルール君がその申し出を受けたので、お母さんは少し待つてねと言い残して台所に消えてしまった。

「なーにがありますがどうぞります、だよ。お前アレシアと一緒にいる時口調が変だぞ？」

「え、そいつなの？ とこつか、いつにもましてやぐれているな！」

インラ君。

「なつ、そ、そんな……」

顔を真っ赤にして抗議するルール君。おやあ？ 何か動搖する所

があるようですな。

「んー？ もしかしてルール、まさか……？」

「兄ちゃん！」

ラインラ君が二タニタと嫌らしい笑みを浮かべるのを見たルール君は赤かつた顔を一層赤くしてラインラ君のみぞおちに頭を突っ込ませた。クリーンヒット！ ラインラ君は片膝を付いた！ しかしラインラ君歯を食いしばり、ルール君を突き飛ばす。体勢を崩したルール君は一直線に私に向かつて倒れてくる……つてええ！？

私はチャーチちゃんを抱えているんだけどな。でも、私がルール君をキヤッチしてやらないと頭から床に衝突してしまいそうだ。

チャーチちゃんを胸元から右脇に移し替え、自由になつた左手でルール君の背中を受け止め……あー無理だわ。左手痛い。左手を引っ込み、代わりに胸元でルール君の頭を受け止めた。

「ルール君、大丈夫ですか？」

「はい！」

良かつた、何ともないみたい。

「大丈夫で」

あれ？ 私と目が合つた後、私の胸元を見た瞬間に動きが停止してしまつたぞ。

「あの、ルール君？」

「ルール兄ちゃんどいて！」

非道にもチャーチちゃんはルール君を突き飛ばし再度私の胸元に戻る。いいのか、チャーチちゃん。自分の兄だろ……。といふか、ルール君は無事なのか？ 私の左手が未だに少し痺れてる位だから、意外に私が時間差で止めを刺してしまつたかもしれない。

「ラインラ君、元々あなたがルール君にちよつかいかけたんでしょう。どうにかして下さいよ」

とは言えラインラ君が諸悪の根源だよね。

「オレのせいじゃねえだろ」「何を言つ。

「ラインラ君が下卑た笑いを浮かべて何か言おうとしたけれど、「んな事にはなりませんでした」

あ、もしかして自覚はしてる? ラインラ君は無言で私の元まで来てルール君の頭を持ち上げ揺すり始める。

「おらつ、起きろ!」

ああああ、そんな乱暴に扱うなよ。気絶してるんだぞ。

「ちょっと、ラインラ君。もう少し丁寧に扱いましょうよ」

「うつせ!」

「しかしですねえ、私が背骨に直接打撃を当てて気絶したんですか」

「ら

しまつた口が滑った。案の定ラインラ君がすつしに睨んできてる。

「それ、本気で言つてんのか?」

「ん?

「あ、いや……」

どうしようか考えるが、そうだな、ここは私に非があるのだし素直に謝つた方がいいかな。

「あら? 皆して何をしているの?」

お母さんがトレイに色々乗つけて台所から戻つてくる。

「こいつ寝かせてーんだけど場所ねーかな?」

「ルール君どうかしたの?」

「……」

何故無言で私を見る。そりや私も須らく悪いだろ? が、明らかにお前にも責任あるだろ。

「分かつたわ。隣の今に寝かせましょ!」

お母さんもどうして納得するんだよ。私つてお母さんにどう思われているんだ? 頻繁に人を氣絶させるような危ない人だとでも思われてやしないだろ? が。でも今回は全部が全部私が悪くはないと思うんだ。いやしかし、私の周りで頻繁に人が氣絶したりするのは事実なんだよね。これは異世界だからこそだろ? 地球じゃ氣絶したりしたら一大事だが、ここじゃ皆大して驚かない。

お母さんとラインラ君に抱かれたルール君を追い、私はチャーチちゃんを抱き締め居間にに入る。ルール君はソファに寝かされているが、何だかその寝顔は幸せそうだ。

「ルール君の具合はどうですか？」

「大丈夫よ、すぐ良くなるわ」

「そうですか」

それならば一安心だ。

「ルール君が起きるのを待ちながらお茶にしましょう」

お母さんが食事室に置いてきたお菓子とかが乗ったトレイを取りに行つた。

ルール君が目覚めてからじばらく居間にてお茶を飲んだりお菓子を食べたりしていたが、ラインラ君が突然外に遊びに行くと言い出しう掛けてしまった。ルール君も乗り気じゃなかつたし私を誘つてもくれたのだが、疲れているつてお母さんに嘘付いてるしチャーチャンにずっととべたべたくつかれて事実疲れてたので私は辞退させて貰つた。ルール君は強引に引っ張つて行かれてしまったが。にしても、戦闘時には魔力で身体能力無理矢理向上させてたのは不味かつたな。五歳児を常時抱っこしてたるだけで体力がガリガリ削られてく。

「アレシア、やつぱり寝てたらどう?」

私の疲労は目に見える位ひどいのか、お母さんから心配されてしまう。

「そうさせで貰います」

横になれば、チャーチャンの重さも苦にならないだろう。それ以前に、チャーチャンが離れてくれるだけでもいいのだがね。

「ワタシもいっしょにおねんねする!」

どうにもそうはいかないらしい。決意に満ちた表情で必死に主張して来るチャーチャン。

別に大声で叫ばなくとも一緒に寝る位構わないといつのに。

「じゃ、チャーチャンもおねんねしましちゃうか

寝てくれれば、隙を付いて部隊を送れるかもしれないし。と、黒い考えも少しあつたり。

「はーい!」

元気のいい返事だ。この位の年齢の時つて生きるのが楽そうだ。

羨ましくなるね。

「お母さんは家事をしなきゃならないからってあがられないけれど、やめるとするのよ」

「いつの母とも都合よく席を外し、血室にてチャーチちゃんと共にベッドで横になつたのだが、少し前世とでも言ひべき地球での事を思い出す。

前世でも自分が幼少の頃、妹の添い寝をしてあげた事があつたつ。もうあつちには行けないと思うと少し悲しくなるね。

まあ、今更戻った所でどうなるのか考えてもないが。結構年月経つてゐるから毎年を取つてゐるにも関わらず、私だけ少しちゃくなつておまけに性別入れ替わつてゐるんだからなあ。

おつといけない。感傷に浸つてないでさつさとチャーチちゃんと寝かしつけよう。そうすればゲルマフィリオ州に飽和爆撃出来るだけの航空戦力を叩き込んでやれる。

チャーチちゃんの添い寝をじつつ、体感時間にして十分程が経過する。

「えへへへ~

「ここにしながらずーっとすつすり類をすり寄せてくれるチャーチちゃん。うーん。中々眠らないなあ。

「チャーチちゃんは眠くはあつませんか?」

と、私が問うと

「寝てられないもん!」

との返事が帰つて來た。

「それはどうしてですか?」

寝てくれよ。

「だつて、お姉ちゃんと会うの久し振りなんだもん……

そう言い終えるとまたすり寄つてくるチャーチちゃん。

「そうですか?」

「うつ慕われると悪い気はしないのだが、いかんせん時期が悪い。

州境に投入した中距離弾道ミサイル一発と爆撃機十一機だけでも単純計算で致死面積（そこにはいれば確實にお陀仏）十平方キロ（東京都台東区程）はある。危害面積（そこにいるとあの世に逝くかもよ）ならば一気に広がり一百平方（アメリカ合衆国首都ワシントンDC程）キロだ。

地球のような一部地域に人口や構造物が集中しているのならば十分過ぎる戦力なのだが、州境は五百キロもの長さがあり主戦場は二か所に絞られているとはいへロミリア軍はその州境線上の至る範囲に展開している事もあって魔物を全滅させられるかと問われると自信は持てない。

わざわざ増援をティーウアに送つてやりたいなあ。

よし、うつなつたら出来るだけチャーチャンに近くして満足させてやる。そうすればまどろむ位はしてくれるだろう。

「じゃあチャーチャン。横になりながらなんですが、したい事を言つてみて下さこよ。出来る事ならさせて貰います」

「ほんとー?」

私の申し出は喜ばれたようで、チャーチャンは田を光り輝かせ始めた。

「ええ。勿論」

「ほんとにほんとー?」

「はー」

そんなに喜ばれるとこっちも気分が良くなる。でも、うつまでも喜ばれる事を言つたつもりはなかつたのだけれど。

「じゃあねー。じゃあねー。お体触らせてー。」

「……」

うわあー、そう来るのかあ……。

「だめ?」

「……いい、と思ひますけど……何故触りたいんですか?」

「あのねあのね! 女神様のお肌すべすべしててね、気持ちいーの

！」

「そうですか……」

私もまだ若い肉体だから、肌はそれなりに綺麗なのだろうけど、絶対チャーハイちゃん自身の肌の方が良好な状態を保っていると思うのだが。

「ダメ？」

まあ、大した事でもないか。体を触ると聞くと卑猥だが、実質は肌を触らせてこういう事だし。

「いいですよ」

「やつたー！」

喜びの雄叫びを上げたチャーハイちゃんは私に絡ませていた両腕を離し万歳の格好をして、指をワキワキさせる。

「ちょっと待つて下さいー！」

だが私は、タダでは動かない！

「？」

万歳の格好のまま動きが止まるチャーハイちゃん。

「その代わり、条件があります」

「じょーけん？」

首をかしげるチャーハイちゃんに、条件を投げかける。

「はい。目をつむつてゆつくり十秒数えてくれませんか？」

「何で？」

「少し覚悟がいるんです」

「どうだ？ 乗ってくれるか？」

「んー……いいよー！」

少し頭を悩ませていたようだが、割かし簡単に承諾してくれた。

「ありがとうございます」

「じゃあ、行くよー」

両手で田を隠し、準備万端なチャーハイちゃんに私は始めてくれと促す。

「いーちーこーこーこーん……」

良し、今からが勝負だ。ベッドの上をもそもそと進んで素早く窓を開き、爆撃機編隊を【物質創造】。魔力をあまり大きく使うとお母さんにばれるかもしれないのに、五派に分けて十一機ずつ州境へと出撃させる。

「よーん……ゴーお……ろーく……」

爆撃機だけだと、細かな支援が出来ないだろう。機械兵を満載した上陸艇も三隻程送るか。上陸艇と言つても海上を移動する奴ではなく宇宙空間から惑星に上陸する時に使う物なので空を飛ぶ事も可能だ。

「なーな……はーち……きゅーつ……」

さて、四種類しか【物質創造】出来ない制限の中、爆撃機に上陸艇を【物質創造】した訳だが、まだ二種類の余裕がある。後何か足らない物はあるかな？いや、大丈夫だろう。上陸艇には機械兵以外に火砲や戦車、工兵機材とかも入つてるし。

「じゅう！ もーいーかい？」

「もーいーです」

頑張れ、ディーウア。

三十一、アーザス君と一人の学友

「入つていいかしら」

ノックと共に聞こえてくるお母さんの声。

「……ええ！ いいですよ！」

私は息絶え絶えに返答を叫ぶ。

「アレシア。アーザス君がお友達連れて来てくれたわよ。どうしま
しょうか……それは何をしているのかしら？」

お母さんは私の服の中に頭を突っ込んでいるチャーリちゃんを見
て、凝視しながら質問してきた。チャーリちゃんの両手は私の背中
をすりすりしている。

「この状況を、見られた！？」

「うう……この場から消えてしまいたい。

「女神様をたんの一してたの！」

何を言っているんだこの幼女は！？ 答えるんじゃない！

「そ、そうなの。良かつたわね」

お母さん完全に引いてるよ。

私がおかしく思われるだろうが……幼女趣味とか流言流布された
ら社会的に終わる……。

「わ、私なら大丈夫です。会いましょう」

いや、お母さんがそんな事するとは思えない。これはまたひと話
題を変えて気を逸らしてしまおつ。

「そう？ 分かったわ」

お母さんが階下に下りていく足音を確認し、少し冷静になつた。

「チャーリちゃん。今日はもうこれで終わりにしましょう」

「え～」

服の中からいかにも嫌そうな声がするが、無視無視。

「また今度という事で」

強引にチャーリちゃんを引きずり出す。

「……約束ね」

「は、はい。それより、横になつて出迎えるのもなんですし身を起きましょ」

ムスッと頬をちょっと膨らますチャーリちゃんに、体裁が悪いのでベッドに腰掛けるよう促す。

「うん」

「入るよ。いいかな?」

どたどたと幾人かが階段を上る音が聞こえて来たかと思うと、扉の向こうからアーザス君の遠慮がちな声が響いて来る。

「歓迎しますよ」

「こんにちは、アレシアちゃん」

扉を開けて私の部屋に入つてくるアーザス君。私を見るなり爽やかな笑顔で挨拶をしてくる。

「こんにちは、アーザス君」

「失礼します」

「失礼します」

アーザス君の後から入つて来たのは同じ年頃の一人の子供。

一人は女の子でどび色の髪を腰の辺りまで長く伸ばして水色のワンピースを着ている。幼いながらも目鼻立ちのくつきりした美しい顔で口元に清純な笑みをたたえており、優等生として男子の憧れになつていそうなイメージ。

もう一人は男の子で、顔は綺麗な造りなのだが、薄い茶色の髪をぼさぼさにしているのとほがらかな笑みを口元にたたえている事で愛嬌があるように見える。

「この方は?」

「紹介するよ、こつちはイグヴァ」

「よろしく、アレシアちゃん」

男の子の方はイグヴァーというそうだ。にしても、イメージ通りなんのんびりとした口調で話すんだなあ。

「彼女はヌアム」

「よろしくね、アレシアちゃん。ところで、その隣の子は誰なのかしら？」

あんたもイメージ通りの反応だな。というか、なにこの美形三人衆。嫌味なのか？

「ワタシ、チャーリだよ」

よくよく見るとベッドに腰掛け足をプラプラさせているチャーリちゃんも美しいと形容は出来ないが、茶髪がふわっと波打つてる感じ……ソバージュとかそんな髪形がよく似合つて可愛らしい。

「近所の子で、遊びに来ていたんです」

チャーリちゃんが名前しか説明しなかつたので、私からも軽く事情説明させて貰う。

「チャーリちゃんもボク達と遊びかな？」

ふわふわした笑顔でチャーリちゃんに微笑みかけながら、イグヴァ君が遊びに誘いかける。

「遊び！」

「でも、アレシアちゃん体調が悪いんだってね。外では遊べないね」
アーザス君無理して私に合わせようとしている。

「彼女の体調が悪いのが悪いけど、仕方ないわ。今日は室内で出来る遊びにしましょうよ」

そうして貰えれば助かるね。

「そうだね、そうしよう」

新たに知り合つたイグヴァー君とヌアイちゃんを加え、皆で室内で出来る遊戯で時間を潰しているとあつという間に日が傾いていた。

「いけない、そろそろ帰らないと」

アーザス君が慌ててそう言つ。

「そうね。では帰らせて貰いましょう」

ヌアムちゃんもそれに賛同。

あれ。そういうやチャーリちゃんはどうなるのだろう。

「チャーリちゃんはどうするんです？」

「一人で帰るよ」

「ロロニアは地球の日本には及ばないが特別治安が悪い訳でもない。だが、それでも幼児が日暮れに出歩いても大丈夫なのかね。」

「それはいけないね。アーザス、お家まで届けてあげようよ」

「私と同じ思いをイグヴァー君も抱いたようだ。

「そうだね」

アーザス君も付いて行くようだし、これなら安心だ。

「では、玄関までお見送りさせて貰います」

「悪いよ」

「いえ、私を訪ねて来て貰つたのですからそれ位はさせて下さい」

「そつか。じゃあ行こう」

アーザス君が筆頭に、皆でそろそろと歩き始める。

「あ、皆は先に行つてて。ワタシとアレシアちゃんは女同士のお話があるから」

どんな用事が私にあるのだろう? ヌアイちゃんに引き留められた。

「なら下で待つてるよ」

皆が階下に下りた所を見計らつて、私から会話を切り出す。

「えーと、何でしようか?」

「死ね」

「死ね?」

「はい? 失礼ですが、聞き間違えかもしだせません。もう一度述べて頂けませんか?」

「死ねば良かつたのに、何で帰つてきてんのよ」

さつきまでの清純そうな少女は成りを潜め、現在の彼女からは負の感情が満ち溢れている。何だ? まさか、魔族の残党!?

だとすれば、下手な動きは出来ない。彼らの力を以てすればこの

家もろとも私を攻撃する事が可能なのだ。私を傷付けられるかは分からぬが、階下のアーザス君やお母さんを無傷で救えるか……。くつ、頭だけ潰して満足していた私が愚かだった。

「はあ」

ともかくここはまず、敵意を見せず無害な存在に徹しよ。何とか隙を付いて出来たら捕獲、最悪殺傷しなくてはならない。油断を誘う為に、気のない返事を返しておく。

「アーザスにはもう近付かないで」
「ん？ 話がおかしくなつてきたぞ。

「成る程」

「分かつたわね」

何だか知らないが、アーザス君と私を会わせない事が目的なのか？
「前向きに検討させて頂きます」

「じゃあ、魔族ではないのか？ どうなんだろ？」

うーん、私をものすごい形相で睨んでいるけど魔力は確認できな
いなあ。魔族ではないと考えて動いておいた方がいいな。もし一般
人だつたら後々厄介だ。

「……今日はこの位にしてあげるけど、もし近付いたらどうなるか
分かるわね？」

「はあ」

「これつて、どういう意味なんだ？」

「その態度ムカつくわ。やめなさい」

「善処します」

もしかして、ホの字つて奴？

「あんた馬鹿にしてんのつ！？」

「おおつと。私が適当に返答していたせいか、張り手をかましてき
やがつた。

ヌアイちゃんが振り上げた右手。うーん、迫力に欠けるなあ。

少し派手にしようと、回避で思いつきり後ろに跳躍してベッドに
着地してみる。

もふ。あーもう寝てしまいたい。

でもこの修羅場っぽいのを解決しないと。面倒だなあ。

「駄目ですよ大声あげちゃ。アーザス君に本性ばれますよ？」

最初に、追撃にずんずん近寄つてくるヌアイちゃんへ牽制の意味を込めた言葉を発する。

「……とにかく！ アーザスとはもう会うんじゃないわよ！」

やっぱ、アーザス君にはいい格好しておきたいようだね。ヌアイちゃんは足を止めて捨て台詞を吐き、ぐるっと背を向けて立ち去るうとした。

「あ。もしかしてアーザス君を好いてるんですか？」

そこへ確認の一言を発射。

「……言わないで恥ずかしい！ もう！ アーザスは私が狙つてゐるんだから、あんたがいたら困るのよ」

あるえ。もしかして、この子^{くみ}与し易い？

「私もアーザス君を兄のように慕つてますが、あなたもそういう感情をお持ちなんですか。仲間ですね」

私は微笑を口元に浮かべながら仲間宣言を投射！ この餌にかかるつかな？

「あんたと一緒にしないで！ つて、え？ あんた……ほん、あなたはアーザス君の恋人じゃないのかしら？」

私の餌に見事掛かつた！ ヌアイちゃんが顔を真っ赤にして路線修正に入ろうとしだした！

「恋人？ ははは、何ですそれ？ あいつを恋人つてないですよ。ないない」

ここで最後の一押し。少しアーザス君に失礼な気がするが、これ位言わないと止めにならない。

「そんな事ないわ！ アーザスはとっても優しいし、頼りになるし、いてくれると心が温かくなるし……アーザスを馬鹿にするとワタシが許さないわよ！」

恐ろしいまでの入れ食い。意外と大物かもしね。

「すみません。でも、さっきのは私の意見なんですね。あなたがどう思つてもそれはあなたの自由ですし、おおいにやつてくれて構いません」

せん

あ、これは失点一か？

「そうなの……ごめんなさい！」

んんん？ 何か流れが更におかしくなつてはしないか？

「何ですか唐突に？」

性悪女みたいな態度を一変させ、今この部屋に人が入つて来たら私が悪役と思われかねない程完璧な“可哀想な薄幸の美少女”に見える。

「実は、アーザスと仲良く話してゐるあなたを見てアーザスを取られるんじやないかつて思つちゃつたの。今までアーザスに一番近かつたのはワタシで、学校でもワタシとアーザスの間はウワサになつてた。ワタシがアーザスの彼女だつて浮かれてた。でも今日あなたに会つてその自信がなくなつちゃつて……焦つて焦つて、気付いたら脅迫してた。何でこんな事しちやつたのかしらワタシ

要約すると、私を恋敵と誤認して攻撃したつて事ね。気が付いたら体が勝手に動いていたつて奴ね。

「本当に許せない事をしちやつたつて思つてゐるわ。ごめんなさい！」

「おいおい、泣き出すなよ。ますます私が悪役然としてきた。

「あなたの話を聞く限り、それだけアーザス君を愛しているという事が分かりました。兄のようなアーザス君にこんな素敵なか彼女がいてくれると、私も嬉しいです」

日本人的技法。”とりあえずおだてておく”を発動。

ここで勝てると思って責め立てたら逆切れされて、また面倒な事になるかもしね。それなら、なあなあで済ませたくなるのが普通だ。

「アレシアちゃん……こんなワタシにそんな言葉を掛けてくれるのね

泣きながら、抱き着いてきたヌアイちゃん。あんたも怒つたり泣いたり忙しい奴だ。演技してるんじゃないかと思つちゃうね。それでも、どうにか厄介事は回避出来たようだから一安心。

「ん……アレシアちゃん気持ちいい」「ん？」

「ふああ……」

頬を擦り付けてくるヌアイちゃん。今日チャーチちゃんが私にくつ付いていた時と同じ表情を浮かべている。

「ふふふつ。アーザスからアレシアに鞍替えしようかしら」
状況が一転二転つてレベルじゃないぞ！？ 何なんだよもう！
「あ、あのっ。皆さんを待たせています。早く下に行きましょう！」
これ以上の接触は危険だ。主導権を奪われそう。
「決めた。ワタシ泊まらせていただくわ」

何でそななるんだ！？

「駄目です！ 連絡しないと、両親が心配しますよ」

「そういうのに厳しい子、嫌いじゃないわ」

ええい！ 私の頬に妖艶な田つきをしながら手で撫でるんじやない！

「いいから、やつたと下に行きますよー」

私の頬を両手で撫でる為に両腕の拘束を解いたのは愚行だつたな。
後ろにステップを踏んで一端距離を取る。

「あ、待ちなさい」

私に掴みかかってももう遅い。

私は【身体強化】の魔法で肉体を強化し、オリンピック選手顔負けの速度で一気に自室を飛び出し階段を駆け下りた。

玄関には、私らを待つていたアーザス君、チャーチちゃん、イグヴァ君に加えてお母さんが立っていた。

「どうしたのアレシアちゃん走つたりして」

「ははは……上で少々愉快なお話をしましてね」

ほんと、愉快極まりなかつたよ。

「？」

「あー、ヌァイちゃんまで走ってきた」

イグヴァ君の間延びした口調が精神に優しい。癒される。

「はあ……はあ……ま、待つてアレシアあ

きやがつた。ていうか、息を切らす程何をしてたんだ？ 私の部

屋から廊下を少し通つて階段を下りてもそんな距離ないだろ？」

「アレシアお友達を置いてきちゃ駄目でしょー。」

「すみません」

お母さんそりや理不尽だ。あの子普通じゃありませんぜ。

「そ、随。急いで帰らないといけないわ」

お母さんが一人先に進んで玄関の扉を開き、随て帰宅を促す。

確かにそうだね。もつ口が随分低い所にある。

「今日はありがとうございました」

「ありがとー」

扉を支えるお母さんにアーザス君、続いてイグヴァ君が感謝を述べる。感心だ、教育が行き届いているんだなあ。

「ありがとー」

二人に手を繋いで貰つてゐるチャーリーちゃんも見習つて挨拶しだす。

「あ、ありが……とうございました」

ヌアイちゃんはまだ息が整つていないみたい。

「今日は来てくれてありがとうね。アレシアも喜んでいるわ

「じゃあねアレシアちゃん」

「さようならアーザス君」

「ボクも楽しかつた。さようならアレシアちゃん」

「私もですよ。さようならイグヴァ君」

「また会える？」

チャーリーちゃんそんな寂しそうな顔をしないで。

「勿論です」

むしろ会こに行くから。

「じゃーねー」

「はい、さようなら」

「……」

何で無言なのかなヌアイちゃん？ 無言で無表情といつのは中々に威圧感があるからやめて欲しい。

「さ、さようなら」

取り敢えず挨拶してみる。

すると耳元に口を近寄せて来る。何だ何だ？

「……いつか、ワタシのものにしてあげるわ」「ひいい。背筋に寒気が……。

「さようなら、また会いましょう」

一転してもうそれはそれは清純な笑顔でもつて微笑みかけられたが、もうあなたの印象は良くならないよ。

「は、はい……」

苦笑するのが精一杯。

それから三分も経たずに、ラインラ君がルール君を引き連れてやつてきた。

チャーリちゃんを迎えて来たとの事。

一階居間にてお母さんとお祖父さんとで談笑していた私が、何故か一人に後押しされ一人で応対している。

「何だよアーザスと一緒に帰ったのかよ」
途端に不機嫌になるラインラ君。

「一足遅かつたですね」

「ちつ」

舌打ちをすると、ルール君に田配せ。

「おい、帰るぞ」

一人して背を向けて歩き出す。ああ、この一人見ると何か安心するなあ。

「案外ラインラ君妹想いなんですね」

「うつせえ！」

おつと、口が滑つた。

乱暴に閉じられる玄関の扉。同時に外からライオンラ猫ヒルール君が走つて去つて行く足音が聞こえてくる。

ふふふ、からかい甲斐がある奴。

「あら、帰つちゃつたわ」

「うーむ、良い仲じやの」

居間からによきつと延びる二つの首。

「見てたんですか」

「ふふ

「ほつほつほ」

「もう、何ですかその意味深な笑みは」

「何でもないわ」

ちゃんと言つて貰いたいんだがね。何を企んでるんだい？

「何、アレシアの元気な姿が見れて嬉しいんじや」

「そ、そですか」

お祖父さん……もうひとつ重い事言つなよ。

元気な姿を見せ続ける為にも、魔物を州境線上から出す訳にはいかないな。

ディーウァもだが、私も頑張らないと。

首都ロミリアはこの世界有数の人口を抱える一大都市である。郊外の住民を含めると百万にも届こうかという人間が集うこの都市には、あらゆる娯楽が存在している。

その中の一つ、中流階層が好んで集まる一角では居酒屋や賭場が公然と立ち並び、夜になると松明や蠟燭、魔力灯が煌々と辺りを照らしていた。ゲルマフィリオ州で起きた大事件を知つてか知らずか、この界隈は多くの人で賑わい、肩と肩が触れ合いそうな程には混雑が激しい。

この界隈に、一人の男がいた。髪形をロミリア国内では軍人の証と言つてもいい丸刈りにし、服装は北部の人間や鉱員が好むズボンと長袖の毛織物を着用している、何処か雰囲気の固い若い男だ。男は目線を前を歩く男に向けている。視線の先の男は金髪を七三に分け鋭い目つきをしており、ロミリアでは伝統的な成人男性の服装である白いトーガを身に着け、先を急ぐのか混雑をかき分け突き進んでいる。どうやら尾行をしているらしい。

視線の先の男はしばらく混雑の中を歩いていたが、やがて混雑している幅の広い道を逸れ人がようやく一人通れる程度の幅しかない脇道に入つて行く。その脇道には照明の類は一切なく、夜という事もあつて全く先がどうなつているのかが分からぬ。尾行しているらしき男は見失う事を恐れて早く脇道に入ろうと駆け足になる。

男が脇道に入ろうとしたその時、何者かにいきなり腕を掴まれ脇道に入る事を阻止された。驚いた男が自身の腕を掴んだ人間を確認すると、それは既知の人物であった。

「エリソン、邪魔をしないで下さい！」

男は尾行の邪魔をされた事に対して怒りを張り上げる。

「ジャレド、勘付かれている。自然に振る舞つんだ」

だが、エリソンの言葉を聞きその意味を理解すると即座に彼の言う事に従つた。

「良し、もういいだろ？」「うう

先ほどの路地から歩いて数分。一人は下層階級の者が集まる狭い居酒屋に入っていた。幸いエリソンの服装も変装して冒険者といった風情だったので、食卓を置けるだけ置いてぎゅうぎゅうと狭苦しく客を詰め込んでいるこの汚らしく騒々しい居酒屋に入るために一人は相応しい格好をしていた。

「こちらの席へどうぞ」

くたびれきつた中年女中に、少しばかり動くと肩が触れ合つ席へと一人は案内される。二人の席の右側は壁で、左側は団体がでかく柄の悪い男達が喚き散らしている。この男達に限らず何処の食卓でもどんちゃん騒ぎが繰り広げられているので、少し声を絞れば会話が聞かれる恐れもない。照明も隣の席の人間の顔を判別出来る程度の光度しかないので、人相も注意すれば割れないだろう。他人に聞かれたくない話をするには中々良さそうな場所である。

「どうして俺を尾行したんです？」

腰掛けすらない木製の小さな椅子に座るなりジャレドはエリソンに詰め寄つた。自分をどういう料簡で尾行したのというのだろうか？ 事と次第によつてはジャレドにも法的措置も含めて考えがある。

「お前をじゃない、ジェレイコスを尾行していたんだ」

一方のエリソンは喧嘩腰でつつかかつてくる後輩に苛立ちを覚えていると共に呆れていた。お前を尾行する程俺は暇じゃない。

「あなたも？」

「ああ、そうだ。一か月前からな」

エリソンの言葉にジャレドは驚かなかつた。いつもエリソンは自

分の数歩先を進んでいる。

「それで？」

それよりも、エリソンが得た情報を知りたがつた。

「あの路地に入る者は全て監視される。一度監視を承知で潜入してみたが、撒くのに大分苦労した。それ以降は方針を変えたらしい。許可なく入った者は問答無用で消されるようになった」

エリソンとて、厳重な警備の前にジェレイコスの行動の秘密を解き明かせていなかつた。それにしても、ジェレイコスの秘密主義も入つた者は問答無用で消すともなると、徹底している。

「そこまでしてジェレイコス部長は何をしているんです？」

「分からん。政府の重要ポストに就いている人間も何人があそこに入つてているようだが、何を企んでいるのか……」

また、ジャレドの知らない情報が出てくる。あの路地に入つているのは、ジェレイコスのみではないらしい。もつと情報をジャレドは欲しかつた。

「それじゃあ、他の機関との会合しているだけって事もありませんか？」

軽い冗談のつもりでエリソンに言つてみる。否定して何か漏らすかもしれない。

「その可能性もある」

しかし、エリソンは食いつかなかつた。ジャレドを眼中に入れていないようでもある。

「何を考えているんです？」

「ジャレド、俺は……」

「この世界に隠れた秘密結社のような存在があるような気がする。と、言おうとしたがエリソンは思ひとどまつた。あんまりに荒唐無稽な気がして他人には話す気にはなれなかつた。

世界を裏から操る輩がいるなんて、そしてそれを俺が追つているなんて馬鹿げてやがる。

「何ですか？」

「いや、何でもない。とにかく、お前は手を引くんだ。確証もないの」、付き合いつ事もないだらう」

席を立つてお話を終わりを告げるヒリソン。

「嫌です。あなたがここまでこだわるなら何かがあるんでしょう。

俺はそれを突き止めるまで動き続けます」

見ていろよとばかりに捨て台詞を吐き、去つて行ったジャレド。

「……後悔するだ

『……人様。ご主……ま。御主人様！衛星網の完成で御座いますよ！』

右耳に掛けたモノクルに内蔵されたイヤホンから聞こえてくる、弾んだディーウアの声。

「よくやつた。ありがとう」

私はディーウアが払つたであろう多大な努力を思い、労いの言葉を掛けた。

私がディーウアに衛星網構築を依頼してから一週間。ついに構築が完了し、私とディーウアは通信衛星を介しての交信にはしゃいでいた。

自室の机の上に置かれた液晶ディスプレイには、鮮明にディーウアの姿が映し出されている。ディーウアだけでなく、背景として焦土と化した街並みや魔物の死体を機械兵が積み上げて火葬しているのも見える。あつちは相当荒廃してしまっているようだ。

「本当にディーウアは良くやつてくれたよ」

ディーウアには、心から感謝するよ。

『お褒めの言葉、真に嬉しいで御座います！』

画面越しににっこりと微笑むディーウアを見て、無性に彼女に会いたくなつた。

「これからはここから部隊の指揮を執る事も出来るし、州境に行つてもう六日だろ？ そろそろ帰つて来ないか？」

幸い過剰に投入した爆撃機戦力が地形もろとも魔物を焼き払つてくれたおかげで、州境沿いのロミリア軍の負担は激減してゐる。

又、機械兵三個連隊およそ三千六百兵がゲルマフィリオ州内に侵攻して積極的に魔物を掃討して回っている。

状況は最悪から脱していると判断してもいいだろう。ただ、爆撃が激しすぎて地形が一変している土地が多く存在しているから、後に避難した元住民とかに恨まれるかも分からない。まさか、画面の背景の瓦礫しかない街並みは私のせいじゃあるまいな。

『ですが、御自宅からの指揮となりますと、どうしてもタイムラグが生じてしまい、依然現場指揮をする者は必要ではないので御座いましょうか？失礼ですが、御主人様の【物質創造】なさった機械兵の思考能力は高くありません。私抜きで大丈夫で御座いましょうか？』

「大丈夫。問題ないよ。十二万もの数の魔物が文字通り壊滅してしまったんだ。いくら魔物の繁殖力が高いとしても数週間でどうこう出来るような数じゃない。それよりそっちでは何もなくて苦労したろう。早く戻つて来て休んだ方がいい」

本心はただディーウアの顔が直接見たいだけだが、私の言つてることに間違いはない筈だ。

まだ通信衛星位しか使つてないが、偵察衛星も軌道上に上げているし奇襲食らうなんて事はまずない。まあ、情報を読み誤らなければの話だが。

『しかし……』

「ディーウアも心配性だな。いざとなれば、私がもう一度爆撃機で丸ごと焼き払うから大丈夫だよ。私はディーウアの顔がすぐにでも見たい、戻つて来てくれ」

核パトロールの如く、常に爆撃機を上空に待機させればいざという時だつて乗り切れるさ。

『了解致しました。即座に戻つて参ります』

ディーウアも私の話に納得したらしく、頬を赤らめつつ帰還する旨を告げる。

やはり彼女も魔物の死体がそこらに転がっているであろう州境に

は辟易していたのだらう。何だか嬉しそうだ。

「じゃあ、待つてゐからな」

『光栄で御座います！』

ディーウアが空に飛び上がるのを最後に通信は途切れた。
さつき鐘が鳴つたから、今はお昼か。

戦闘攻撃機体型となつたディーウアの最適巡航速度はマッハ四だから、およそ二十分あれば戻つて来る。
どれ、一階で到着を待つ事にしよう。

一階に下りて、居間でお祖父さんとお話をしながらハリハリ一十分が経過する頃。

「おや、誰かが来たようじゃな」

玄関の扉を叩く音にお祖父さんが気付く。

「本当ですね」

ディーウアだらうか？

「私が見に行つて来ますね」

「いや、お母さんに任せておきなや」

何故かお祖父さんに引き留められた。

「ですが、お母さんは今昼食を作つてゐる最中なので私が出た方がいいこと思います」

「なら、儂が応対するかの」

お祖父さんは大義そつとロッキンググチャアから腰を上げる。

「私じゃ駄目ですか？」

「気持ちは嬉しいんぢやがのう。最近は物騒じやから」

お祖父さんは苦笑いしながら私の頭に手を伸ばし、わしゃわしゃと撫でまわしていく。

「はあ」

そういうものか？ 玄関の応対が危険なら、そのうち私は外出も駄目になりそうだな。

過保護は良くないと思つよ、お祖父さん。

「どなたかしり?」

あ、お祖父さんとやり取りしてゐる間にお母さんが玄関の扉を開けちゃつたようだ。

「お久しぶりで御座います。只今帰つて参りました」

ディーウアの声だ。たつた六日しか離れてないし、つこさつき交信したばかりなのに、ひどく懐かしいように思えるのは何でだろ?。

「あらあ、ディーウアちゃんじやない! 元気にしてたかしり?」

「はい、お陰様で」

「お祖父さん! ディーウアなら、問題はないですよね!」

「そうじやな、どれ、儂も一緒に行こう」

私はお祖父さんと連れ立つて居間から廊下に出て、ディーウアの姿を目の当たりにする。

肩に触れそつと伸ばし長さを切りそろえた茶髪は土埃にまみれ光沢を失い、ディーウアの自由裁量で魔力を分解・再構築していくらでも作り変えられる服装も変える余裕が無かつたのかくたくたよれよれだ。

いくらディーウアが魔力で構成された擬似生命だとはいえ、酷使してしまつた事に後悔の念を抱く。

「ディーウア……」

すまない。適度な休息を挟むべきだつたな。

「御主……アレシアちゃん、私はこの通り無事に帰つて参りました」私が近づくのに気付いたディーウアが清々しい笑みを浮かべ帰還を告げる。

疲れてるのに、無理して笑顔なんか作らないでもいいといつのこと。「よく帰つて来ました。今日は存分に休んで下さい」待つてろ。隙を見て魔力を補充してやるから。

「そうね。ディーウアちゃん疲れてように見えるわ。一度横になつて眠るといいわ」

「そうさせて頂きます」

ふらふらよろよろ。何ともおぼつかない足取りのディーウア。

「私が付き添います！」

「そんな。だ、大丈夫ですか！」

大丈夫なんかじゃないだろ！ 口調が魔力節約モードの時の頃に

戻りつつあるじゃないか！

「いいから、二階に行きますよ！」

早く人目につかない場所へ！

理由は分からぬが、背中にお母さんとお祖父さんの生暖かい視線を感じつつ、私は二階の客室へとディーウアの左腕を引っ掴んで連れ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4525p/>

伊吹さんの真相

2011年10月7日16時43分発行